

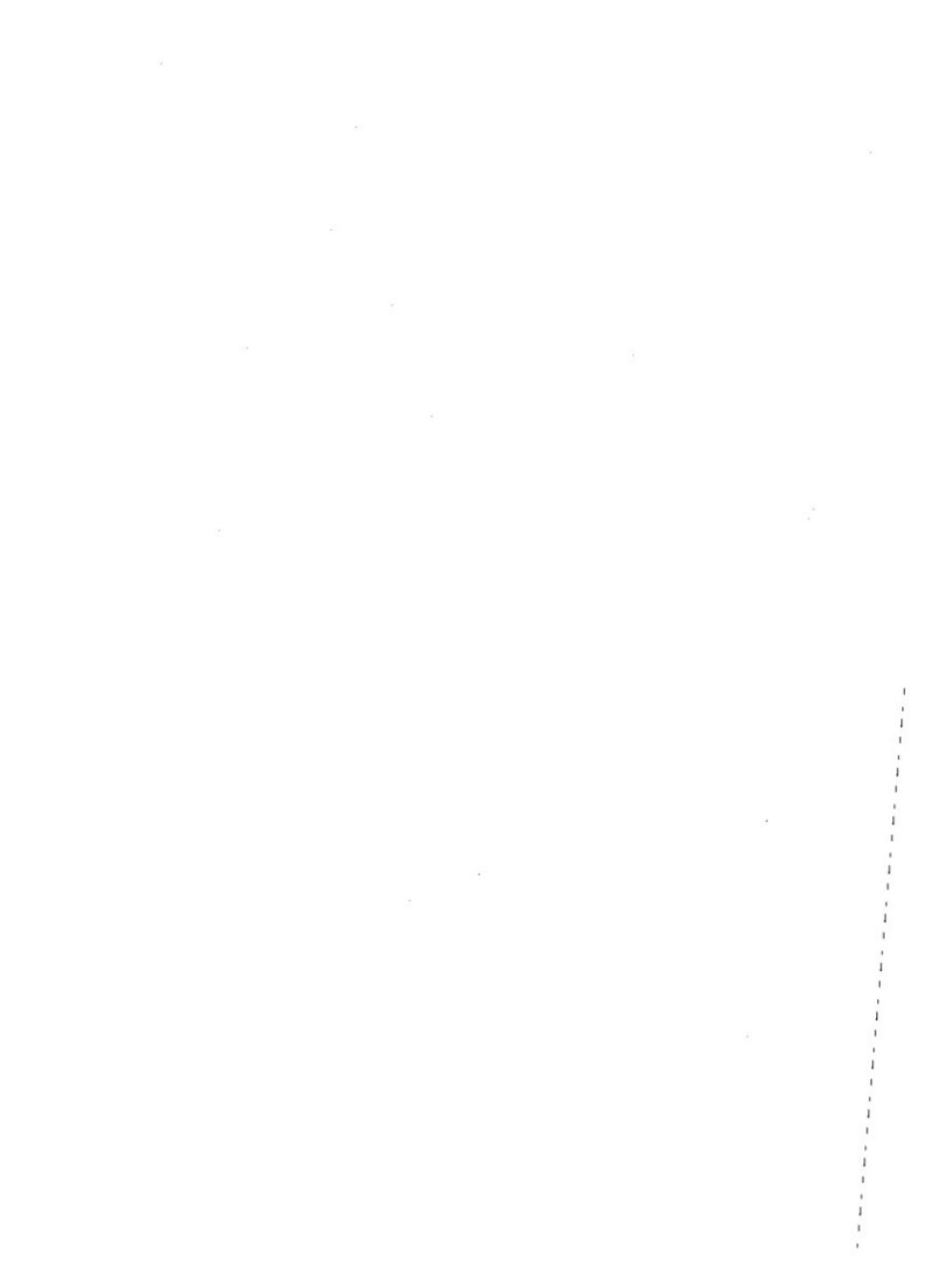
瀬戸山 I 遺跡第3次調査  
古明遺跡

市内遺跡発掘調査報告書

2010

掛川市教育委員会







せどやま  
瀬戸山 I 遺跡第3次調査  
こみょう  
古明遺跡

市内遺跡発掘調査報告書

2010

掛川市教育委員会



## 例　　言

1. 本書は、平成20年度に現地調査を実施し、平成21年度に整理調査を行った、瀬戸山I遺跡第3次調査、古明遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、瀬戸山I遺跡第3次調査が茶畠の改植（茶樹の植え替え）、古明遺跡が住宅建設に伴う緊急調査であり、国および静岡県の補助金を得て、掛川市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査にあたっては、以下の地権者・耕作者・事業者の方々の埋蔵文化財に対する多大なるご理解とご協力をいただいた。(順不同、敬称略)  
鈴木光春、進士憲治、進士統三
4. 発掘作業ならびに整理作業には、次の方々の参加を得た。(五十音順)  
渥美憲鏡、池田正夫、石川昭、石貝保平、笠谷みゆき、早乙女のぞみ、椋葉典子、鈴木辰江、鈴木はつ子、多賀一美、竹田徳子、寺沢巧、徳川浩、葉佐英貴、長谷川勇次郎、深田重男、福田一郎、福田貞夫、藤田弘、藤田房幸、藤田理恵、松浦弘司、松浦良和、溝口玉緒、南沢可奈子、向川隆、山崎シズ、山崎富士
5. 現場調査ならびに報告書作成にあたっては、以下の方々にご教示、ご協力を頂いた。  
向坂綱二、柴田稔
6. 本書の執筆・編集は、掛川市教育委員会生涯教育課文化振興室文化財係の木佐森道弘、大熊茂広  
掛川市教育委員会調整室の戸塚和美が行った。
7. 調査によって得られた資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

## 凡　　例

1. 掘図における瀬戸山I遺跡の方位は座標北である。古明遺跡の北は、発掘区に合わせた任意のものであり、磁北より東へ $3^{\circ}30'$ ずれている。
2. 本書で使用した遺構表記は、次の意味である。  
SB：掘立柱建物跡 SH：竪穴住居跡 SK：土坑  
SP：柱穴・小穴 SX：性格不明の遺構
3. 本書で使用した柱間寸法は、柱穴下場の中心間の数値である。
4. 遺物の番号は、挿図掲載遺物について種類・挿図に関わらず、遺跡ごとの通し番号を付している。  
また、挿図と写真図版番号は同一である。
5. 本書の図中に用いたスクリーントーンの使い分けは  が貼床、  が炉を表す。

# 本文目次

## 例言・凡例

|                     |    |                     |    |
|---------------------|----|---------------------|----|
| I 濑戸山I遺跡第3次調査       | 2  | 古明遺跡                | 67 |
| 1. 調査に至る背景と経緯・調査の目的 | 2  | 1. 調査に至る背景と経緯・調査の目的 | 67 |
| (1)調査に至る背景          | 2  | (1)調査に至る背景          | 67 |
| (2)経緯・調査の目的         | 2  | (2)経緯・調査の目的         | 67 |
| 2. 地理的・歴史的環境        | 2  | 2. 地理的・歴史的環境        | 67 |
| (1)地理的環境            | 2  | (1)地理的環境            | 67 |
| (2)歴史的環境            | 2  | (2)歴史的環境            | 67 |
| 3. 調査の方法と経過         | 3  | 3. 調査の方法と経過         | 68 |
| 4. 調査の内容            | 3  | 4. 調査の内容            | 68 |
| (1)遺構               | 4  | (1)遺構               | 69 |
| ①掘立柱建物跡             | 4  | ①性格不明遺構             | 69 |
| ②竪穴住居跡              | 5  | ②小穴                 | 69 |
| ③土坑                 | 10 | ③北区整地層              | 69 |
| ④性格不明遺構             | 10 | (2)遺物               | 69 |
| (2)遺物               | 11 | 5.まとめにかえて           | 69 |
| ①縄文土器・石器            | 11 |                     |    |
| ②弥生土器・古式土師器         | 13 |                     |    |
| 5.まとめにかえて           | 18 |                     |    |
|                     |    | 付載                  |    |
|                     |    | 瀬戸山I遺跡出土赤色顔料の科学分析   | 75 |

## 挿 図 目 次

|                        |    |                        |    |  |  |
|------------------------|----|------------------------|----|--|--|
| 第1図 遺跡位置図              | 1  | 第36図 SX01実測図           | 54 |  |  |
| 瀬戸山I遺跡第3次調査            |    |                        |    |  |  |
| 第2図 遺構全体図              | 19 | 第37図 出土遺物実測図           | 55 |  |  |
| 第3図 調査地点位置図・グリッド配置図    | 21 | 第38図 出土遺物実測図           | 56 |  |  |
| 第4図 SB01実測図            | 22 | 第39図 出土遺物実測図           | 57 |  |  |
| 第5図 SB02実測図            | 23 | 第40図 出土遺物実測図           | 58 |  |  |
| 第6図 SB03実測図            | 24 | 第41図 出土遺物実測図           | 59 |  |  |
| 第7図 SB04実測図            | 25 | 第42図 出土遺物実測図           | 60 |  |  |
| 第8図 SB05実測図            | 26 | 第43図 出土遺物実測図           | 61 |  |  |
| 第9図 SH01実測図            | 27 | 第44図 出土遺物実測図           | 62 |  |  |
| 第10図 SH02・03実測図        | 28 | 第45図 出土遺物実測図           | 63 |  |  |
| 第11図 SH04実測図           | 29 | 第46図 出土遺物実測図           | 64 |  |  |
| 第12図 SH05・31実測図(1)     | 30 | 第47図 出土遺物実測図           | 65 |  |  |
| 第13図 SH05・31実測図(2)     | 31 | 古明遺跡調査                 |    |  |  |
| 第14図 SH06・07実測図(1)     | 32 | 第48図 調査地点位置図・発掘トレンチ配置図 | 71 |  |  |
| 第15図 SH06・07実測図(2)     | 33 | 第49図 遺構全体図・土層図         | 72 |  |  |
| 第16図 SH08・09・30実測図(1)  | 34 | 第50図 出土遺物実測図           | 73 |  |  |
| 第17図 SH08・09・30実測図(2)  | 35 | 第51図 出土遺物実測図           | 74 |  |  |
| 第18図 SH09遺物出土状況実測図     | 36 |                        |    |  |  |
| 第19図 SH10・29実測図(1)     | 37 |                        |    |  |  |
| 第20図 SH10・29実測図(2)     | 38 |                        |    |  |  |
| 第21図 SH13実測図           | 39 |                        |    |  |  |
| 第22図 SH13遺物出土状況実測図     | 40 |                        |    |  |  |
| 第23図 SH14実測図           | 41 |                        |    |  |  |
| 第24図 SH15実測図           | 42 |                        |    |  |  |
| 第25図 SH17・18実測図(1)     | 43 |                        |    |  |  |
| 第26図 SH17・18実測図(2)     | 44 |                        |    |  |  |
| 第27図 SH19・20実測図        | 45 |                        |    |  |  |
| 第28図 SH21実測図           | 46 |                        |    |  |  |
| 第29図 SH22・23実測図(1)     | 47 |                        |    |  |  |
| 第30図 SH22・23実測図(2)     | 48 |                        |    |  |  |
| 第31図 SH24実測図           | 49 |                        |    |  |  |
| 第32図 SH25・26実測図        | 50 |                        |    |  |  |
| 第33図 SH27・28実測図        | 51 |                        |    |  |  |
| 第34図 SH32実測図           | 52 |                        |    |  |  |
| 第35図 SB06、SK01、SX02実測図 | 53 |                        |    |  |  |

# 図版目次

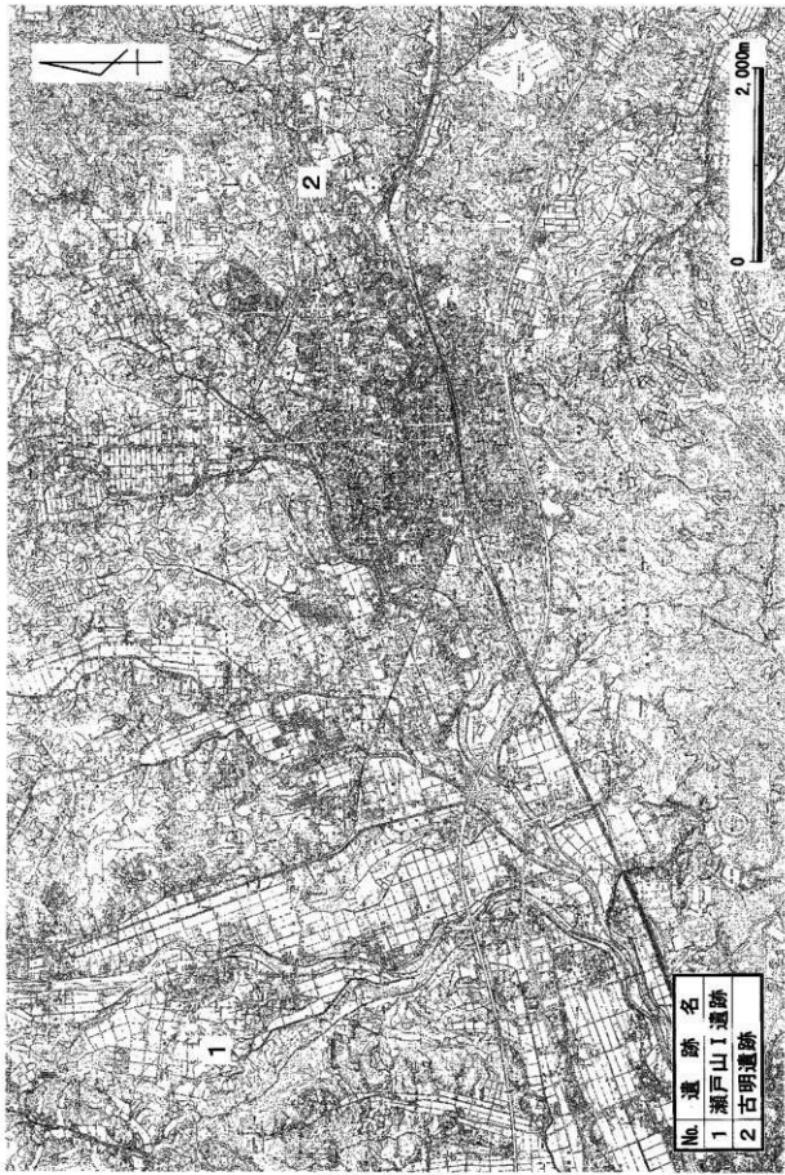
- カラー図版1 濑戸山I遺跡第3次調査全景（東から）（合成写真）  
カラー図版2 濑戸山I遺跡第3次調査SH27赤色顔料（ベンガラ）入り壺出土状況（南から）  
SH27赤色顔料入り壺出土状況（南から）  
赤色顔料入り壺内部の状況

## 瀬戸山I遺跡第3次調査

- 図版1 濑戸山I遺跡第3次調査区遠景（西から）  
瀬戸山I遺跡第3次調査区西半全景（東から）  
図版2 濑戸山I遺跡第3次調査区西半全景（北から）  
瀬戸山I遺跡第3次調査区西半全景（南から）  
図版3 濑戸山I遺跡第3次調査区東半全景（西から）  
瀬戸山I遺跡第3次調査区東半全景（北から）  
図版4 SH08・09・17・18・30完掘状況（北から）  
SH12・13・14・15・01・02、SB03・04完掘状況  
(北から)  
図版5 SH13・14・15・01・02・31、SB03完掘状況  
(東から)  
SH15・32・01、SB03完掘状況（北から）  
図版6 SH20・22、SB01・05完掘状況（東から）  
SH24・25・26、SB01・02、SK01完掘状況  
(東から)  
図版7 SH24・25・26、SB01・02完掘状況（北から）  
SH27・28完掘状況（北から）  
図版8 西半区作業風景（南から）  
SH01・02完掘状況（南から）  
SH03完掘状況（東から）  
図版9 SH04完掘状況（東から）  
SH04遺物出土状況〔1〕（南から）  
SH04遺物出土状況〔2〕（西から）  
図版10 SH04遺物出土状況〔3〕（西から）  
SH06・07・08・09完掘状況（南から）  
SH07床面検出状況（南から）  
図版11 SH09遺物出土状況〔1〕（南から）  
SH09遺物出土状況〔2〕（北東から）  
SH09遺物出土状況〔3〕（北から）  
図版12 SH09遺物出土状況〔4〕（北東から）  
SH109遺物出土状況〔5〕（上層觀察ベルト部分）（南から）  
SH13遺物出土状況（南から）  
図版13 SH15炉検出状況（南から）  
SH17炉検出状況（南から）  
SH22貼床検出状況（南から）  
図版14 SH24貼床検出状況（南から）  
SH24完掘状況（南から）  
SH24遺物出土状況（東から）  
図版15 SH27炉検出状況（南から）  
SK01遺物（土器館）出土状況（東から）  
SP284遺物出土状況（南から）  
図版16 SX01検出状況（東から）  
SX01遺物出土状況（北東から）  
SX02完掘状況（南から）  
図版17 出土遺物〔1〕  
図版18 出土遺物〔2〕  
図版19 出土遺物〔3〕  
図版20 出土遺物〔4〕  
図版21 出土遺物〔5〕  
図版22 出土遺物〔6〕  
図版23 出土遺物〔7〕  
図版24 出土遺物〔8〕  
図版25 出土遺物〔9〕  
図版26 出土遺物〔10〕

## 古明遺跡

- 図版27 古明遺跡南区完掘状況（西から）  
北区完掘状況（北から）  
北区北東隅土層堆積状況（南から）  
図版28 出土遺物〔1〕  
図版29 濑戸山I遺跡出土赤色顔料の科学分析写真



第1図 遺跡位置図

## 瀬戸山Ⅰ遺跡第3次調査

### 1. 調査に至る背景と経緯・調査の目的

#### (1)調査に至る背景

和田岡地区の北西部を占める河岸段丘は、茶栽培が盛んな市内において最も早くから茶生産が行われてきた地域であり、18世紀後半から19世紀初頭の時期には、既に大規模な茶生産が行われていたことが知られている。

静岡県内の茶生産地では、昭和40年代に、古くから栽培されてきた在来茶と呼ばれる雑種茶から「ヤブキタ」を中心とする品種茶への転換（改植）が大規模に行われた。和田岡地区においても、この時期にブルドーザーなどの大型建設機械による改植が全域で実施された。

この時期の改植から30年～50年が経ち、現在は、樹勢の衰えによる生産性低下を回復させるための植え替え、高齢化する農業従事者の負担軽減を図るための大型農業機械導入を目的とした圃場の改良など、これらを目的とする改植がここ数年来盛んになりつつある。

改植にあたっては、耕作土の下層に存在する透水性の低い粘質土と、耕作土や段丘上の表土層である黒褐色土（いわゆる黒ぼく土）を搅拌して土壤改良を行うが、この作業により遺跡の遺構面が破壊される場合、記録保存のための発掘調査を実施している。

#### (2)経緯・調査の目的

今回の調査地については、平成19年度初めに茶畠の改植計画があることを把握し、平成19年7月10・18日に確認調査を実施した。その結果、地表下40cmから、弥生・古墳時代の土器が出土した。この結果を基に耕作者と遺跡保存のための協議を行ったが、遺構までの深度が浅いことから、保護層を確保しての改植は困難との結論に達し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

平成20年6月6日に記録保存のための本発掘調査が適当との副申付けて、県教育委員会に「埋蔵文化財発掘調査の届出書」を進呈した。

これに対し、平成20年6月13日付けで、県教育委員会から耕作者あてに、本発掘調査実施を内容とする「土木工事等のための発掘調査に係る指示について」が通知された。

### 2. 地理的・歴史的環境

#### (1)地理的環境

瀬戸山Ⅰ遺跡は、市北端の山地を源流として、市の西側を南流する原野谷川により形成された原野谷川段丘のなかでも、最も発達した和田岡原と呼ばれる段丘上に位置する。この段丘は、大きく分け標高60m前後の吉岡原と呼ばれる上位面と、標高40～50mの高田原と呼ばれる下位段丘面に区別され、瀬戸山Ⅰ遺跡は上位段丘面に位置する。

#### (2)歴史的環境

瀬戸山Ⅰ遺跡の所在する和田岡地区は、市内でも最も遺跡が密集した地域のひとつである。

この地域の曙光を告げる旧石器時代の遺物としては、平成9年に高位段丘面上の溝ノ口遺跡の調査によりスクラーバーが出土した。また、平成19年度には、今回の調査地点の200mほど西側の瀬戸山II遺跡の発掘調査により、黄茶色頁岩製のスクラーバーが出土している。

縄文時代に入ると、高田上ノ段遺跡から槍先形尖頭器が出土し、縄文時代の嘴矢を告げている。縄文時代早期のものとしては、瀬戸山I・II遺跡などから押型文土器が出土しているが不明な点が多い。

縄文時代中期になると遺跡数も増える。中原遺跡と高田遺跡第17次調査、平成19年度の今坂遺跡第6次調査において石窓い炉を伴った中期の竪穴住居が発見されている。縄文後晩期になると遺跡数は減少するとみられ、この地域での調査例はない。

弥生時代前期の遺跡も、この地域での調査例はない、弥生時代中期の調査事例は、今坂遺跡第6次調査で中期中葉の土器棺墓が発見されている。

弥生時代後期になると、爆発的に遺跡は増加し、特に段丘縁辺部では、今回の瀬戸山I遺跡でみられるように重複関係にある竪穴住居がいたるところで確認されている。

古墳時代前期の集落も弥生時代後期の集落を継続して展開しているが、高田遺跡や今坂遺跡などで、一辺が7mを測る大型竪穴住居が発見されており、弥生時代後期とは異なった展開が考えられる。

古墳時代中期になると段丘縁辺部において、各和金塚古墳・瓢塚古墳など全長60m級の前方後円墳、円墳をはじめとする和田岡古墳群が築かれる。古墳時代中期の遺構として特筆されるのは、平成19年度の今坂遺跡第6次調査で検出された巨大な土坑墓である。古墳の主体部にも遜色ない規模のもので、長軸の推定長5.30m、短軸長2.55mを測り、和田岡古墳群との関連性などが問題となる。

古墳時代後期以降に遺跡の数は激減し、この地域の古代・中世以降の様子もつまびらかではない。

### 3. 調査の方法と経過

調査は、対象地の地形に合わせ、5m方眼のグリッドを設定し、遺物の取り上げ、遺構の実測等の基準とした。グリッドは、東西を西からA～Gまでのアルファベットで、南北は、北から南へ1～8までの数字を付けてA-5、A-6という呼称にした。グリッドの北西に位置する杭にグリッドを代表させた。なお、Aグリッドの西側はWを付けWA-1、WA-2とした。

現場での図面作成は、遺構図を縮尺20分の1と10分の1を併用し、微細図は10分の1とした。

写真撮影は、6×7カメラ1台（プロニー白黒用）と35mmカメラ2台（カラーネガとカラーポジ用）を用いた。

調査は、耕土置場を確保する必要から、東西方向に2分割して行い、平成20年7月15日の準備から開始し、7月22日から前半部分の機械掘削を開始した。9月25日から前半部分の埋め戻しと後半の掘削を開始した。10月31日に埋め戻しを完了して、現地調査を終了した。

検出した遺構の状況を記録するためラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、また調査地点を座標で記録するため基準点測量を実施した。

### 4. 調査の内容

発掘区の東端部分は、過去の茶畠改植により削平され遺構は残っていなかった。発掘区の北西側に竪穴住居が特に重複する部分がみられた。

確認された遺構・遺物の時期は、縄文時代中期から後期、弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時

代中期に分けられる。ここでは、遺構、遺物の順に概要を述べる。

### (1) 遺構

掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土坑、性格不明の遺構について述べる。

#### ① 掘立柱建物跡 (S B)

##### S B O 1 (第4図)

D・E-3区から検出された。梁行1間×桁行3間、規模は、3.15m×5.25mである。

柱穴間の距離は、SP351・355間が3.15m、SP378・499間が3.10m、P355・474間が1.30m、SP474・502間が1.55m、SP502・499間が2.35mである。南側1間の間隔がやや広い。柱穴の深さは、底面の標高でSP351が52.76m、SP355が52.60m、SP378が52.64m、SP499が52.70mを測る。方位はN-7°-Wである。SP351から第39図111の土器、SP362から第39図113の土器、SP502から第39図112の土器が出土している。

##### S B O 2 (第5図)

D・E-4・5区から検出された。梁行2間×桁行3間、規模は、3.05m×6.50mである。

柱穴間の距離は、SP387・391間が1.60m、SP391・511間が1.50m、SP389・325間が1.50m、SP325・513間が1.60m、SP412・SP520間が1.30m、SP520・SP521間が1.70m、SP387・389間が1.55m、SP389・392間が1.60m、SP392・412間が3.30mである。南側1間の間隔が広い。柱穴の深さは、底面の標高でSP387が52.70m、SP391が52.83m、SP511が52.91m、SP392が52.55m、SP516が52.71m、SP412が52.69m、SP520が52.44m、SP521が52.71mを測る。方位はほぼ座標北である。

##### S B O 3 (第6図)

B・C-6区から検出された。梁行1間×桁行3間、規模は、3.00m×4.50mである。

柱穴間の距離は、SP126・169間が1.50m、SP169・164間が1.45m、SP164・162間が2.35mである。柱穴の深さは、底面の標高でSP126が52.43m、SP309が52.44m、SP162が52.55m、SP295が52.45mを測る。方位はN-3°30'-Eである。SP309から第39図の114の土器が出土している。

##### S B O 4 (第7図)

A-6区から検出された。梁行1間×桁行2間、規模は、3.15m×3.10mである。

柱穴間の距離は、SP14・13間が1.60m、SP13・12間が1.55mである。方位はN-4°-Wである。柱穴の深さは、底面の標高でSP25が52.29m、SP14が52.36m、SP43が52.46m、SP12が52.55mを測る。

##### S B O 5 (第8図)

D-3・4区から検出された。梁行1間×桁行2間、規模は、2.70m×3.65mである。

柱穴間の距離は、SP371・378間が1.90m、SP378・387間が1.80mである。方位はN-7°30'-Eである。柱穴の深さは、底面の標高でSP367が52.76m、SP371が52.66m、SP378が52.64m、SP387が52.70mを測る。

## S B O 6 (第35図)

A-5区から検出された。大部分が調査区外にあり規模構造は不明である。

柱穴間の距離は、3.50mを測る。柱穴の深さは、底面の標高でSP111が52.29m、北側の柱穴が52.49mを測る。

## ②堅穴住居跡 (S H)

### S H O 1 (第9図)

A・B-7区から検出された。規模は、南北4.50m、東西4.70mを測る。平面形は、ほぼ正方形を呈する。重複や切り合いの多い今回の調査区の中では、単独で規模が判る数少ない住居跡の一つである。主柱穴は、ほぼ等間隔に並ぶSP137・30・135・29を想定した。主柱穴間の距離は、SP137・30間が2.15m、SP135・29間が2.35m、SP137・135間が1.95m、SP30・29間が1.9mを測り、東西がやや長い。主柱穴の深さは、底面の標高でSP137が52.01m、SP30が52.21m、SP135が52.00m、SP29は52.46mを測る。既に削平されていると考えられ、炉は検出されなかった。掘り方は、壁から約30cmの位置から内側が10cmほど深く掘り下げられている。この部分に灰褐色土が10cmの厚さで堆積しており貼床と考えられる。第39図115～132の土器が床面から出土している。

### S H O 2 (第10図)

A-6区から検出された。規模は、東西5.00m、南北4.10mを測る。平面形は、不整形な梢円形を呈する。東南側がやや不自然に張り出したような平面形を呈することや複数のピットの配列がみられることから、造り替えや複数の住居跡が重複している可能性が考えられる。

主柱穴は、SP49・41・45・34を想定している。主柱穴間の距離は、SP49・41間が1.80m、SP45・34間が1.85m、SP49・45間が2.25m、SP41・34間が2.40mを測り、南北が長く南北を主軸とした配列である。主柱穴の深さは、底面の標高でSP49が52.21m、SP41が52.32m、SP45が52.15m、SP34は52.51mを測る。中央やや東寄り部分から炉を検出した。炉は長径30cmを測る。黒褐色土と黄褐色土を混合した貼床が残っていた。掘り方は、壁から40cmの部分から内側が、南北4.00m深さ10cmほど掘り廻められている。中央やや西寄りの南北方向に2穴並ぶピットは、掘立柱建物SB04の柱穴である。第39図133が覆土中から、134の土器が床面から出土している。

### S H O 3 (第10図)

WA-7区から検出された。大部分が発掘区外にあり一部分がみられるのみで、全体の規模形状は不明確であるが、方形を呈する可能性が高い。實際に幅7cmほどの溝状の窪みがみられ壁溝の可能性がある。主柱穴も不明であるが、検出されたピットの底面の標高は52.22mを測る。第39図135の土器が覆土中から出土している。

### S H O 4 (第11図)

WA-5区から検出された。大部分が発掘調査区外に位置している。全体の形状は、断定できないが、二つのコーナーがみられることから、方形を呈するものと推察される。規模は、東西は不明であるが、南北は4.7mを測る。主柱穴の可能性があるSP110の底面の標高は52.08mを測る。壁際には深さ10cmの壁溝がみられた。第40図136～151の土器が出土している。うち138～140、147は床面から出土している。

#### SH05 (第12・13図)

A-3・4区から検出された南北に長い橢円形を呈する。南側でSH31に切られている。南北の規模は不明である。東西は、4.30mを測る。推定される主柱穴は、SP97・98・102・93を想定している。主柱間の距離は、SP97・98間が2.20m、SP102・93間が2.35m、SP97・102間が3.30m、SP98・93間が3.30mを測る。主柱穴の深さは、底面の標高でSP97が52.52m、SP98が52.37m、SP102が52.27m、SP93が52.35mを測る。第40図152～155の土器が覆土中から出土している。ただし152については、住居跡北東にあるSPII8の上部から出土しておりこの住居跡外の可能性がある。

#### SH06 (第14・15図)

A-2区から検出された。SH07、SH29との切り合い関係は不明確である。平面形は、南北に長い長方形と想定される。南北の規模は不明である。東西は4.80mを測る。主柱穴は、SP87・85・117・128を想定している。主柱間の距離は、SP87・85間が2.25m、SP117・128間が3.40m、SP87・117間が3.50m、SP85・128間が3.15mを測り、南北がやや長くなる。主柱穴の深さは、底面の標高でSP87が52.59m、SP85が52.60m、SP128が52.58mを測る。住居跡中央やや北寄り部分から炉を検出した。炉は長径35cmを測る。第41図156～158の土器が覆土中から出土している。

#### SH07 (第14・15図)

A-1区から検出された。SH06、SH08との切り合い関係は不明確である。南北の規模は不明である。東西は5.40mを測る。平面形は方形を呈すると想定される。主柱穴は、SP80・86・82・84を想定している。主柱間の距離は、SP80・86間が2.70m、SP82・84間が2.50m、SP80・82間が2.70m、SP86・84間が2.70mを測りほぼ正方形の配列である。主柱穴の深さは、底面の標高でSP80が52.58m、SP86が52.62m、SP82が52.61m、SP84が52.68mを測る。ほぼ全面に貼床がみられた。中央やや北寄りから炉跡を検出した。炉は長径60cmを測るが規模が大きく形状も不自然であることから造り替えの可能性が考えられる。壁際に深さ5cmほどの溝状の窪みがみられた。

#### SH08・09 (第16・17・18図)

SH08は、B-1区から検出された。SH07・09・29との切り合い関係は不明確である。平面形は、不明である。東西の規模は6.60m、南北は不明である。主柱穴は、SP202・201・204・203を想定している。主柱間の距離は、SP202・201間が3.60m、SP204・203間が3.30m、SP202・204間が2.60m、SP201・203間が2.40mを測り東西がやや長くなる。主柱穴の深さは、底面の標高でSP202が52.51m、SP201が52.48m、SP204が52.59m、SP203が52.60mを測る。西側壁際に深さ5cmほどの溝状の窪みがみられ壁溝の可能性がある。

SH09は、B・C-1・2区から検出された。SH08・17・30との切り合い関係は不明確であり、全体の規模と形状も不明確である。主柱穴も不明確だが、SP280・281・206・251の可能性が考えられる。西側と北東の壁際に深さ5cmの溝状の窪みがみられ壁溝の可能性がある。SH09の上面からは、土器溜まりが検出され第41図159～171、第42図172～179、第43図180～188、第44図189～199をはじめとする多くの土器が出土している。

#### SH10 (第19・20図)

B-3区から検出された。SH05・29との切り合い関係は不明確であり、全体の規模と形状も不明

確である。主柱穴は、SP220・215・227・240を想定している。主柱間の距離は、SP220・215間が3.10m、SP227・240間が3.40m、SP220・227間が3.10m、SP215・240間が3.20mを測りほぼ正方形の配列である。主柱穴の深さは、底面の標高でSP220が52.61m、SP215が52.31m、SP227が52.57m、SP240が52.43mを測る。SP220付近に貼床がみられた。すでに削平されていると考えられ炉は検出されなかった。第44図200～202の土器が覆土中から出土している。

### SH13（第21・22図）

B・C-4区から検出された。SH11・12を切っていると考えられ、SH14に切られていると考えられる。なおSH11・12については規模形状とともに不明確である。SH13の規模は、南北5.60m、東西5.30mを測る。平面形は正方形を呈する。主柱穴は、SP195・135・192・234を想定しているが、SP196・137・189・233など複数の配列も考えられ、北東隅に壁から40cmほど高い部分があることから、建て替えが想定される。主柱間の距離は、SP195・135間が2.40m、SP192・234間が2.40m、SP195・192間が2.00m、SP135・234間が2.00mを測り、やや東西が長い。主柱穴の深さは、底面の標高でSP195が52.38m、SP135が52.27m、SP192が52.16m、SP234が52.18mを測る。中央やや南寄りから炉を検出した。炉の長径は25cmを測る。床面から第45図203～206の土器が出土している。

### SH14（第23図）

B・C-5区から検出された。SH13を切っていると考えられる。規模は、南北3.80m、東西5.30mを測る。東西を長軸とする隅円長方形を呈する。主柱穴は、SP188・319・186・315を想定しているが、SP223・320がSP188・319に平行して存在することから、建替えの可能性もある。主柱間の距離は、SP188・319間が2.80m、SP186・315間が2.75m、SP188・186間が1.55m、SP319・315間が1.65mを測り、東西が長い。主柱穴の深さは、底面の標高でSP188が52.33m、SP319が52.36m、SP186が52.36m、SP315が52.35mを測る。中央北寄りから炉を検出した。炉の長径は70cmを測る。3方に壁溝がみられた。掘り方は壁際30cmから内側がやや掘り下げられていた。

### SH15（第24図）

C-6区から検出された。規模は、南北3.00m、東西3.00mを測り、ほぼ正方形を呈するが、主柱穴と壁が近すぎるので本来は規模が大きかった可能性がある。また西側の張り出し状部分は別の遺構と考えられる。主柱穴は、SP310・308・303・306を想定している。主柱間の距離は、SP310・308間が2.15m、SP303・306間が2.10m、SP310・303間が1.80m、SP308・306間が1.95mを測り、ほぼ正方形の配列である。主柱穴の深さは、底面の標高でSP310が52.60m、SP308が52.58m、SP303が52.48m、SP306が52.56mを測る。中央から炉を検出した。炉の長径は40cmを測る。

### SH17（第25・26図）

C・D-1・2区から検出された。SH09・SH18との切り合い関係は不明確である。平面形と規模についても不明確である。主柱穴は、SP283・330・278・337を想定しているが、SP282・279・336・338など複数の配列が考えられ、立替えが想定される。主柱間の距離は、SP283・330間が2.50m、SP278・337間が2.60m、SP283・278間が2.50m、SP330・337間が2.45mを測りほぼ正方形の配列である。主柱穴の深さは、底面の標高でSP283が52.73m、SP330が52.72m、SP278が52.54m、SP337が52.68mを測る。中央から炉を検出した。炉の長径は70cmを測るが規模が大きいことから造り替え

の可能性が考えられる。第45図207の土器が覆上中から出土している。

#### SH18（第25・26図）

C・D-2区から検出された。SH17など複数の遺構と切り合っていると考えられ切り合い関係は不明であり、規模構造も不明確であるが、SP279・339・243・349・338・347・244の配列が考えられる。第45図208～213、第46図214～217の土器が出土しており、209～216が床面から出土している。

#### SH19（第27図）

D・E-1区から検出された。一部が発掘区外に及んでいる。規模は、南北4.25m、東西4.65mを測る。ほぼ正方形を呈する。主柱穴は、SP328・331・447想定している。主柱間の距離は、SP328・331間が2.10m、SP331・447間が2.30mを測り、ほぼ正方形の配列である。主柱穴の深さは、底面の標高でSP328が52.76m、SP331が52.78m、SP447が52.87mを測る。すでに削平されていると考えられがれは検出されなかった。

#### SH20（第27図）

C・D-3区から検出された。規模は、南北3.10m、東西4.10mを測る。東西に長い隅円の長方形を呈する。主柱穴は、SP324・367と考えられるが、南側の主柱穴は確認されなかった。主柱間の距離は、SP324・367間が1.55mを測る。主柱穴の深さは、底面の標高でSP324が52.82m、SP367が52.76mを測る。すでに削平されていると考えられがれは検出されなかった。

#### SH21（第28図）

E-3・4区から検出された。規模は、南北3.60m、東西4.20mを測る。やや東西が長い方形を呈する。主柱穴は、SP376・500・379・508を想定している。主柱間の距離は、SP376・500間が2.10m、SP379・508間が2.10m、SP376・379間が1.85m、SP500・508間が1.80mを測り、やや東西方向に長い。主柱穴の深さは、底面の標高でSP376が52.73m、SP500が52.76m、SP379が52.60m、SP508が52.60mを測る。掘り方は壁から50cm内側が掘り窪められていた。すでに削平されていると考えられがれは検出されなかった。

#### SH22（第29・30図）

D-5区から検出された。SH23を切っている。規模は、南北3.80m、東西4.40mを測る。やや東西が長い方形を呈する。主柱穴は、SP409・393・399・411を想定している。主柱間の距離は、SP409・393間が2.60m、SP399・411間が2.20m、SP409・399間が2.05m、SP393・411間が2.20mを測り、ほぼ正方形の配列である。主柱穴の深さは、底面の標高でSP409が52.36m、SP393が52.34m、SP399が52.31m、SP411が52.27mを測る。中央部分に明褐色土の貼床がみられた。中央やや北寄りから2箇所の炉を検出したが新旧関係は不明である。炉の大きさは北側が40cm、南側が35cmを測る。

#### SH23（第29・30図）

D-5・6区から検出された。SH22に切られている。規模と形状は不明確である。

主柱穴と考えられるピットの配列が2つ想定される。SP398・396・415・414、SP413・412・402・401である。前者には炉が付隨している。炉の長径は、50cmを測る。複数の住居が重複していると想

定される。主柱間の距離は、SP398・396間が2.75m、SP415・414間が2.70m、SP398・415間が2.20m、SP396・414間が2.20mを測り、東西がやや長い。主柱穴の深さは、底面の標高でSP398が52.44m、SP396が52.40m、SP415が52.40m、SP414が52.32mを測る。もう一つの組み合わせのものは、SP413・412間が1.70m、SP402・401間が1.70m、SP413・402間が2.00m、SP412・401間が2.00mを測り、南北がやや長い。主柱穴の深さは、底面の標高でSP413が52.72m、SP412が52.69m、SP402が52.51m、SP401が52.48mを測る。

#### SH24（第31図）

E-2・3区から検出された。東側が耕作により削平されている。規模は、南北4.20mを測る。主柱穴は、SP478・481・479・483を想定している。主柱間の距離は、SP478・481間が2.70m、SP479・483間が3.00m、SP478・479間が1.90m、SP481・483間が2.30mを測り、東西が長い。主柱穴の深さは、底面の標高でSP478が52.67m、SP481が52.78m、SP479が52.65m、SP483が52.63mを測る。全体に黒褐色土の貼床がみられた。中央やや北寄りから炉を検出した。炉の大きさは40cmを測る。第46図218の土器が覆土中から出土している。

#### SH25・26（第32図）

E・F-4から検出された。不整形で形状規模は不明である。東側中央から炉が検出された。炉の規模は長径60cmを測る。主柱穴は、SP542・545・534・549を想定している。主柱間の距離は、SP542・545間が2.20m、SP542・534間が2.50m、SP545・549間が2.00mを測る。主柱穴の深さは、底面の標高でSP542が52.62m、SP545が52.61m、SP534が52.50m、SP549が52.63mを測る。第46図219の土器が覆土中から出土している。

#### SH27（第33図）

E-7区から検出された。SH28を切っている。規模は、南北4.60m、東西4.20mを測る。平面形は、隅円方形である。主柱穴は、SP589・590・591・592を想定している。主柱間の距離は、SP589・590間が1.70m、SP591・592間が1.80m、SP589・591間が2.05m、SP590・592間が2.10mを測り、南北が長い。主柱穴の深さは、底面の標高でSP589が52.36m、SP590が52.33m、SP591が52.23m、SP592が52.23mを測る。全体に明黄褐色土の貼床がみられた。中央北寄りから炉を検出した。炉の規模は長径45cmを測る。遺構上面から第46図220の壺が出土している。この壺の中には赤色の顔料が満たされていた。顔料は科学分析の結果、酸化鉄を主成分とする「ベンガラ」であることが判明している。この報告書の末尾に分析結果を付載している。

#### SH28（第33図）

F-6・7区から検出された。SH27に切られており、南東部分も擾乱により削平されており全体の規模と形状は不明確である。主柱穴も不明確であるが、SP630・625・619・631・626・620が想定される。主柱間の距離は、SP630・625間が2.70m、SP625・619間が1.95m、SP631・626間が1.70m、SP626・620間が1.85mを測る。中央やや西寄り部分に複数の焼土がみられ、炉の可能性がある。

#### SH29（第19・20図）

A・B-2区から検出された。SH06・09・10との切り合い関係は不明確である。規模等も不明確であ

るが、北側にみられる壁の形状から方形を呈すると考えられる。主柱穴は、SP120・205・119・208を想定している。主柱間の距離は、SP120・205間が3.05m、SP119・208間が3.20m、SP120・119間が2.20m、SP205・208間が2.25mを測り、東西が長い。主柱穴の深さは、底面の標高でSP120が52.49m、SP205が52.57m、SP119が52.47m、SP208が52.46mを測る。SP205からSP208付近に貼床が残る。南東隅から炉を検出したが、主柱穴の外側に位置し、重複する他の住居のものであると考えられる。

### SH30 (第16・17図)

B・C-2区から検出された。SH09・18との切り合い関係は不明確であり、平面形・規模も不明確である。主柱穴は、SP206・251・215・243を想定している。主柱間の距離は、SP206・251間が3.00m、SP215・243間が3.05m、SP206・215間が2.90m、SP251・243間が2.85mを測る。主柱穴の深さは、底面の標高でSP206が52.23m、SP251が52.15m、SP215が52.32m、SP243が52.49mを測る。炉を検出したが、位置的に偏り過ぎていることから、重複する他の住居のものであると考えられる。第46図221の土器が覆土中より出土している。

### SH31 (第12・13図)

A-4区から検出された住居跡である。SH05を切っている。平面形は東西に長い楕円形と推定される。主柱穴は、SP94・104・103・106を想定している。主柱間の距離は、SP94・104間が2.80m、SP103・106間が2.70m、SP94・103間が2.20m、SP104・106間が2.00mを測り、東西に長い配列である。主柱穴の深さは、底面の標高でSP94が52.31m、SP104が52.47m、SP103が52.38m、SP106が52.31mを測る。第46図222、223の土器が覆土中より出土している。

### SH32 (第34図)

B・C-7区から検出された。中央西寄りから炉を検出している。平面形と規模は不明確である。主柱穴も不明確であるが、炉の周辺のSP166・301・158・286・167・159・161が考えられる。主柱間の距離は、SP166・301間が2.40m、SP158・286S間が2.40m、SP166・158間が2.90m、SP301・SP286間が3.10m、SP159・SP161間が1.80mを測る。主柱穴の深さは、底面の標高でSP166が52.55m、SP301が52.65m、SP158が52.51m、SP286が52.67m、SP159が52.62m、SP161が52.51mを測る。

### ③土坑 (SK) (第35図)

#### SK01 (第35図)

F-3区から検出された土坑で、直径45cm深さ20cmを測り第46図224の壺が立った状態で入れられていた。壺は肩から上を欠くが、最大径28.6cm、現存高さ22.3cmを測る大型であり土器棺の可能性が高い。覆土は暗褐色土である。

#### ④性格不明遺構 (SX)

#### SX01 (第36図)

C-7から検出された。長さ20~30cmの砾と土器が集中していた。長径2.00m、深さ35cmを測る。第47図230~237の土器が出土している。その内233、234の壺は中心部から破片で集中して出土している。

## S X O 2 (第35図)

F-5から検出された。長径1.80m、深さ30cmを測る。

## (2)遺物

出土遺物は、縄文時代中期から晩期にかけての土器・石器、弥生時代後期から古墳時代前期・中期にかけての土器が出土している。その出土量は、縄文時代の遺物がおおよそコンテナケース(650mm×450mm×100mm)1箱分、弥生時代・古墳時代がおおよそコンテナケース(650mm×450mm×210mm)30箱分である。以下、時代順に説明していく。

## ①縄文土器・石器

## 縄文土器 (第37・38図)

瀬戸山I遺跡の調査で出土した縄文土器は、すべて破片である。そのうち縄文土器103点、土製品3点について報告する。

今回の調査では、縄文時代の遺構として確認されたものはなかった。ほとんどの土器が弥生時代～古墳時代の遺構の覆土中もしくは遺物包含層である黒色土からの出土である。また、多くの破片は、小片で摩耗が進んでいるものが多いことから、攪乱された状況にあると考えられる。そのため、縄文土器の出土状況は、調査区南西寄りから比較的多く出土している傾向はあるが、それをもって縄文時代の遺構分布の復元をする事は難しい状況であると思われる。

今回の調査で出土した縄文土器の時期は、中期初頭から晩期と考えられるものが見られるが、断続的である。そのうち、結節縄文が施された中期後半と考えられる土器が多く見られることは、特徴としてあげられる。

1は、半截竹管による連続する爪形文の上下に三角印刻文が施される、浅鉢の口縁部である。中期初頭に位置付けられるものと考えられる。2は、横位の平行沈線文の下に半截竹管によると考えられる印刻文を施す。3は、「く」の字に屈曲する口縁部である。半截竹管により縦位、横位の沈線文が施されている。4は、半截竹管による連続する爪形文が施されている。5は、口縁部片で、口唇には斜位の連続する爪形状の文様が見える。6～24までは、沈線等による縦位の区画を施し、その内に結節縄文を施すものである。いずれも深鉢胴部と考えられる。6は、ちょうど縦の沈線で欠けているが地文にL Rの縄文を施している。7は、貼付隆帯により縦に区画している。8は、縦位の沈線はごく浅く弱く、結節縄文は2条単位で見られる。9は、縦位の沈線部分で欠けており、2条の結節縄文が見える。10は、深鉢口縁部から胴部にかけての破片で、今回の調査で出土した土器のうち、最も大きいものである。口縁部は、ごく緩やかに波を打つ。沈線により「匂」状に区画し、区内には結節縄文が施されている。区画文の間には、さらに1本沈線が引かれる。11は、2本の沈線が施される。12は、ごく浅い弱い沈線（箇状の施文具による？）が施される。13は、貼付隆帯と沈線により区画されている。14は、細い沈線で区画される。15～24までは、沈線等による縦位の区画がされていると考えられるものである。15は、半截竹管によると考えられる細い沈線で区画され、2条の結節縄文が見られる。16は、断面が丸い沈線による区画がされる。17は、ごく浅く弱い沈線で区画される。18は、貼付隆帯により区画される。19は、沈線で欠けている。20は、10と同様の沈線による区画と考えられる。21は、丸みのある浅い沈線が引かれ、地文にR Lの縄文が施されている。22は、断面が丸い2本の沈線が施される。23は、浅い2本の沈線が施される。24は、丸みのある断面の浅い2本の沈線が見え、地文にはR Lの縄文が施されている。25～36までは、沈線等が施文されるものである。25は、地

文にLRの縄文を施している。26は、10と同様の文様と考えられる口縁部である。27は、低い貼付隆帯が見られる。28は、RLの縄文を施し、断面が丸い2本の平行沈線が引かれている。29は、LRの縄文を施し、浅い2本の平行沈線が引かれている。30は、断面が丸い浅い沈線が引かれている。31は、無節の縄文が施され、浅い2本の沈線が施される。この土器片は、縁が丸くなってしまっており、土製円盤の可能性がある。32は、RLの縄文が施され、浅い2本の沈線が施される。33は、口縁部で、沈線で区画した内に縄文を施している。34は、2本の沈線が見えるが、無文である。35は、口縁部で、弧を描く沈線の内に結節縄文が見える。36は、波状の平行沈線に区画された内に結節縄文が見える。37~40までは、無文の口縁部片である。37は、やや内湾する。38もごくわずかに内湾する。39は、外に傾く。40は、やや内湾し下がり、外反する。41~47は、無文の口縁部片である。41は、「く」の字に屈曲する。42は、口縁がやや肥厚する。43は、口唇を平らに仕上げている。44は、緩やかに内湾する。45は、ごく緩やかに波立つ口縁で、屈曲部あたりから下には縄文(RLか)が施文されている。また、特徴的なこととして、いわゆる補修孔がひとつ見られるが、孔は内面と外面の両側から穿孔されているが、穿孔途中の状態で貫通していない。46は、口唇を平らに仕上げ、口縁部は上から親指を内面に、人差し指・中指を外面に当て押さえている。47は、丸い突起状の口縁部で水平方向の稜を持つ。48~50・52・54は、縄文が施された口縁部片である。48は、丸みのある口縁部で、横位→斜位のLRの縄文が施される。また、口唇には2本単位の棒状の施文具による刺突文が見られる。49は、LRの縄文が施されている。50は、緩やかに外反する。RLの縄文が施される。52は、口唇に向かって鋭角にすばまる。LRの縄文が施される。54は、口唇が肥厚する。RLの縄文を施している。51・53は、ともにLRの縄文が施された胸部片である。55・56は、半截竹管の端部による刺突文が施された胸部片である。57は、丸みのある口縁部で、水平方向の沈線の下に「匂」状の沈線による区画をし、内にはLRの縄文を充填している。58は、やや内湾する丸みのある口縁部で、沈線により隅丸方形状に区画し、内に半截竹管による縦位の条線を施している。59は、肥厚し口唇に向かってすばまる、やや内湾する口縁部である。横位の浅い沈線が引かれている。60は、器厚が薄手の胸部片で、半截竹管によると考えられる弧を描く平行沈線文が施され、内には縄文が充填されている。61は、折り返しにより形成された内湾する口縁部で、箇状の工具による梢円形の区画を設け、内にはRLの縄文を施している。区画文の間には、指頭によると考えられる円形の刺突が見られる。62は、弧を描く貼付隆帯に縄文を施した胸部片である。63は、弧を描く平行沈線を施した口縁部片である。64は、丸みのある口縁部近くの破片と考えられ、無文帶の下に縦位・横位の沈線文が施文されている。65は、ごく低い隆帯の下に弧を描く沈線文が施文される。66は、沈線文が施された丸みを帯びた胸部片である。67は、LRの縄文が施文されている。68は、RLの縄文が施文されている。69は、縄文が施されている。70は、RLの縄文が施される。71は、細かい条線を施文した後にRLの縄文を施している。72は、RLの縄文を施文した後に半截竹管による縦位の沈線文を施文している胸部片である。73は、横位の貼付隆帯上に半截竹管による押引文を施し、以下には縄文(LRか)を施文している口縁部片である。74は、横位の貼付隆帯上に押引文を施文し上下に縄文が施された胸部片である。75は、横位の貼付隆帯上に半截竹管による連続刺突文を施文し、以下に半截竹管による弧を描く沈線文、竹管による押圧文を施している。76は、縦位の貼付隆帯上に押引文を施している。77は、肥厚した口唇を持ち丸みを帯びた無文の口縁部片である。78は、折り返しの口唇を持ち、半截竹管により弧を描く沈線文が施文された口縁部片である。79は、縦位から斜位の条線文を施文した後に横位の平行沈線を施文した口縁部片である。80は、竹管(若しくは半截竹管)と考えられる施文具で横位の連続刺突文が施された口縁部片である。81は、半截竹管による横位の平行沈線を施文した口縁部片である。82は、横位の沈線間に無節

の繩文を斜位に施文した口縁部片である。83は、半截竹管の端部を押しあてた短い沈線文が施された口縁部片である。84は、欠損が著しいが、半截竹管により縦位の沈線文を施し、竹管の表皮側で口唇に押圧痕を施した口縁部片である。85は、断面の丸い4本の沈線を縦位に施文した胴部片である。86は、半截竹管により、ごく浅い斜位の沈線が施文された胴部片である。87は、半截竹管による縦位・斜位の沈線文が施文された胴部片である。88は、斜位の沈線文（直線と波状）が施文された胴部片である。89は、横位の沈線文が施されている。90は、半截竹管による弧を描く縦位の沈線文が施文された胴部片である。91は、口唇を久くが、内湾して立ち上がり、「く」の字に屈曲する口縁部片である。外面には半截竹管による縦位の条線文が施されている。92は、縦位の条線文が施文された胴部片である。93は、半截竹管による縦位の条線文が施文された胴部片である。94は、縦位の太い隆帯による貼付文の際に沈線文が施文された胴部片である。95は、R Lの繩文を地文とし、やや細い貼付隆帯文が施されている胴部片である。96は、半截竹管による「く」の字状の沈線文が施文されている。97は、薄手の破片で、「へ」の字状の沈線文が施文されている。98は、内側に折り返しを持ち、外面に横位の隆帯を貼付した口縁部片である。99は、緩い波状を呈すると考えられる口縁部片で、口唇と平行する沈線文が施されている。100は、口唇に低い突起が付く可能性がある口縁部片で、口唇と平行する沈線文が施されている。101は、口唇に波状に連続する押圧が加えられた口縁部片で、外面には横位の条痕文が、内面には横位の沈線が施文されている。102・103は、外反する口縁部片で、横位の条痕文が施されている。晚期に位置付けられるものと考えられる。

#### 土製品（第38図）

ここでは土製円盤3点について記述する。104は、器面が削れている。長径3.21cm、短径3.10cm、厚さ0.89cmを測る。105と106は、破片の縁が丸くなっているため土製円盤として取り上げた。105は、長径3.95cm、短径3.16cm、厚さ0.76cmを測る。L Rの繩文を施し縦横直角に沈線が引かれている。106は、長径4.67cm、短径3.64cm、厚さ0.87cmを測る。2つの結び目のある結節繩文が施文されている。

#### 石器（第38図）

今回の調査で出土した石器は少ない。ここでは、製品である4点（石鎌1点、石匙1点、磨製石斧1点、用途不明の石器1点）について報告する。

107は、欠損している黒曜石製の凹基無茎鎌である。現状の最大長1.53cm、現状の最大幅1.47cm、最大厚0.82cm、重量0.725gを測る。108は、黒曜石製の石匙である。最大長1.72cm、最大幅1.05cm、最大厚0.23cm、重量0.40gを測る。摘んで使うにしても使いにくいのではないかと思うほど小さく、実用品ではないかもしれない。109は、磨製石斧である。最大長14.1cm、最大幅6.6cm、最大厚4.4cm、重量728gを測る。刃先は側面にまで及ぶ広い範囲で敲かれたように潰れている。110は、砂岩製の用途不明の石器である。最大長15.5cm、最大幅4.6cm、最大厚4.1cm、重量491gを測る。形態は磨製石斧に類似するが、刃が付けられておらず、端部は磨られたように滑らかである。握って磨石のように使用したものとも考えられる。

#### ②弥生土器・古式土器（第39図～47図）

111～113は、SB01の柱穴出土である。111は、壺の口縁部片で、全体に磨滅が著しいが、外面にはハケ目が確認できる。112は、高环の环部片で、口縁部には屈曲がみられる。113は、壺の底部片であ

る。114は、SB02の柱穴から出土した壺の頸部片で、細長い円形浮文を貼付し、櫛刺突羽状文が施される。115～132は、SH01出土である。115は、壺の口縁から頸部片で、内外面にハケ目が確認できる。116・117は、どちらも壺の底部片で、磨滅が著しい。118は、台付壺の胴部片で、内外面に斜位のハケ目が施されている。119は、S字状口縁壺の底部片である。120は、複合口縁壺（柳ヶ壺タイプ）の口縁から頸部片で、頸部にはミガキが確認できる。121は、高环の胴部片である。122は、器台で、器部の約半分を欠損し、内外面とも磨滅が著しい。123・124は、どちらも高环の坏部片で、123は、磨滅が著しいが、124は、ミガキが確認できる。125は、器台の台部片である。126～128は、高环の脚部片で、126・128は、ハの字状を呈し、127は、エンタシス状を呈し、ミガキ痕が確認できる。129は、丸底辺で、外面口縁部には横ナデ、頸部にはハケ目、胴部にはナデが施されている。内面口縁部にはハケ、胴部にはナデが施されている。130・131は、同一個体となる小型広口壺で、底部は丸底を呈す。132は、ミニチュアの台付壺で、口縁端部をわずかに屈曲させ壺としての口縁を形成している。台部には指頭痕が目立つ。

133・134は、SH02出土である。133は、台付壺の口縁部片で、口縁端部にキザミが施され、胴部にはハケが施されている。134は、高环の脚部片である。

135は、SH03出土の壺底部片で、外面にはミガキが施され、内面にはハケが施されている。136～151は、SH04出土である。137は、折り返し口縁壺で、口縁端部にキザミが施されている。138は、壺の口縁部片で、外面は丁寧に横ナデされている。139は、壺の胴部片で、下膨れ状を呈す。胴部上半にはハケが施され、下半はナデ消しされている。140は、球形の胴部をもつ壺で、口縁部は丁寧に横ナデされ、胴部にはナデが施されている。143は、S字状口縁壺の底部片である。136は、高环の口縁部片で、口縁端面には繩文が施され、その下端にはキザミが施されている。外面にはハケが施されている。口縁内面には繩文が施され、坏部にはミガキが施されている。141・142は、高环の脚部片で、どちらも櫛刺突羽状文が施されるが、142は、明瞭である。144は、高环の坏部片で、口縁を鉗状に折り、口縁端部も折り返して坦面を設けている。外面は全面に細かいハケが施され、内面では口縁部にナデ調製前のハケが施される他はナデが施されている。145は、高环の坏部片で、内外面ともに横ナデが施されている。146も高环の坏部で、内外面ともにミガキが施されている。147・148は、高环で、どちらも口縁の一部を欠損する。どちらも直線的に立ち上がる坏部と、ハの字状に広がる脚部をもつ。147は、内外面ともに磨滅が著しい。148は、坏部と脚部端部に横ナデが施され、脚部にはナデ調製前のハケが確認できる。149は、高环の脚部片で、接合部には櫛刺突羽状文が施されている。150は、小形丸底辺である。151は、小形鉢で、口縁部付近でやや内彎して立ち上がる。外面にはハケが施され、内面はナデが施される。152～155はSH05出土である。152は、口縁部を欠損する壺で、胴下半に最大径を有し、そこに明瞭な綾をもつ。頸部には櫛刺突羽状文が2段に亘って施されるが、胴部は磨滅が著しい。153は、壺の底部片で、内外面ともに明瞭なハケが施される。154も壺の底部片で、内外面ともにハケが施される。155も壺の底部片である。

156～158は、SH06出土である。156は、複合口縁壺の口縁部片で、端部から口縁部には単節繩文が施され、円形浮文が貼付される。頸部にはハケが施される。内面には上から櫛波状文、櫛扇形文、櫛波状文の順に施される。157は、壺の口縁部片で、ハケが施される。158は、高环の接合部片で、明瞭な櫛刺突羽状文が施されている。

159～199は、SH09出土である。159は、複合口縁壺の口縁から頸部片で、口縁は直線的に立ち上がる。口縁部は磨滅しているが、羽状繩文が施され、頸部には細かいハケが確認できる。160も複合口縁壺の口縁部片で、口縁はやや内彎気味に立ち上がる。外面にはS字状結節繩文が施され、口縁下端

には円形浮文が貼付される。内面は磨滅が著しいが、S字状結節繩文が確認できる。163は、壺の口縁部片で、全体に磨滅が著しいが、口縁外面端部と口縁内面には繩文が施されており、頸部にはハケ目が確認できる。164は、壺の頸部片で、頸部の屈曲が強い。外面には上からハケ、ミガキ、櫛波状文、櫛刺突羽状文が施され、円形浮文を貼付している。口縁内面には櫛波状文が施されている。166は、壺の胴部片で、胴があまり張らないズンギリとしたプロポーションを呈す。外面には肩部に櫛刺突羽状文が2段半に亘って施され、胴部には羽状繩文が施されている。口縁内面には羽状繩文が施されている。167は、壺の頸部片で、外面肩部には櫛波状文の上下に櫛横押縫文が施され、その下に円形浮文を貼付し、さらにその下に繩文が施されている。168は、壺の頸部片である。頸部の屈曲が明瞭で、肩部は断面三角形状の稜が巡る。頸部はハケ目調製の後ナデ消しされ、肩部には櫛羽状文が施されている。169は、壺の胴部片で、胴下半に最大径と明瞭な綾をもつ。外面には上から櫛刺突羽状文2段、櫛押し引き状の横線文が20段程に亘って施され、さらにその下には羽状繩文が施され、稜線下にはミガキが確認できる。170は、複合口縁壺の口縁部片で、内面はナデが施されている。171は、壺の胴部片で、外面は磨滅が著しいが、内面にはナデが確認できる。172は、壺で、口縁の一部を欠損する他はほぼ遺存する。口縁端部を折り返し、肩部は断面三角形の綾を巡らせている。胴部はズンギリとしたプロポーションで、胴過半に最大径をもつ。口縁端部は横ハケ後にキザミを施し、頸部は縦ハケをナデ消している。肩部綾线下に櫛刺突羽状文が2段半に亘って施され、胴部では縦位と横位のハケを施している。胴下半にはハケ調整後ミガキを施している。173は、大型壺の頸部片で、全体に磨滅が著しいが、ハケ目が確認できる。174は、壺で、ズンギリとした球形状の胴部に直線的に立ち上がる単純口縁が付く。外面は磨滅気味であるが、全体に丁寧にミガキが施されている。口縁内面は外面同様丁寧にミガキが施されており、胴部には強いハケが施されている。175は、壺の口縁部片で、内外面ともに横ナデが施されている。176は、壺の頸部片で、頸部下半に3条の沈線を巡らし、その下には羽状繩文が施されている。口縁内面には縦位のハケが施されている。177は、壺の口縁から肩部片で、やや内彎気味の口縁から弱い屈曲の頸部に至る。肩部には櫛刺突羽状文が2段半に亘って施されている。178・179は、小形壺である。178は、口縁部を欠損し、外目にはハケが施されている。179は、ナデ調製のほか、赤彩が施されている。180は、口縁部を欠損する壺で、胴中央に最大径をもち、下半に弱い稜がみられる。外面には斜位のハケが施され、内面にはナデ、底部周辺にはハケが施される。181は、壺の胴下半片で、比較的明瞭な綾がみられる。内外面ともに磨滅が著しいが、底部内面にはハケが施される。182は、甕で、底部を欠損する。外面は磨滅が著しいが、内面にはナデ調製が確認できる。183は、口縁端部に明瞭なキザミが施され、口縁部から胴部下半にかけ斜位のハケが施される。底部周辺には縦位の強いハケが施されている。184は、甕の口縁から頸部片で、口縁外面はハケの後横ナデが施され、胴部は斜位のハケが施されている。口縁内面にはハケが施され、胴部は丁寧にナデが施されている。185は、台付甕で、胴下半以下を欠損する。口縁端部を折り返し、そこにキザミが施されている。口縁から胴部には斜位のハケが施されている。口縁内面には横位のハケが施されている。186は、台部を欠損する台付甕で、口縁端部にはキザミが施され、胴部には斜位のハケが施されている。内面はハケ目がナデ消されている。187は、甕の口縁部片で、内外面ともに横ナデが施されている。188は、台付甕の台部である。189・190は、どちらも台付甕の口縁から頸部片である。189は、口縁端部にキザミが施され、頸部には縦位のハケ、胴部では斜位のハケが施されている。口縁内面には横位のハケが施されている。190も189とほぼ同様の調製であるが、口縁端部上にハケが施され、キザミも明瞭である。191は、口縁端部と胴下半を欠損する台付甕である。やや磨滅気味であるが、外面にはハケが施される。内面口縁には横位のハケが施されている。192は、胴上

半と台部を欠損する台付壺である。磨滅が著しいが、底部周辺にはハケ目が確認できる。193は、台付壺の台部片で、外面にはハケが施され、内面には比較的粗いハケが施されている。194は、台付壺の底部から台部片で、外面と台部内面には粗いハケが施され、底部周辺ではナデが施されている。195は、台付壺の台部片である。198は、台付壺の台部片で、外面は磨滅しているが、内面はハケ目が確認できる。161・162は、高坏の坏部片である。どちらも口縁端部が折り返され、161には、キザミが施される。165は、高坏の接合部片で、櫛刺突羽状文が施されている。196は、高坏の脚部片で外面にはミガキが施され、内面にはハケが施されている。197も高坏の脚部片で、直線状の脚部から端部がハの字状に広がる。外面は丁寧にミガキが施されている。199は、小形丸底壺で、口縁部は横ナデが確認できるが、胴部は磨滅している。内面にはナデが施されている。

200～202は、SH10出土である。201は、台付壺で、底部から台部を欠損する。口縁端部にはキザミが施され、口縁部には縦位のハケ、胴部では斜位のハケが施されている。口縁内面には斜位のハケが施され、胴部ではナデが施されている。202は、台付壺の台部である。200は、高坏でほぼ完形である。内彌して立ち上がる坏部と、大きく広がる脚部から成り、脚部には三方に円窓をもつ。

203～206は、SH13出土である。203は、胴部中位に最大径(47.1cm)をもつ大型の壺である。全体にやや磨滅気味であるが、胴上半ではハケが、胴下半ではハケ後のミガキが確認できる。内面はナデが施されるが、底部周辺ではハケ目がみられる。204は、壺の底部片である。205は、台付壺の底部片で、内外面にハケが施されている。206は、小型の台付壺で、口縁端部にはキザミが施されている。

207は、SH17出土の台部を欠損する台付壺である。肩部と胴下半部に弱い屈曲をもつ。口縁部内外面が横ナデされる他はナデが施されている。

208～217は、SH18出土である。208は、壺の胴部片で、外面は斜位のハケが施され、内面は横位のハケが施されている。209は、台付壺の台部で、外面はハケが施されるが、台端部は横ナデが施されている。210～212は、高坏の脚部片である。210には、円窓が確認できる。211は、脚高が低く、脚端部の広がりも小さい。212はハの字状の脚部で、内面にはハケが施されている。213は、器台の器部で、内外面ともに丁寧にミガキが施されている。214～217は、いずれも小型丸底壺である。214は、大きく直線的に広がる口縁部をもつ。215は、胴外面にナデが施されている。216は、胴部にミガキ痕が確認できる。217は、磨滅している。

218は、SH24出土の複合口縁壺で、胴部を欠損する。口縁端部と外面には縄文が施され、その上に棒状浮文が貼付される。頸部上半にはハケが、下半にはミガキが施され、肩部には櫛横圧線文が施されている。

219は、SH25出土の高坏底部片である。220は、SH27出土の壺で、口縁部を欠損する。内部にベンガラが入って出土した。胴部外面には赤彩が施されている。

221は、SH30出土の壺で、肩部に櫛刺突羽状文が施されている。

222は、SH31出土の壺で、口縁部を欠損する。胴部にはハケ目が確認できる。223は壺の口縁部片で、折り返された端部にはハケとキザミが施されている。全体に赤彩が施されている。

224は、SK01出土の口縁部を欠損した壺である。胴下半に最大径と明晰な綫をもつ。外面全体にハケが施されている。内面では上半にナデが施されているが、下半以下ではハケが施されている。

225は、SP68出土の折り返し口縁壺で、口縁端部はハケの後にキザミが施されている。

226は、SP84出土の手づくね土器で、口縁端部を欠損する。

227は、SP206出土の複合口縁壺の口縁部片で、縄文と竹管文が施され、さらに棒状浮文が貼付される。

228は、SP284出土の壺で、口縁部の立ち上がりは短いが、端部は比較的広く面取りされている。

229は、SP209出土の台付壺で胴下半以下を欠損する。口縁部の立ち上がりは短い。口縁端部に細かいキザミを施し、胴部には幅広のハケが施されている。

230～237は、SX01出土である。230は壺の頸部片で、頸部にはハケが施され、肩部には櫛刺突羽状文が施されている。231は、台付壺の台部で、外面にはハケが施され、内面にはナデが施されている。232は、台付壺で台部を欠損する。口縁部は横ナデが施され、胴上半部にはハケ、下半ではナデが施されている。233は、S字状口縁台付壺で、胴部の一部を欠損する他はほぼ完形である。口縁部のS字の屈曲はあまり強くない。ハケは上から縱位、横位、斜位の順に施されている。台端部は内側に折り返されている。234もS字状口縁台付壺で、S字の屈曲はあまり強くない。比較的幅広のハケが施されている。胴部のハケは幅広で明瞭である。235は、台付壺の台部で、非常に扁平である。236は、高环の脚部片で、ミガキが確認できる。237も高环の脚部片で、エンタシス状の脚から端部は扁平に広がる。ミガキが施される。

238は、出土地点不明の複合口縁壺の口縁部片である。細長いキザミが施されている。

239は、B7区出土の広口壺である。口縁は直線的に立ち上がり、球形の肩をもつ。口縁部には横ナデが確認できるが、その他は磨減が著しい。内面には粗いハケが施される。

240は、C8区出土の高环の环部片である。口縁部はやや外反気味に立ち上がり、丁寧にナデが施されている。241もC8区出土の高环脚部片で、240と同一個体と考えられる。胴太の脚部から緩やかにハの字状に広がる。

242は、D1区出土の高环で、内弯気味に立ち上がる环部と、脚高が低く端部は扁平に広がる。口縁部は横ナデが施される他はミガキが施されるが、ミガキ前のハケが残る箇所がある。

243は、B7区出土の手づくね上器で、口縁が内弯気味に立ち上がる。全体に指頭によるナデ調製であるが、一部にミガキが確認できる。

244は、B4区出土の小型丸底壺で、ナデが施されている。

245は、出土地点不明の小型丸底壺で、ナデが施されている。

246は出土地点不明の丸底壺で、口縁端部を欠損する。口縁部は内外面ともに横ナデされ、胴部は丁寧にミガキが施されている。

247は、B4区出土の壺の口縁部片で、口縁端部が折り返され、焼成前穿孔が2ヶ所確認できる。

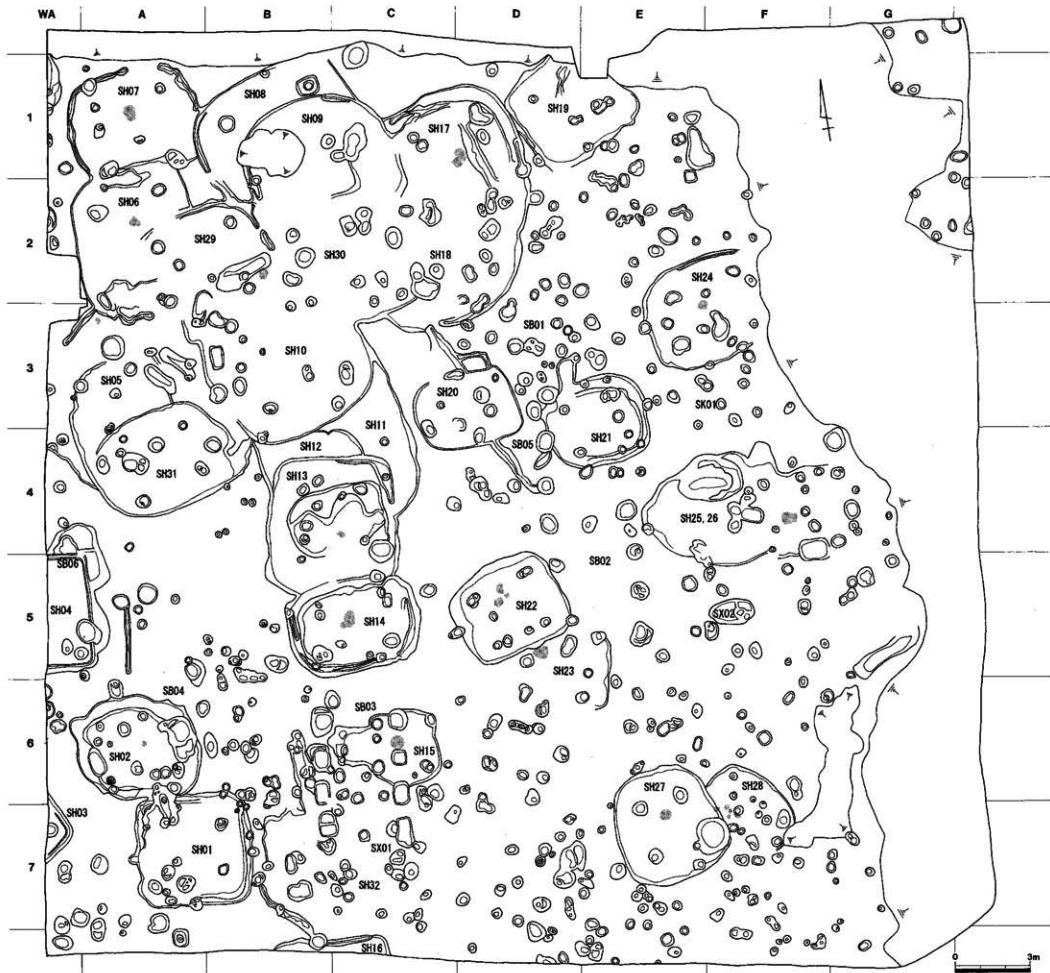
## 5. まとめにかえて

今回の調査地は、過去の削平を受け、遺構の遺存状態が悪い箇所がみられたことや、発掘区の北西部で多数の竪穴住居跡が幾重にも重複していて、住居跡の新旧関係が不明確であったことなどから遺構の解明が充分にできなかった面があるが、弥生時代後期～古墳時代前期までの多数の竪穴住居跡、掘立柱建物跡などの遺構が検出され、この時期の集落の構造等の解明の糸口となる資料が提供されたと考える。

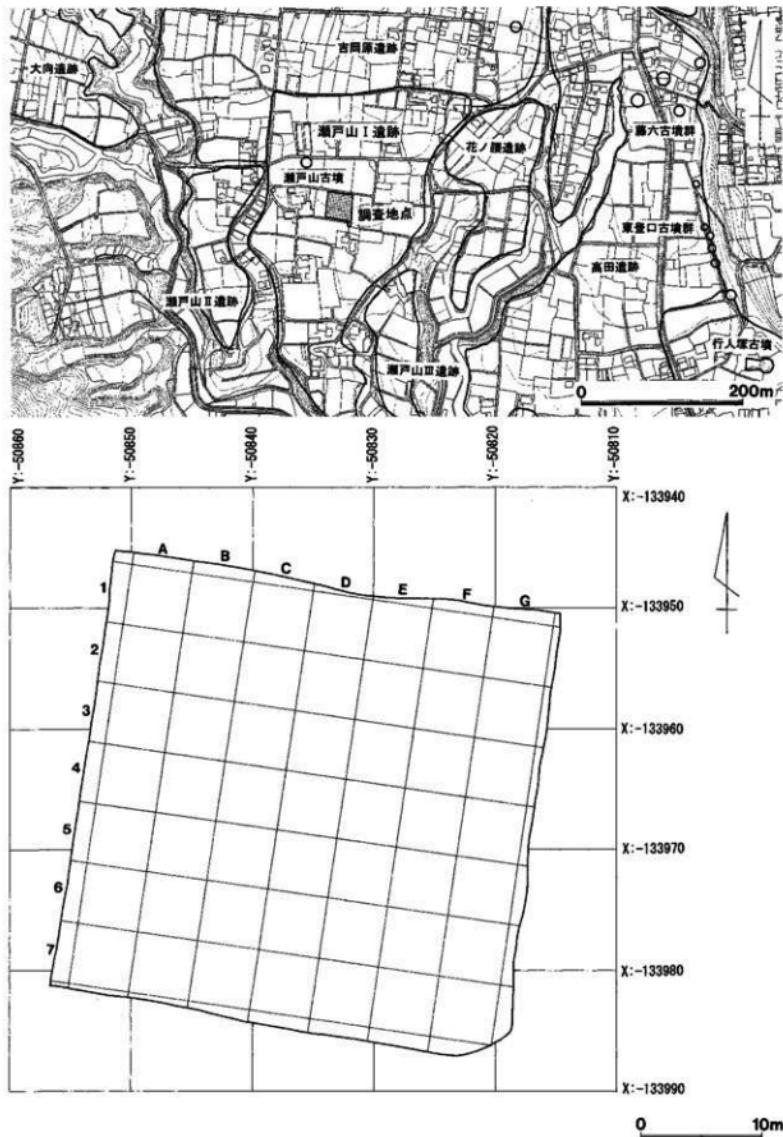
今回の調査における特筆すべき遺構・遺物としては、SK01から土器棺と考えられる壺を埋納した小穴を検出している。また、SH27からは、赤色顔料を入れた壺が出土した、この赤色顔料は、科学分析の結果、酸化鉄を主成分とする「ベンガラ」であることが判明した。赤色顔料は特殊な用途に使用されるものであることから、この時代の生活の一端を解明する貴重な資料を得ることができたものと考える。

### (参考文献)

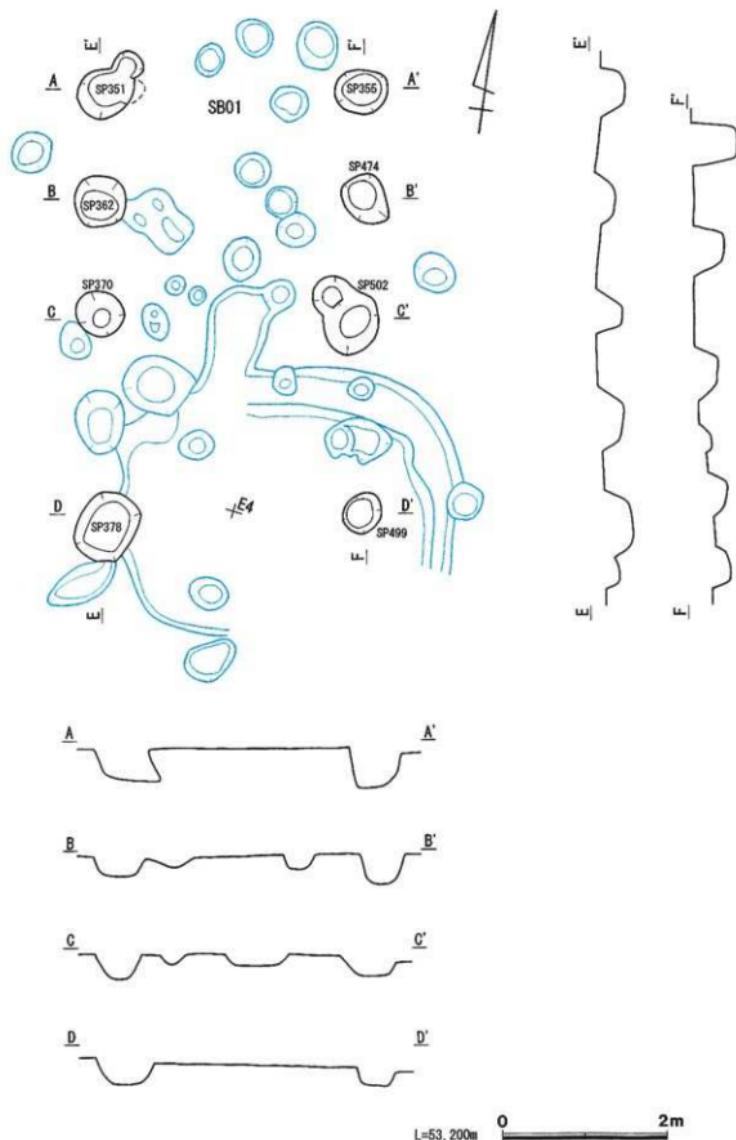
- 掛川市 1997 「掛川市史 上巻」  
掛川市 2000 「掛川市史 資料編古代・中世」  
掛川市教育委員会 2000 「溝ノ口遺跡発掘調査報告書」  
掛川市教育委員会 2008 「市内遺跡発掘調査報告書」  
掛川市教育委員会 2009 「今坂遺跡第6次調査・瀬戸山II遺跡・高田遺跡第21次調査発掘調査報告書」



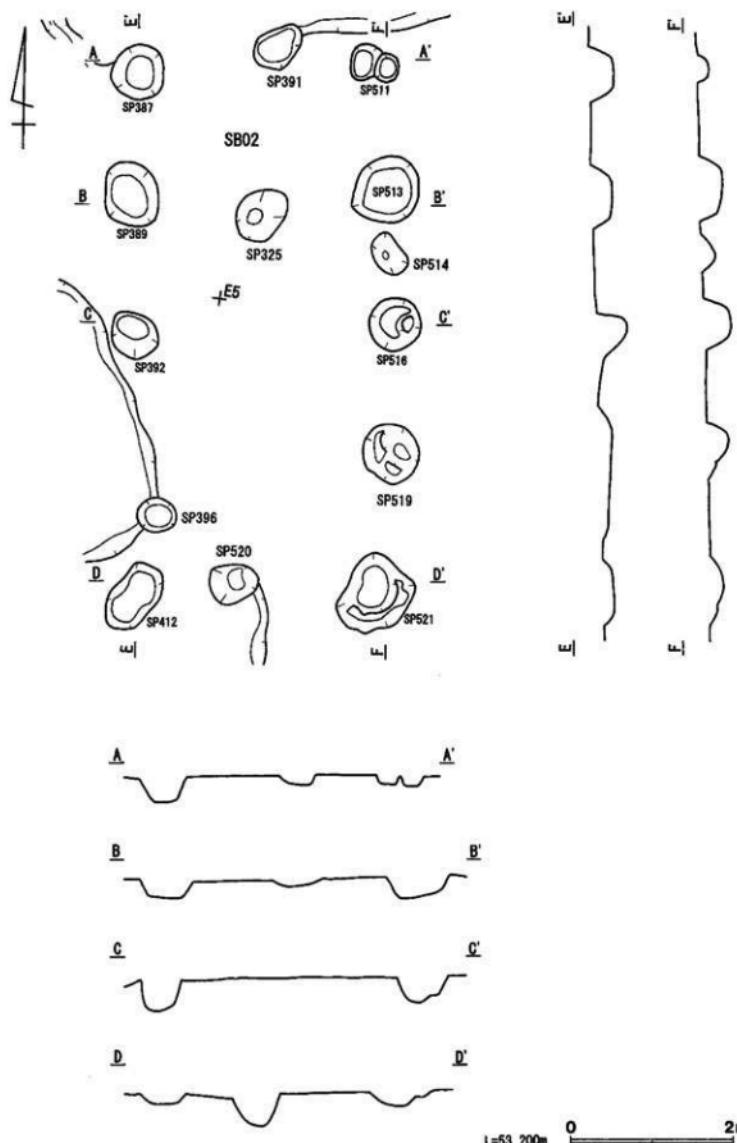
第2図 遺構全体図



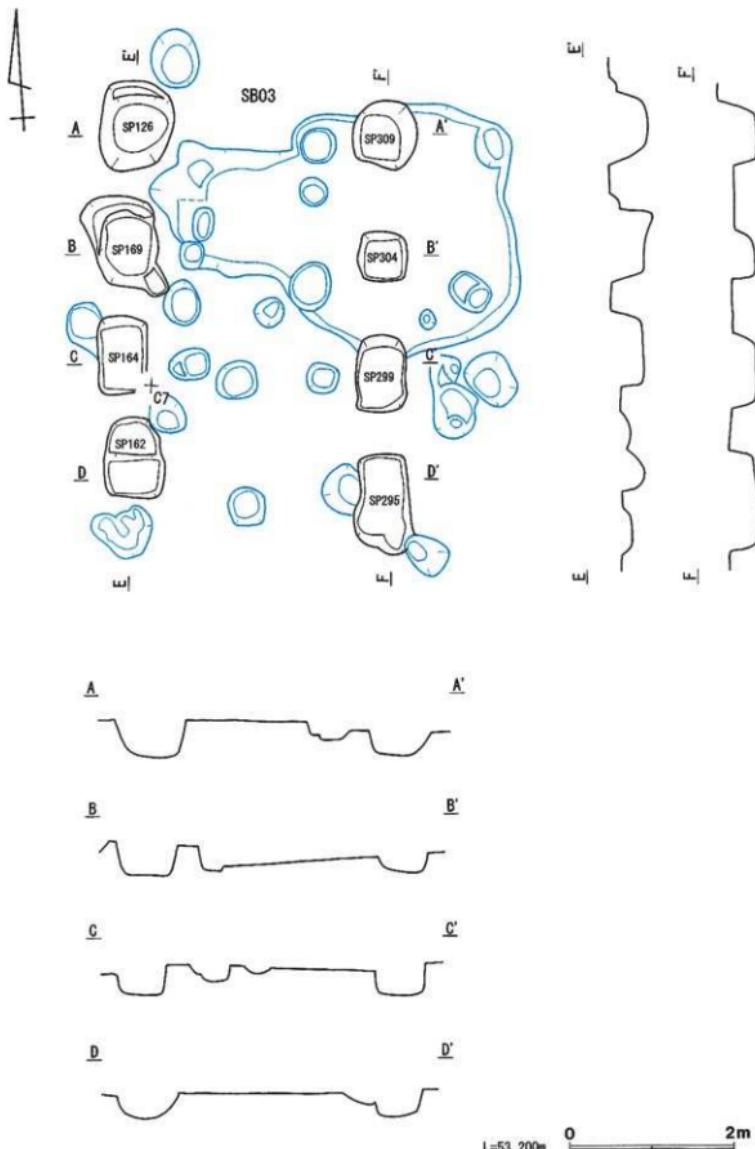
第3図 調査地点位置図・グリッド配置図



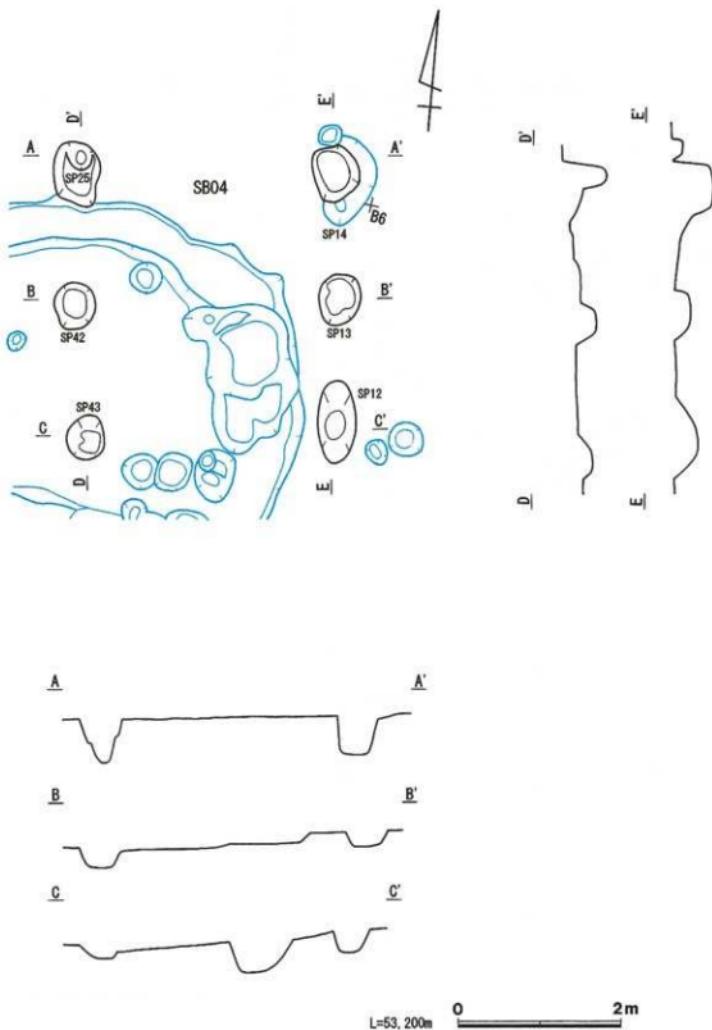
第4図 SB01実測図



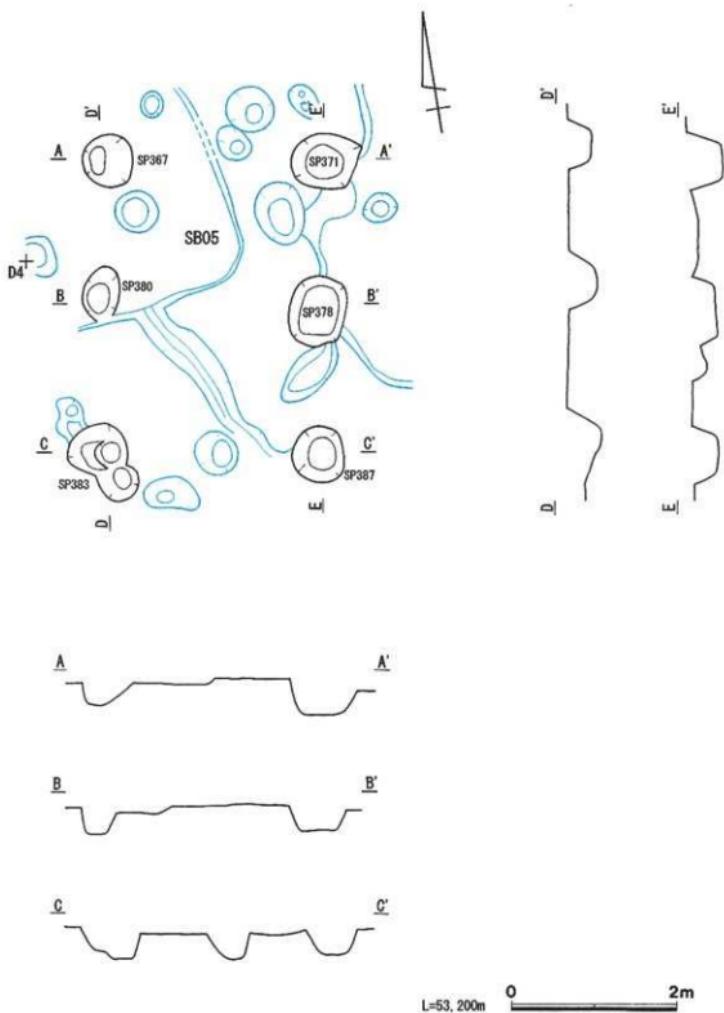
第5図 SB02実測図



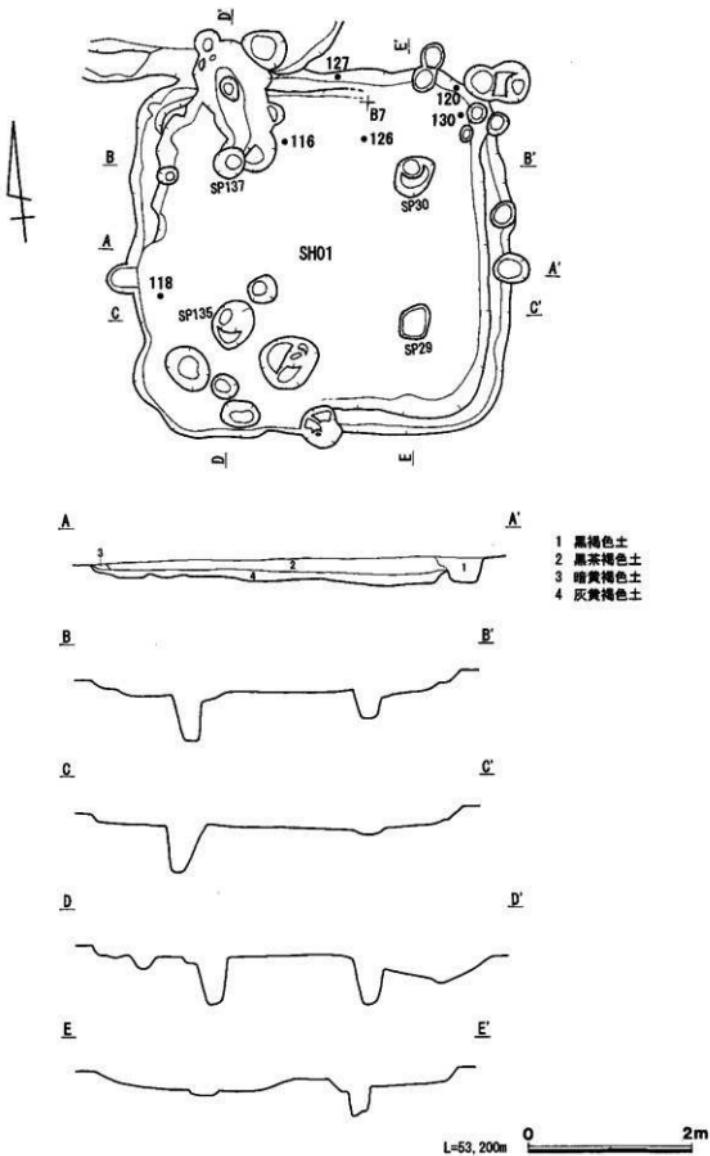
第6図 SB03実測図



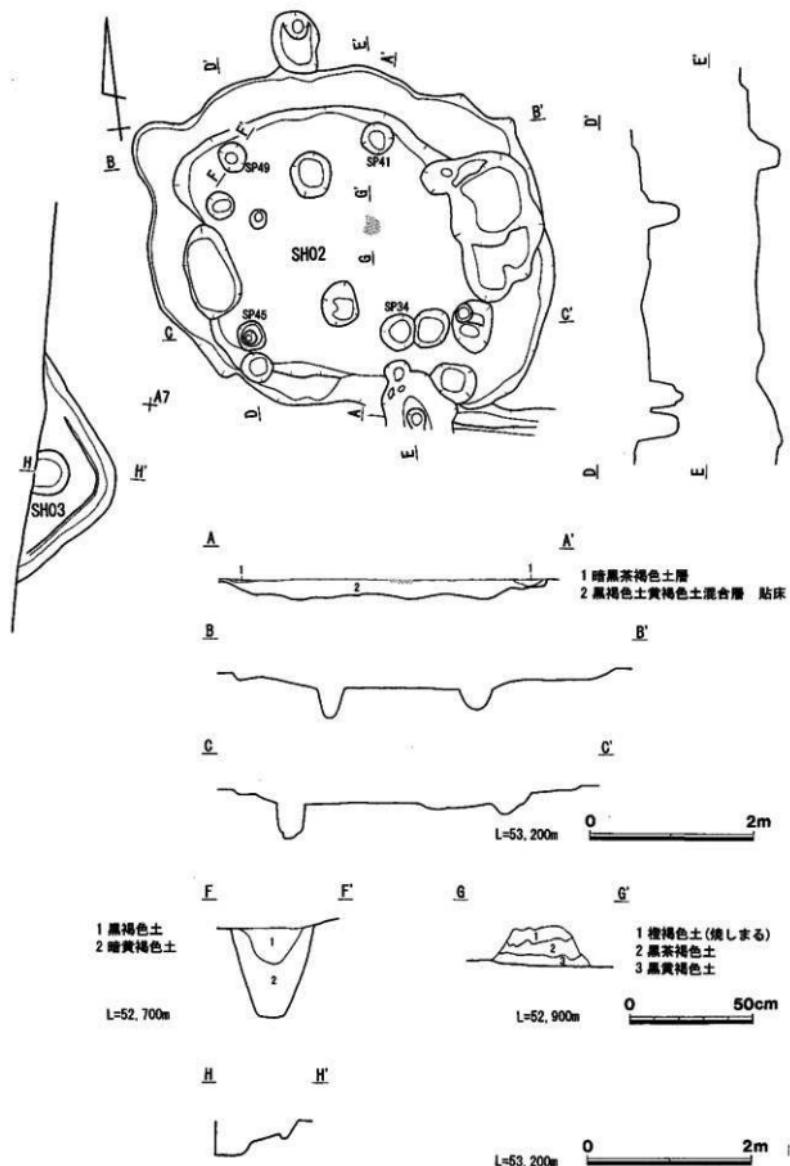
第7図 SB04実測図



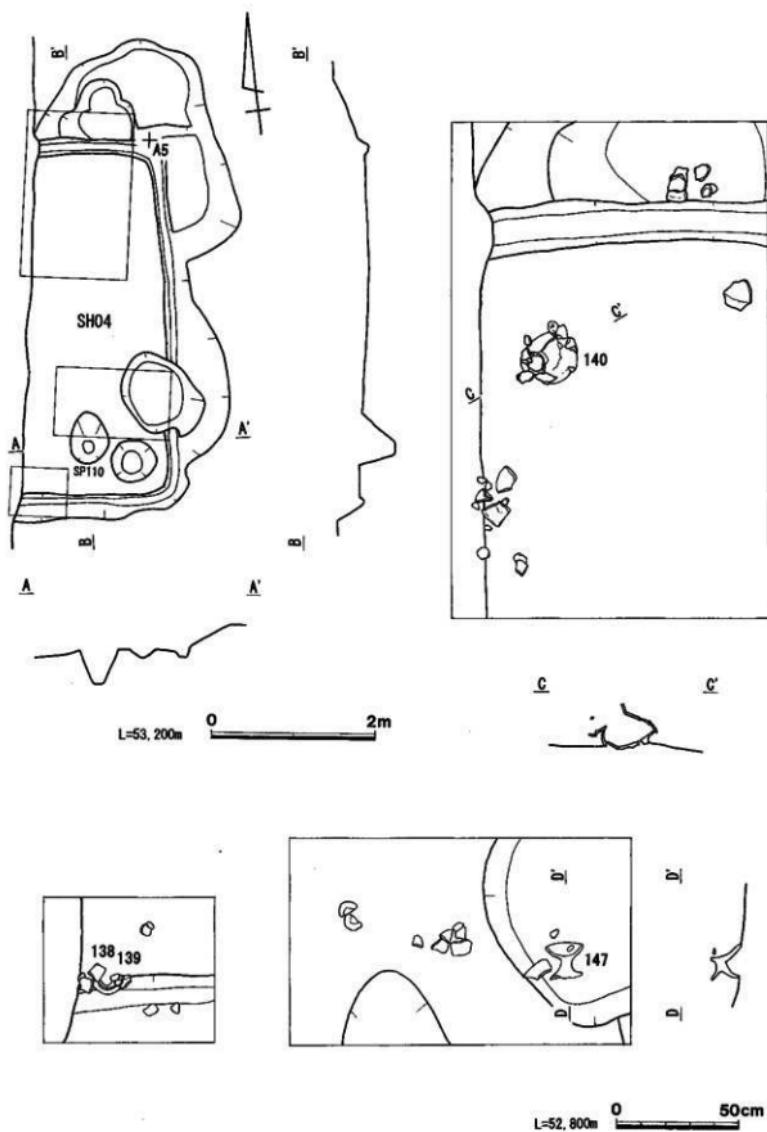
第8図 SB05実測図



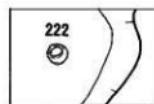
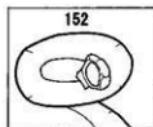
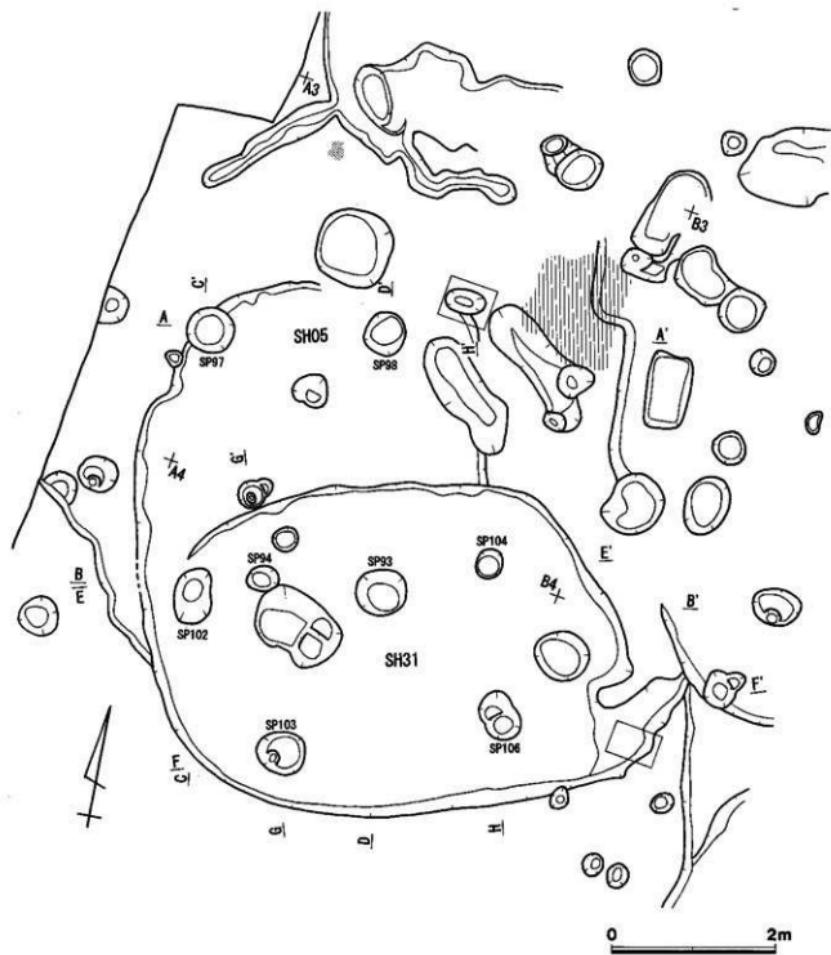
第9図 SH01実測図



第10図 SH02・03実測図

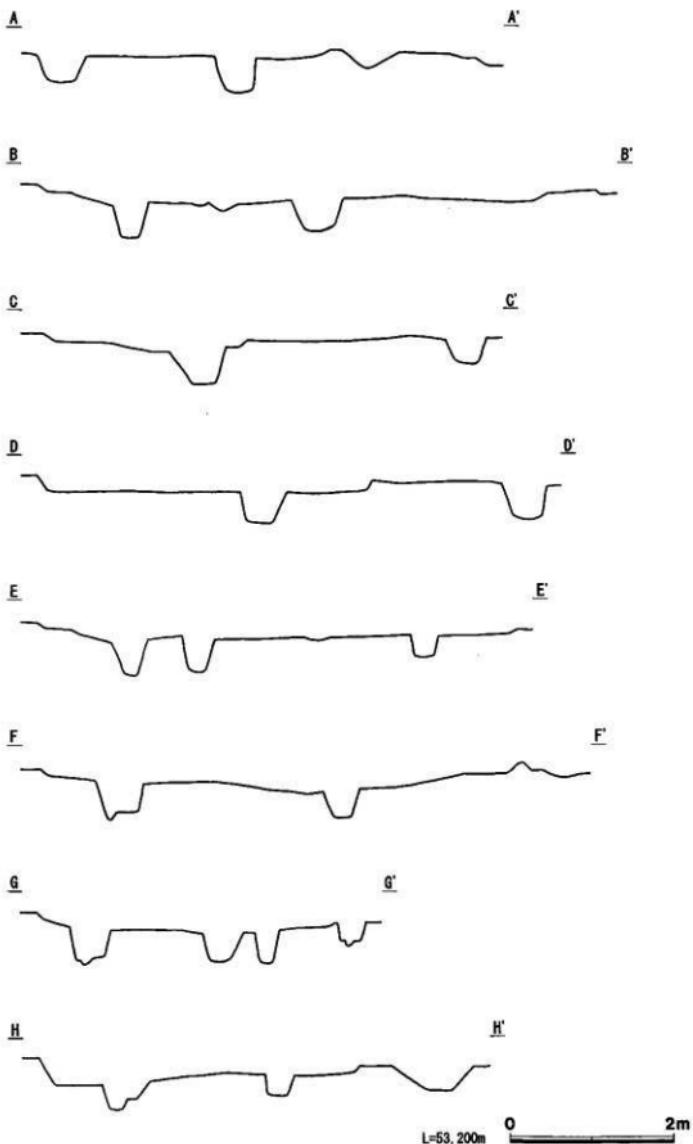


第11図 SH04実測図



第12図 SH05・31実測図 (1)

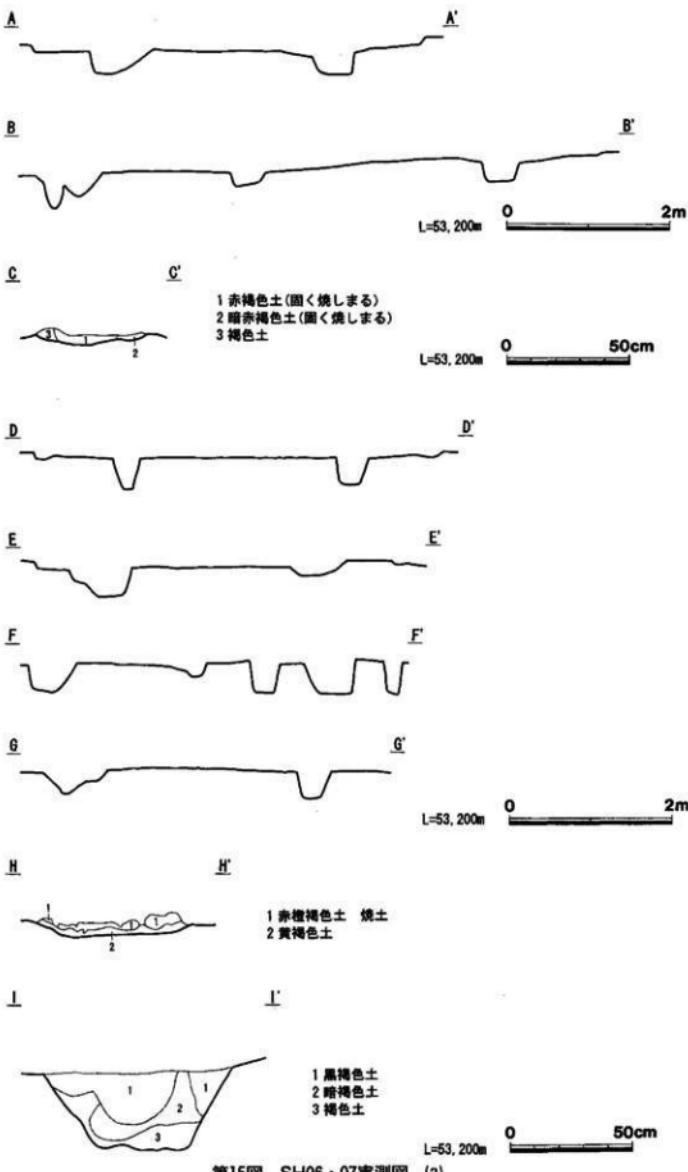
0 50cm

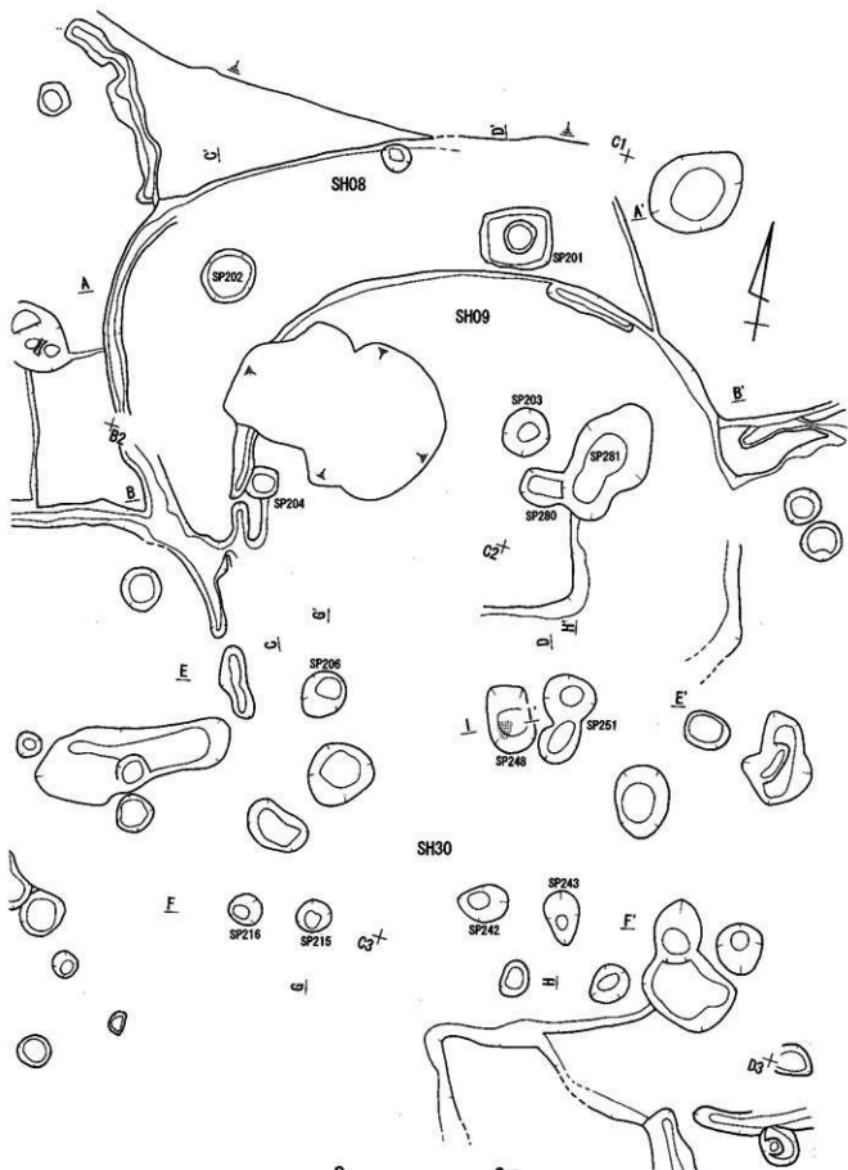


第13図 SH05・31実測図 (2)

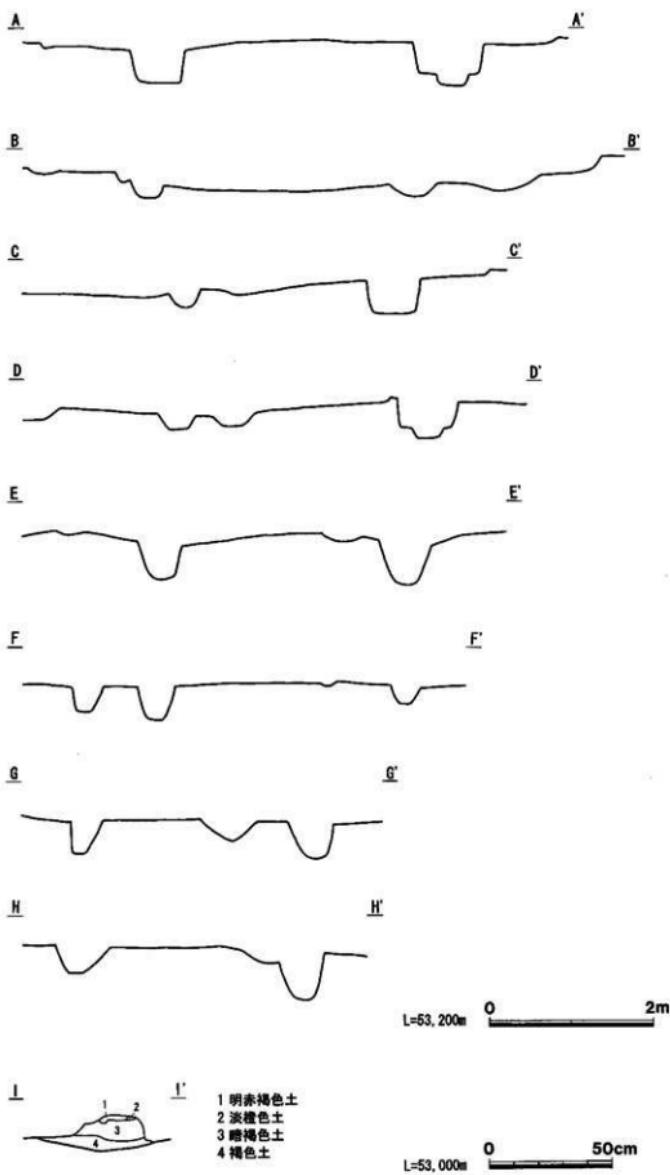


第14図 SH06・07実測図 (1)

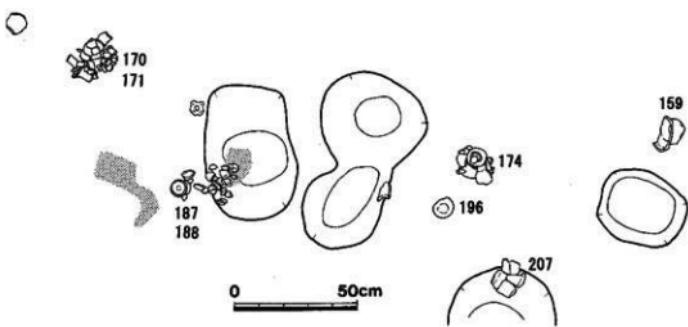




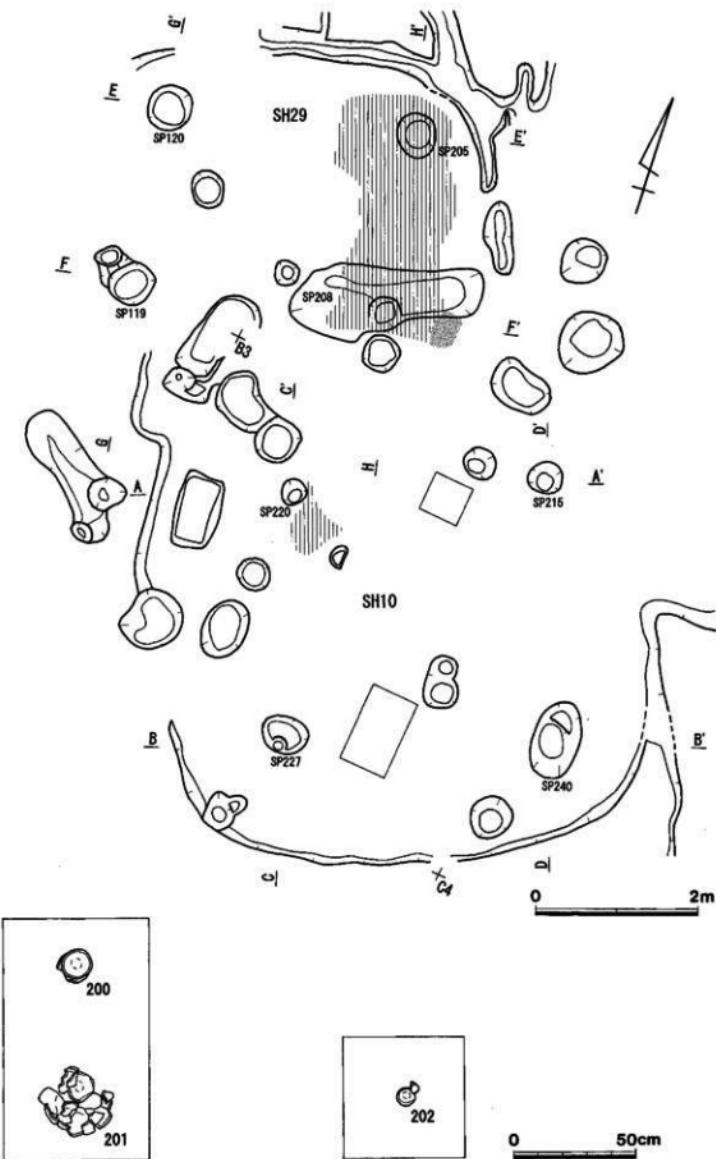
第16図 SH08・09・30実測図 (1)



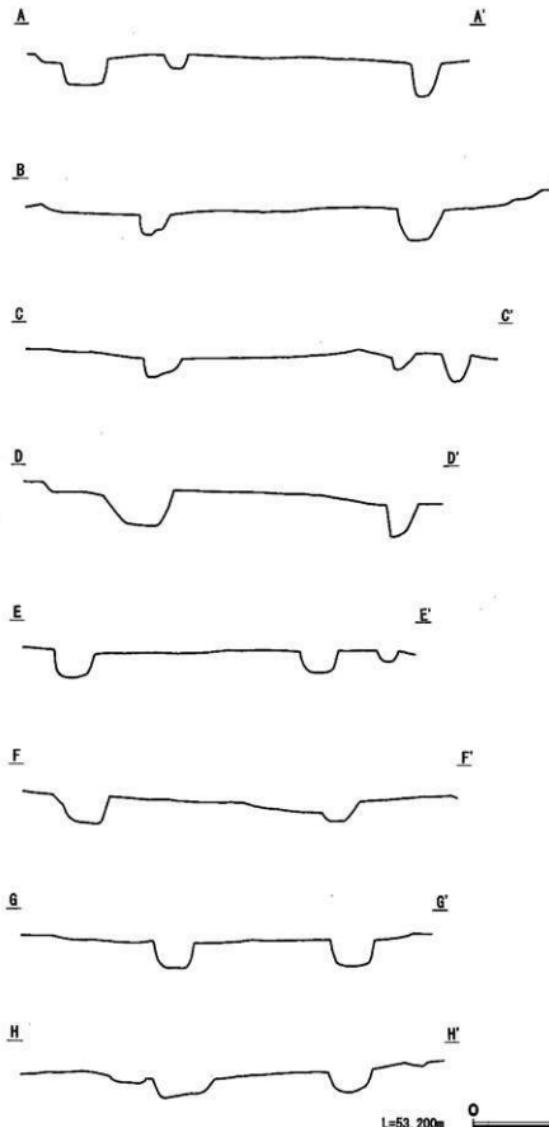
第17図 SH08・09・30実測図 (2)



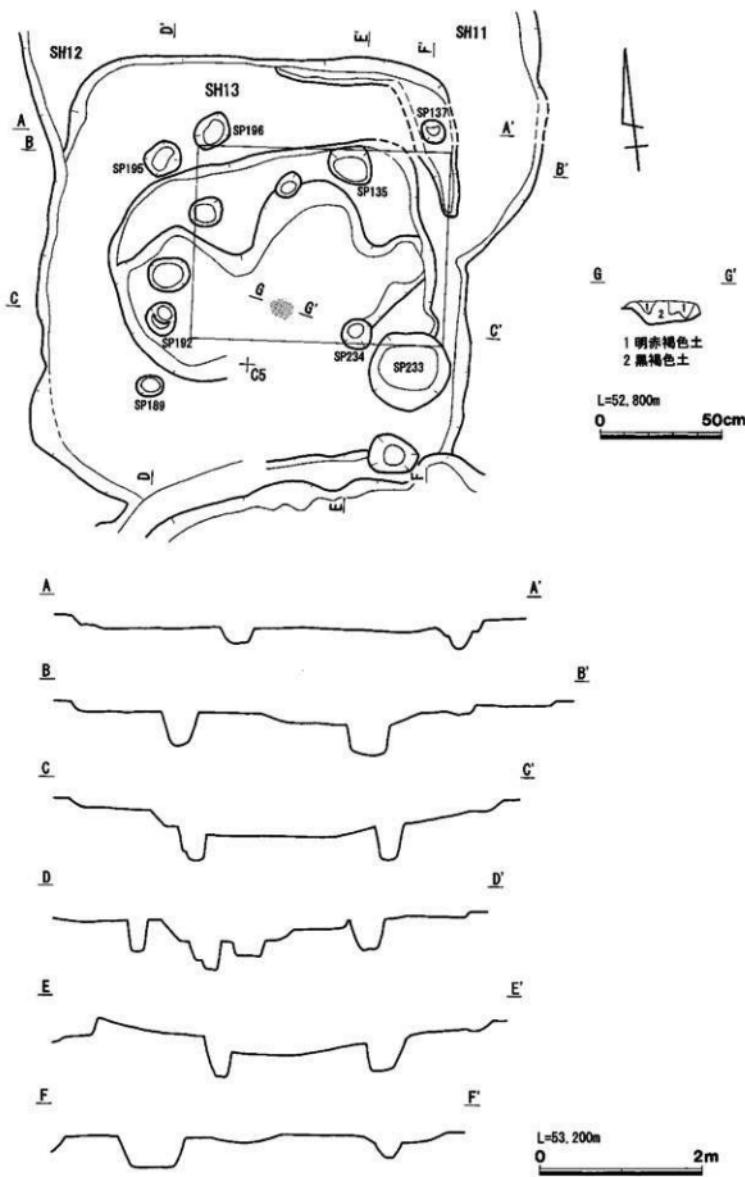
第18図 SH09遺物出土状況実測図



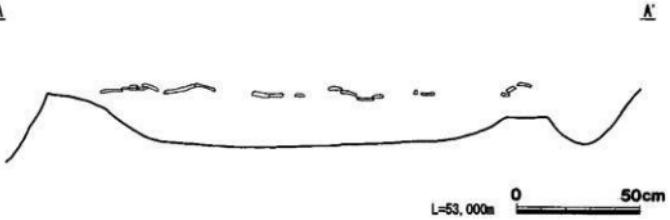
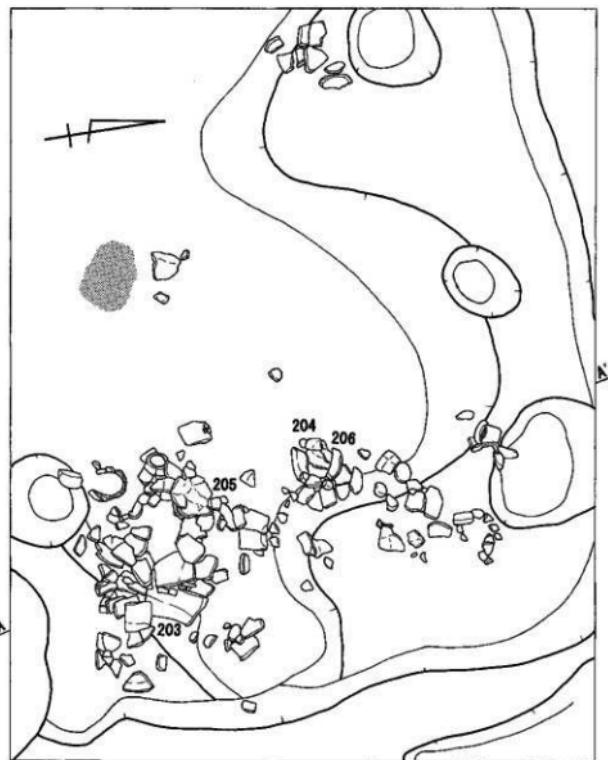
第19図 SH10・29実測図 (1)



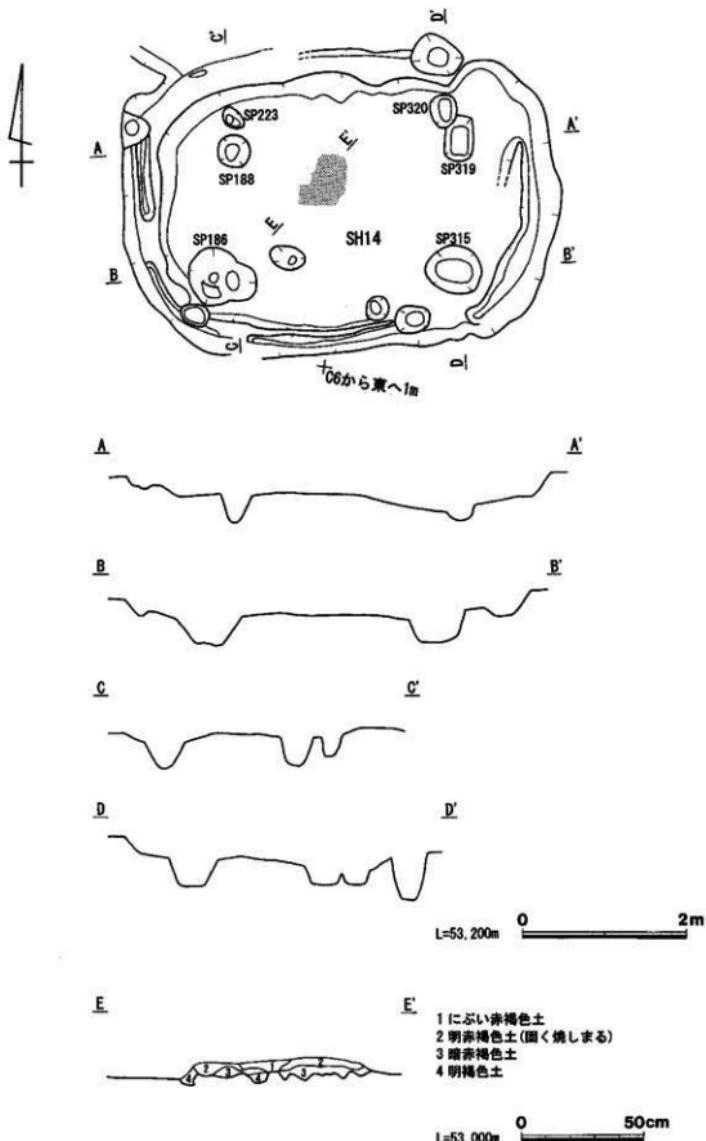
第20図 SH10・29実測図 (2)



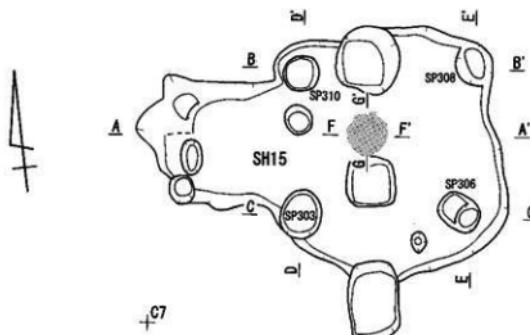
第21図 SH13実測図



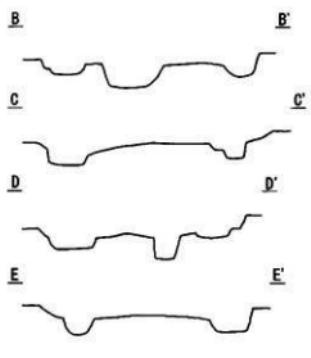
第22図 SH13遺物出土状況実測図



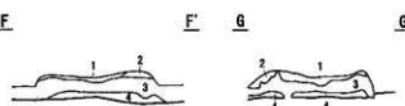
第23図 SH14実測図



1 暗褐色土(しまり弱 粘性やや強 黄色土混入)  
2 黄褐色土



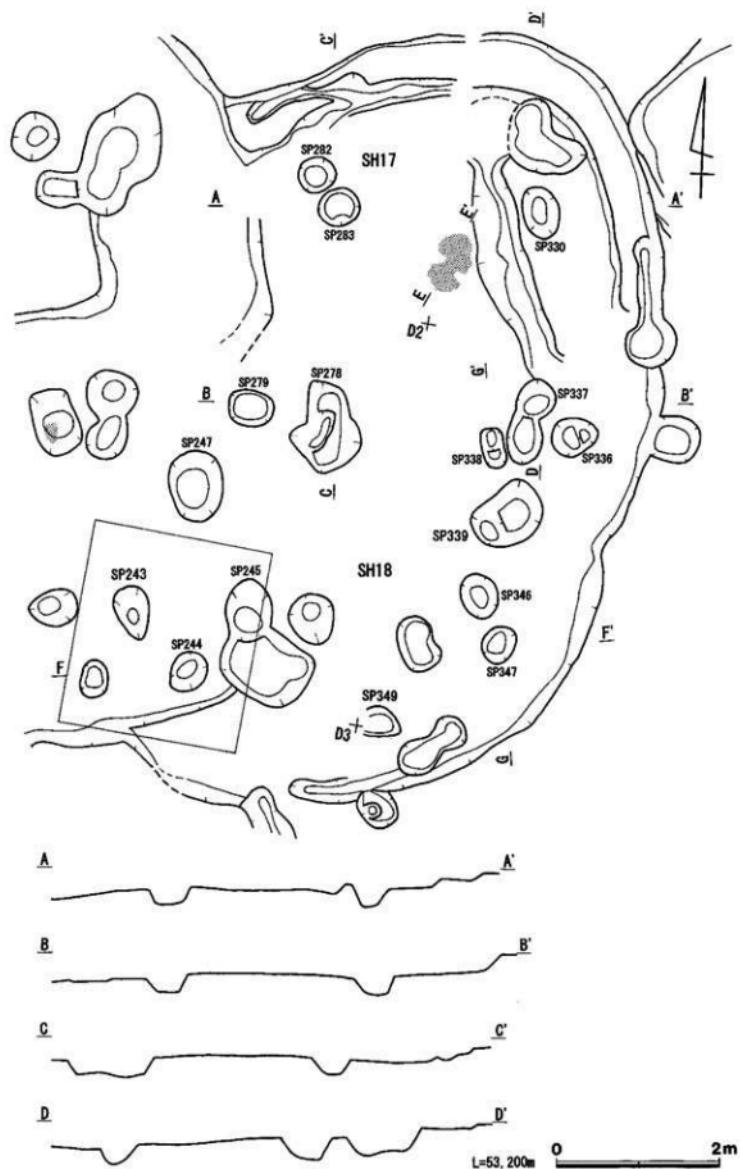
L=53,200m 0 2m



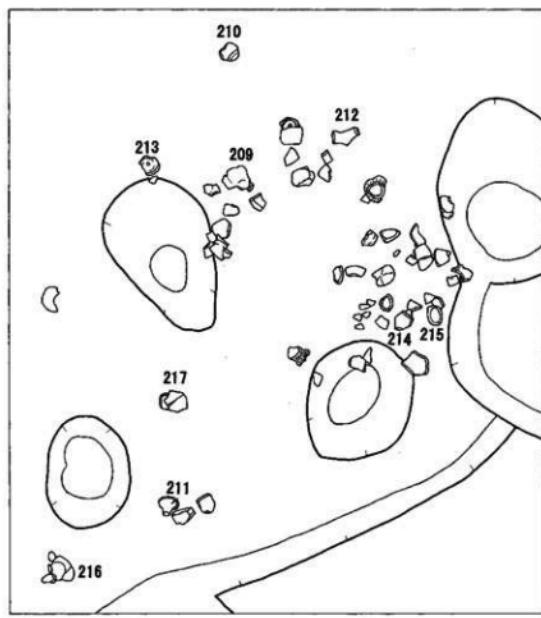
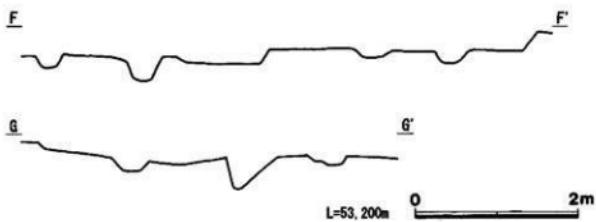
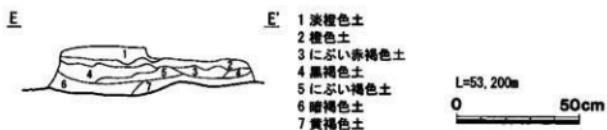
1 明赤褐色土(固く焼しまる)  
2 にぶい黄褐色土(固く焼しまる)  
3 暗褐色土  
4 黄褐色土

L=53,000m 0 50cm

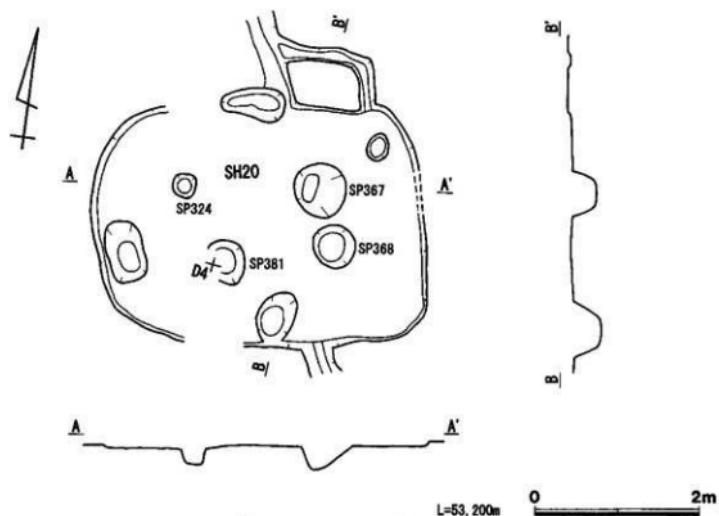
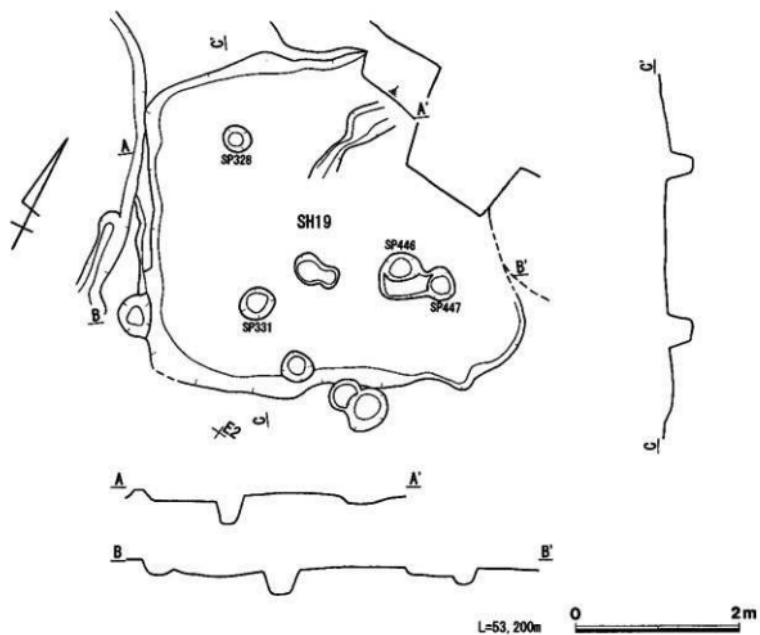
第24図 SH15実測図



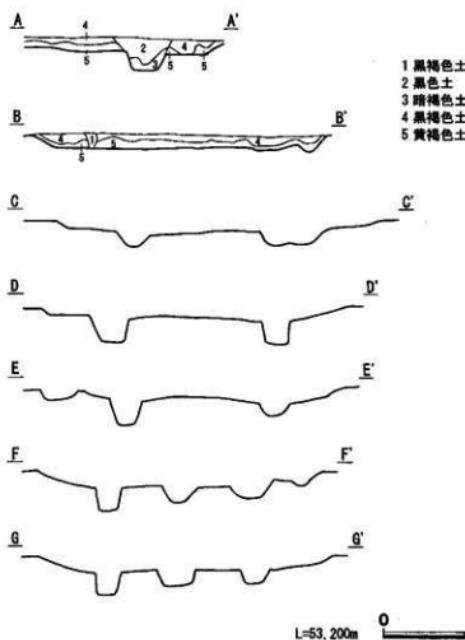
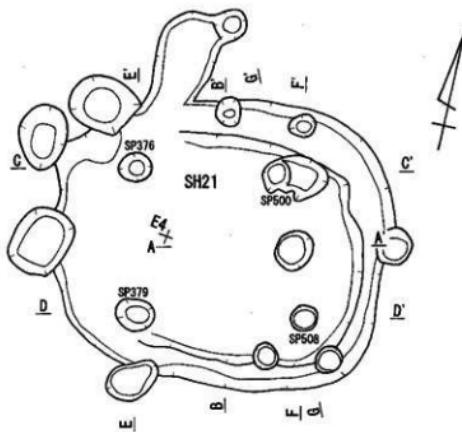
第25図 SH17・18実測図 (1)



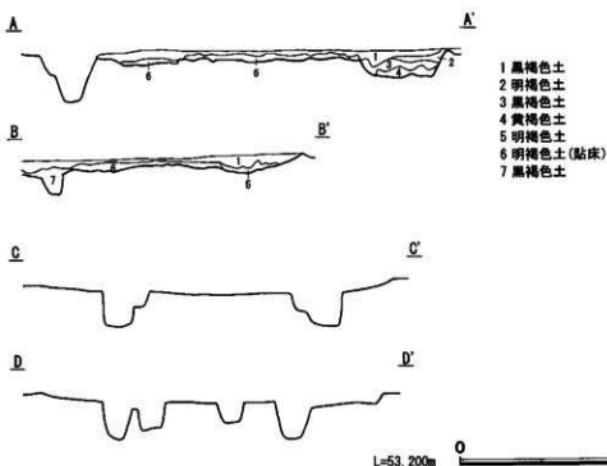
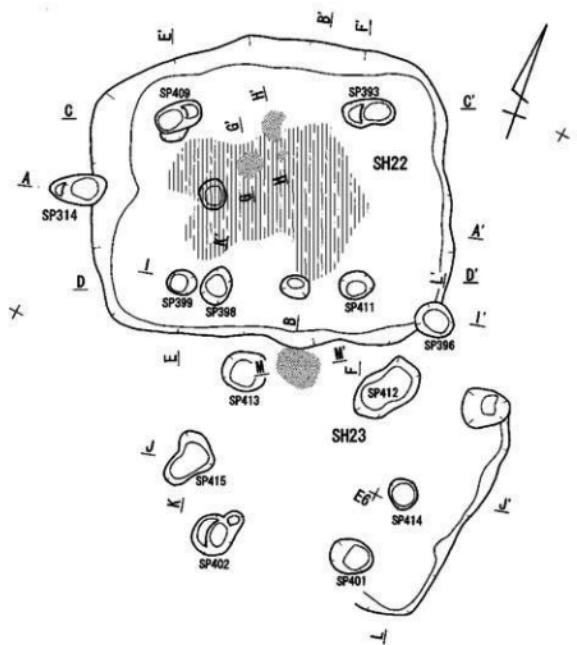
第26図 SH17・18実測図 (2)



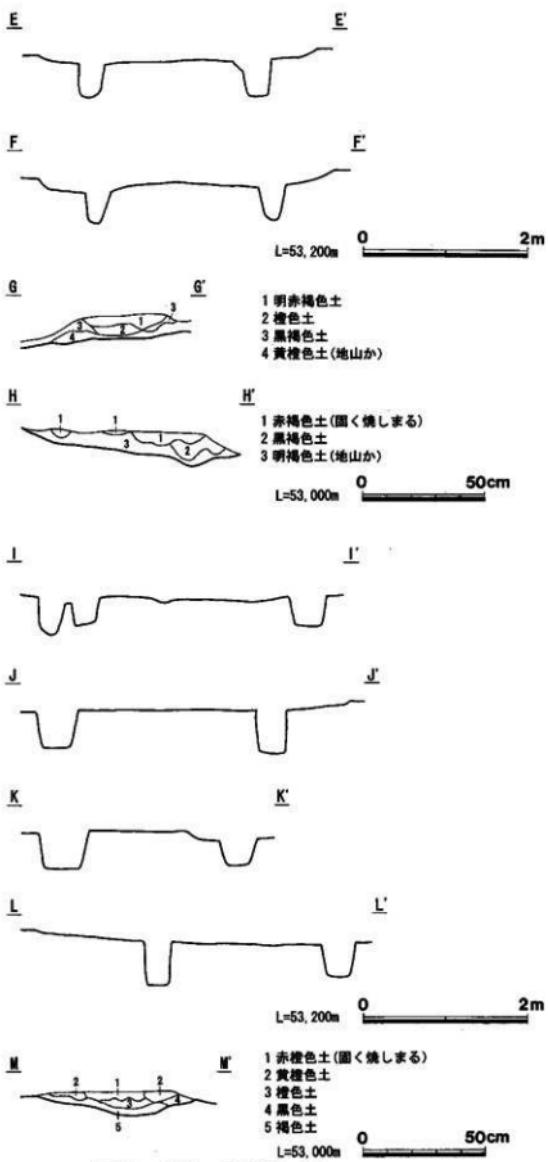
第27図 SH19・20実測図



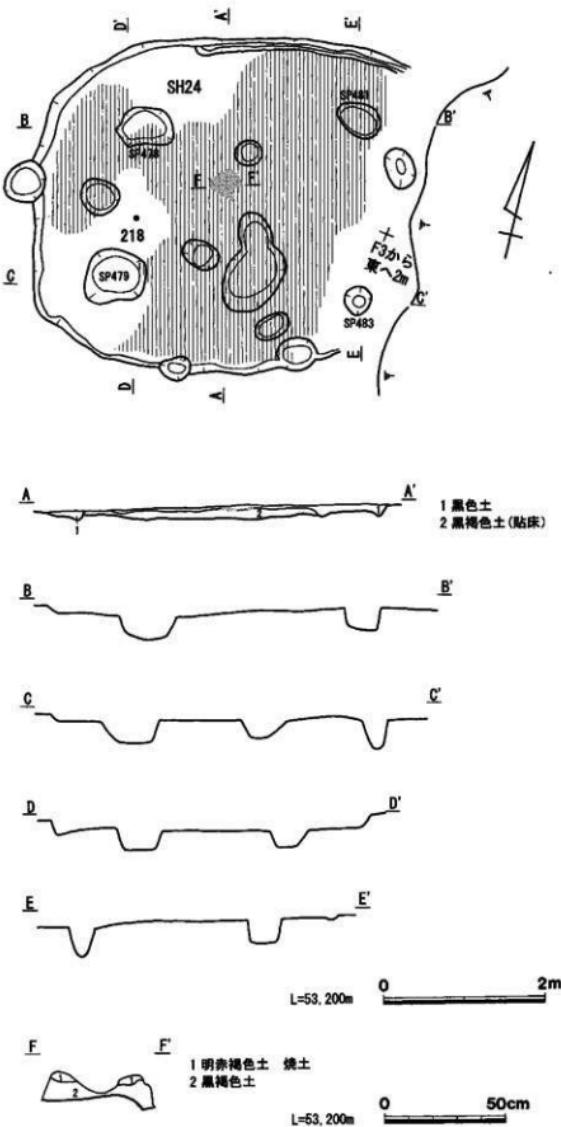
第28図 SH21実測図



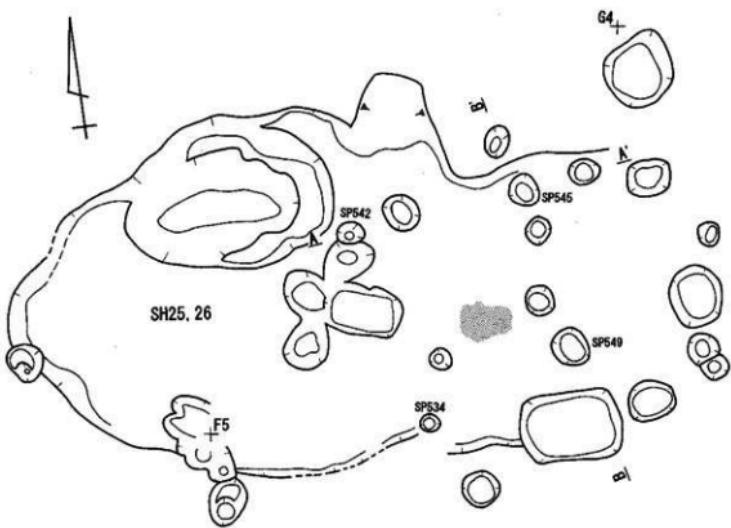
第29図 SH22・23実測図 (1)



第30図 SH22・23実測図 (2)



第31図 SH24実測図



A A'

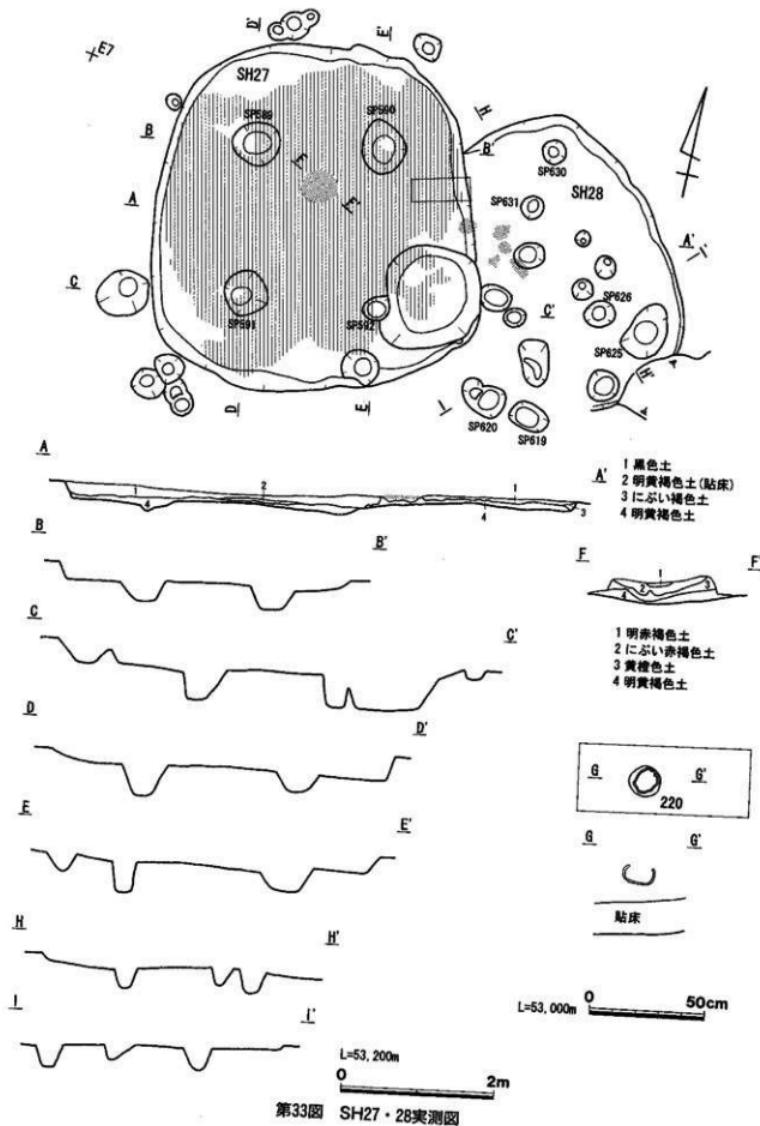


B B'

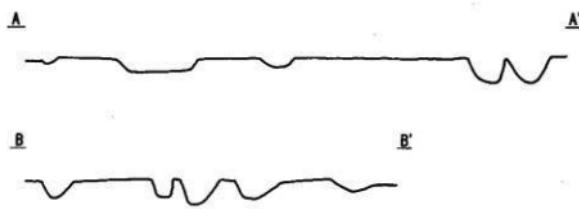
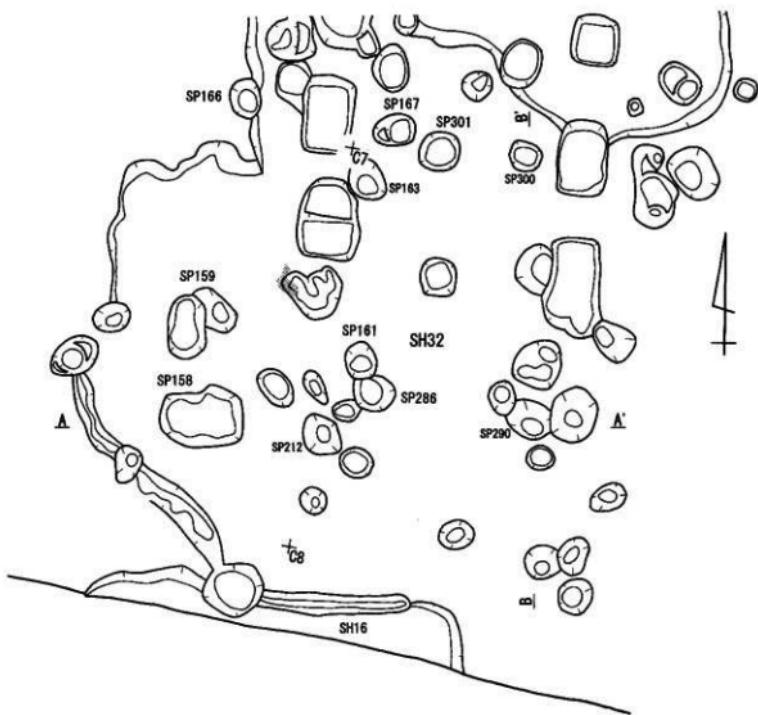


L=53,200m 0 2m

第32図 SH25・26実測図

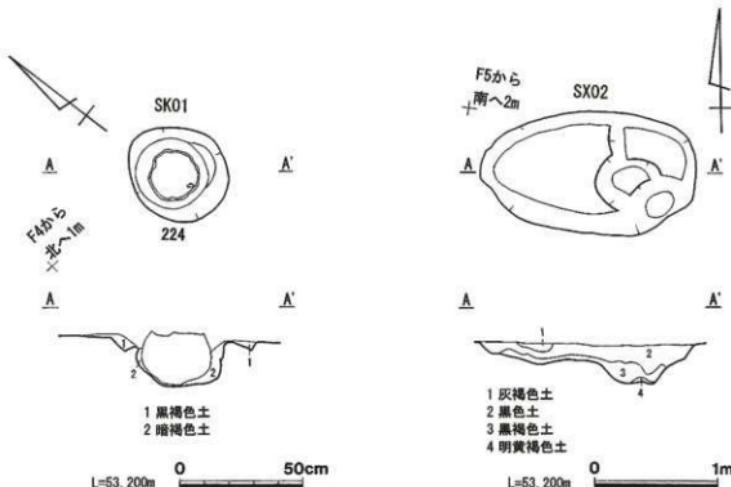
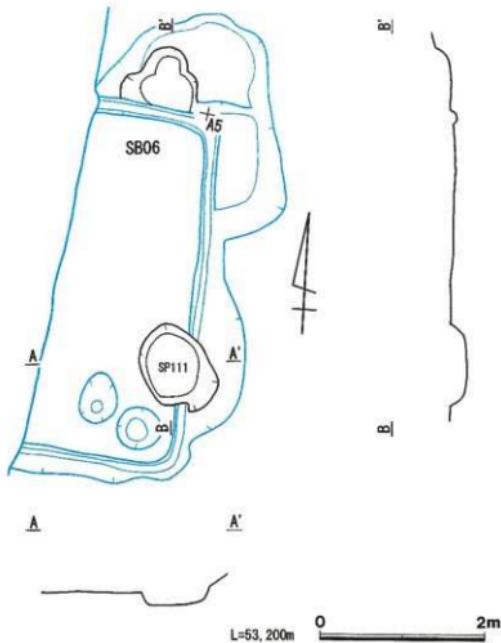


第33図 SH27・28実測図

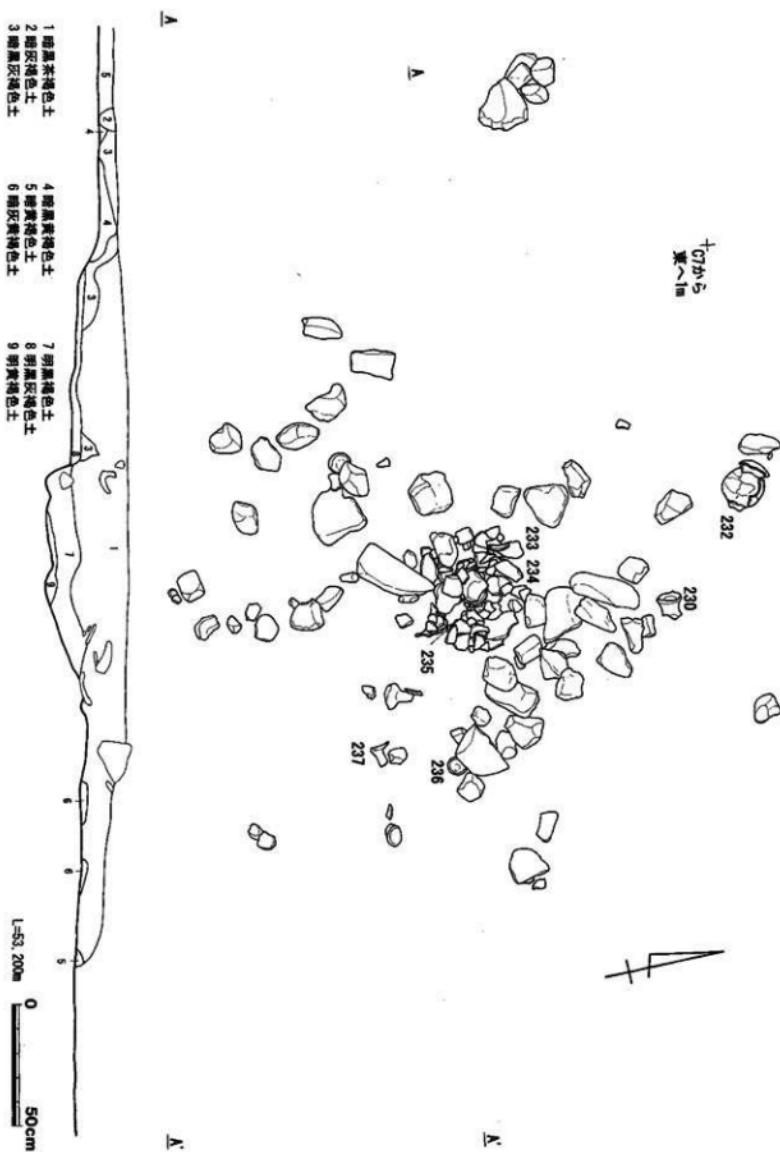


L=53,200m 0 2m

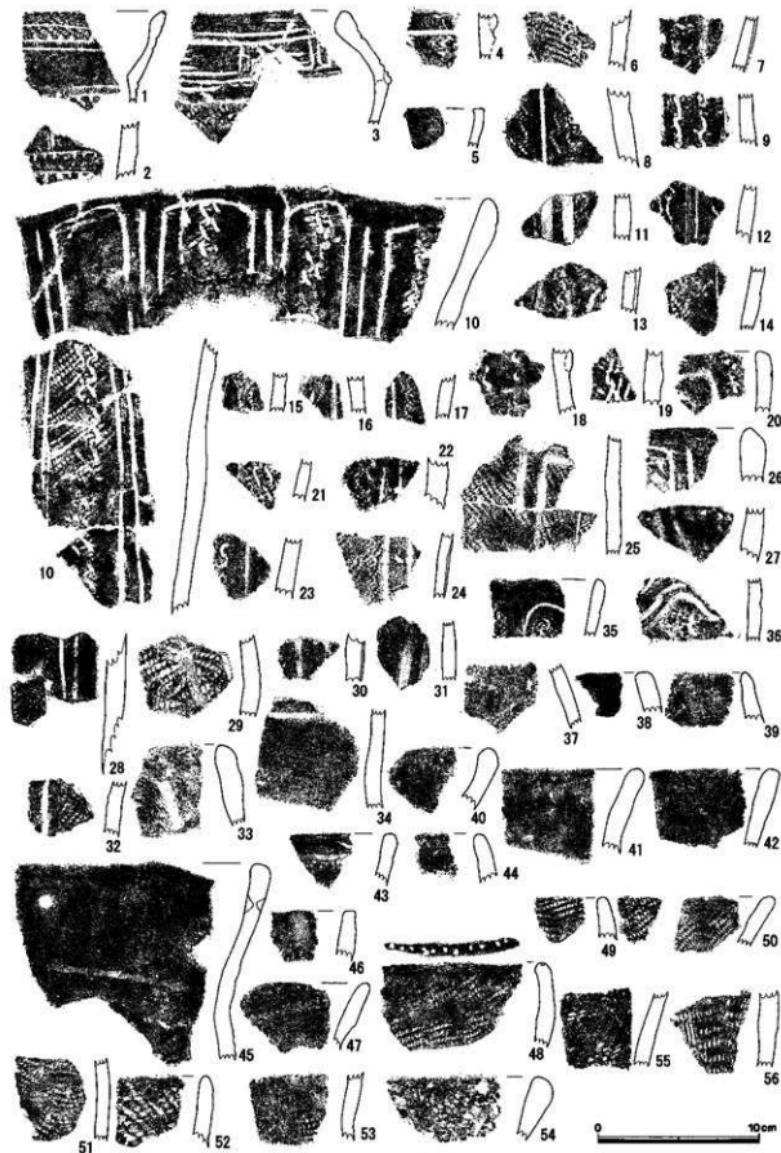
第34図 SH32実測図



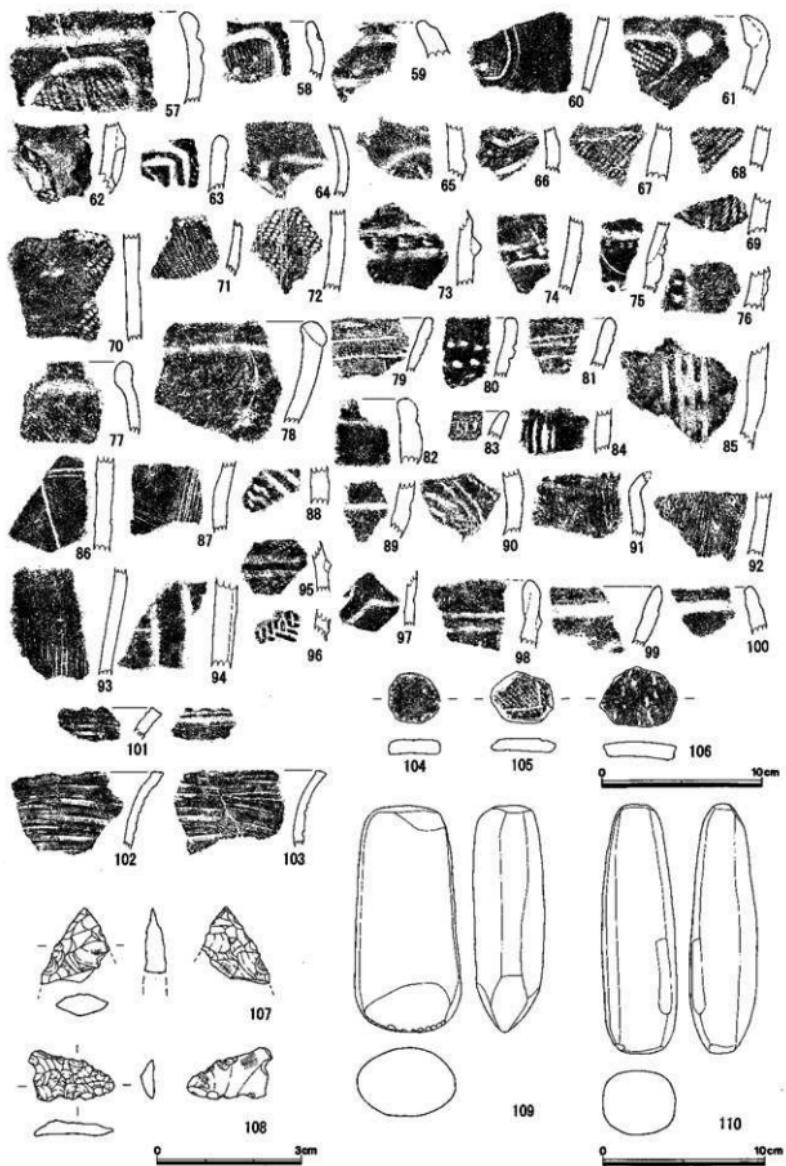
第35図 SB06、SK01、SX02実測図



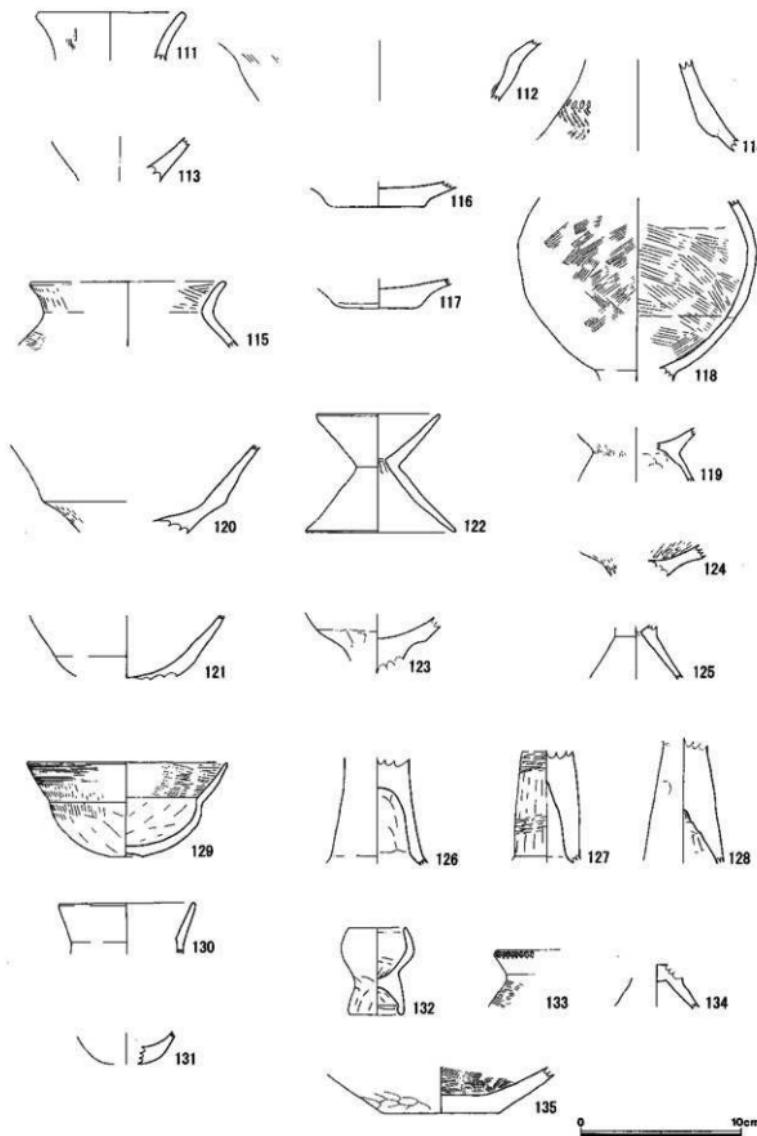
第36図 SX01実測図



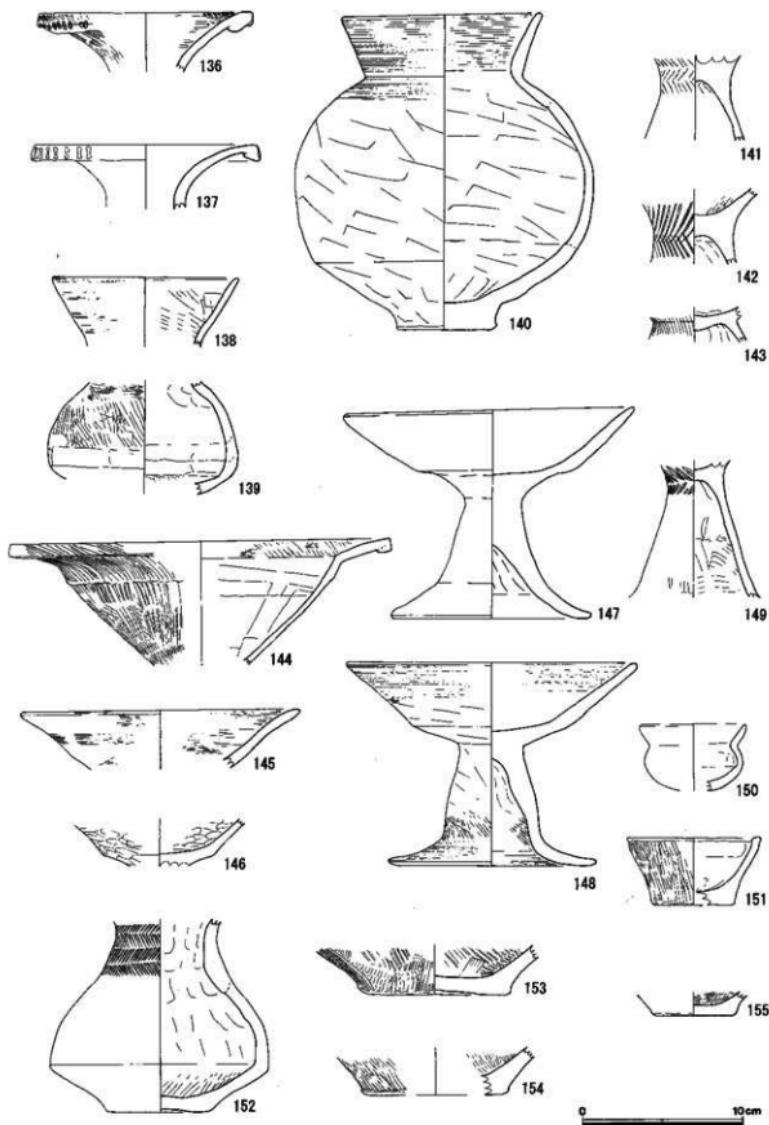
第37図 出土遺物実測図



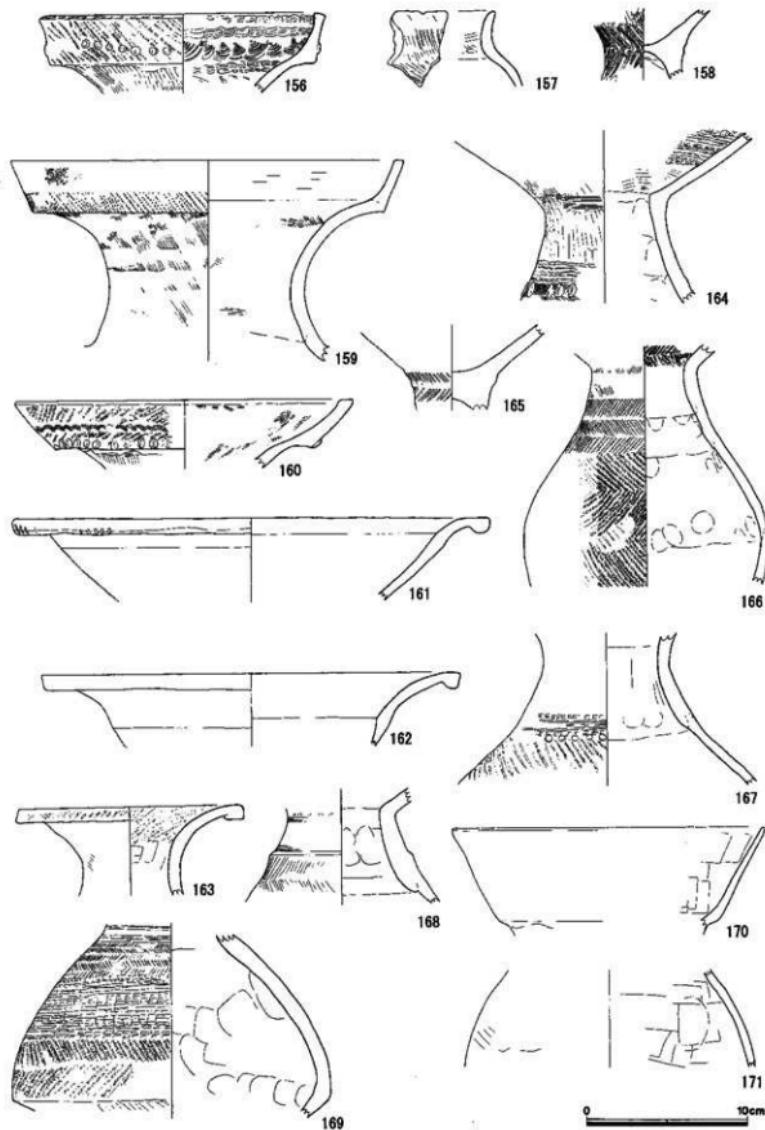
第38図 出土遺物実測図



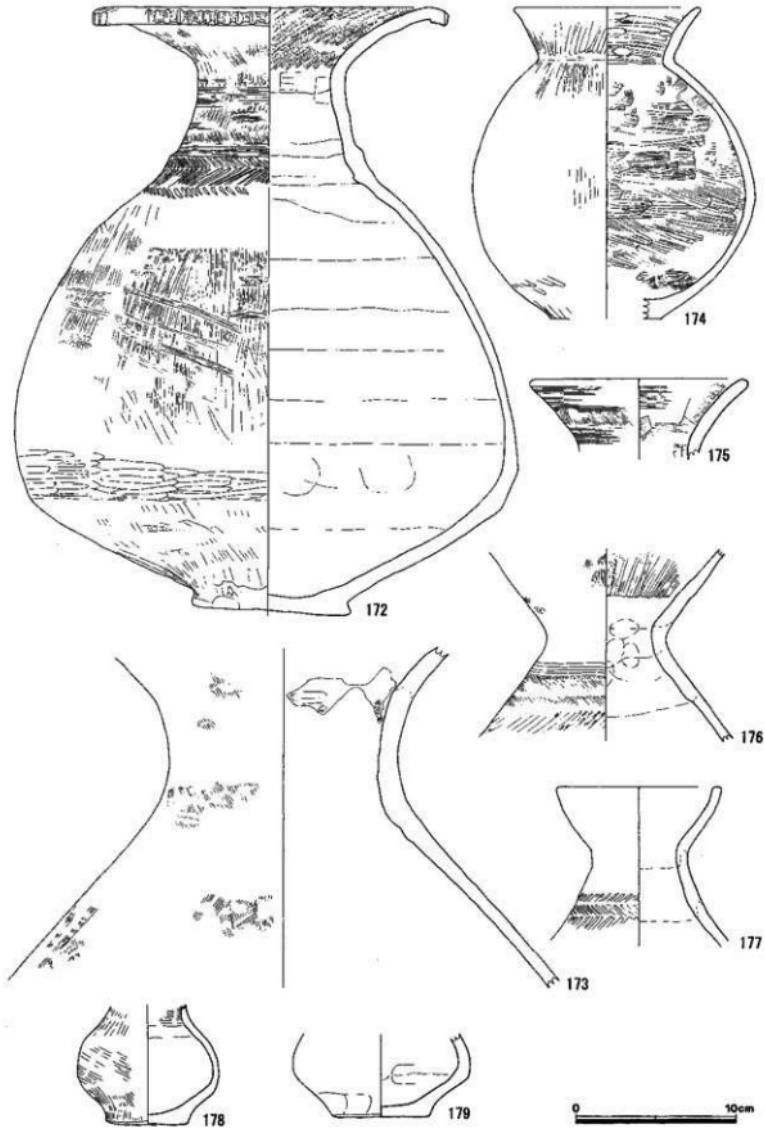
第39図 出土遺物実測図



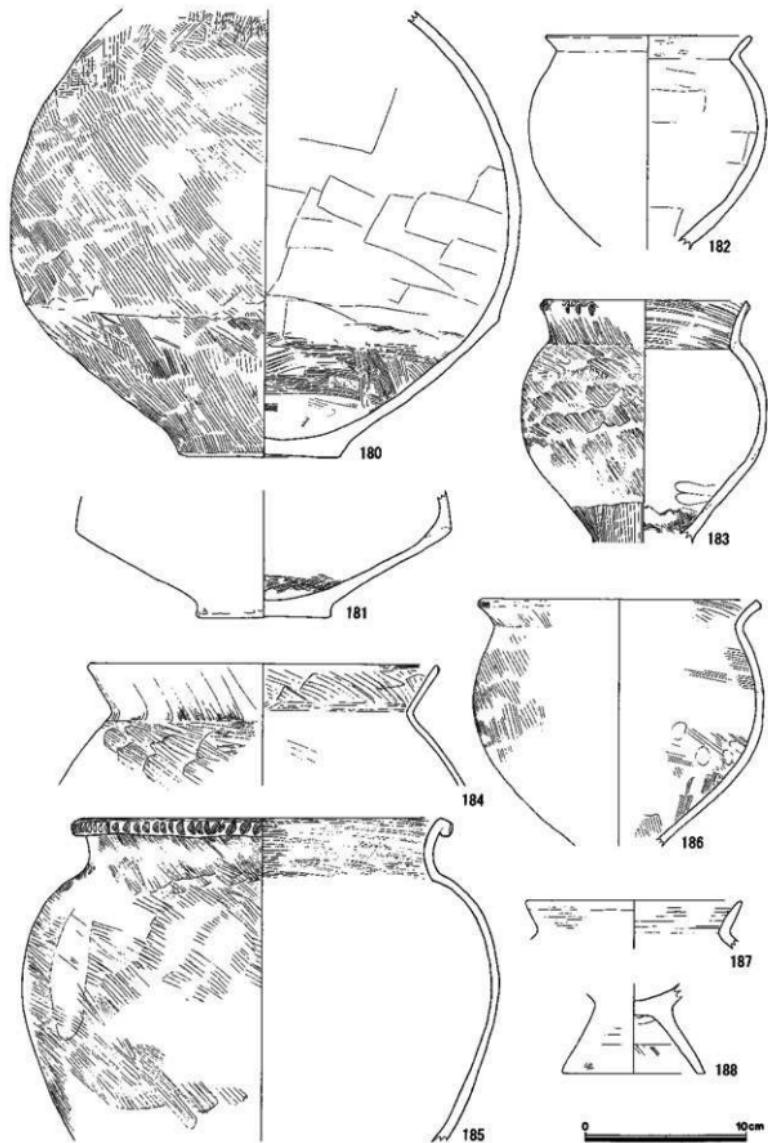
第40図 出土遺物実測図



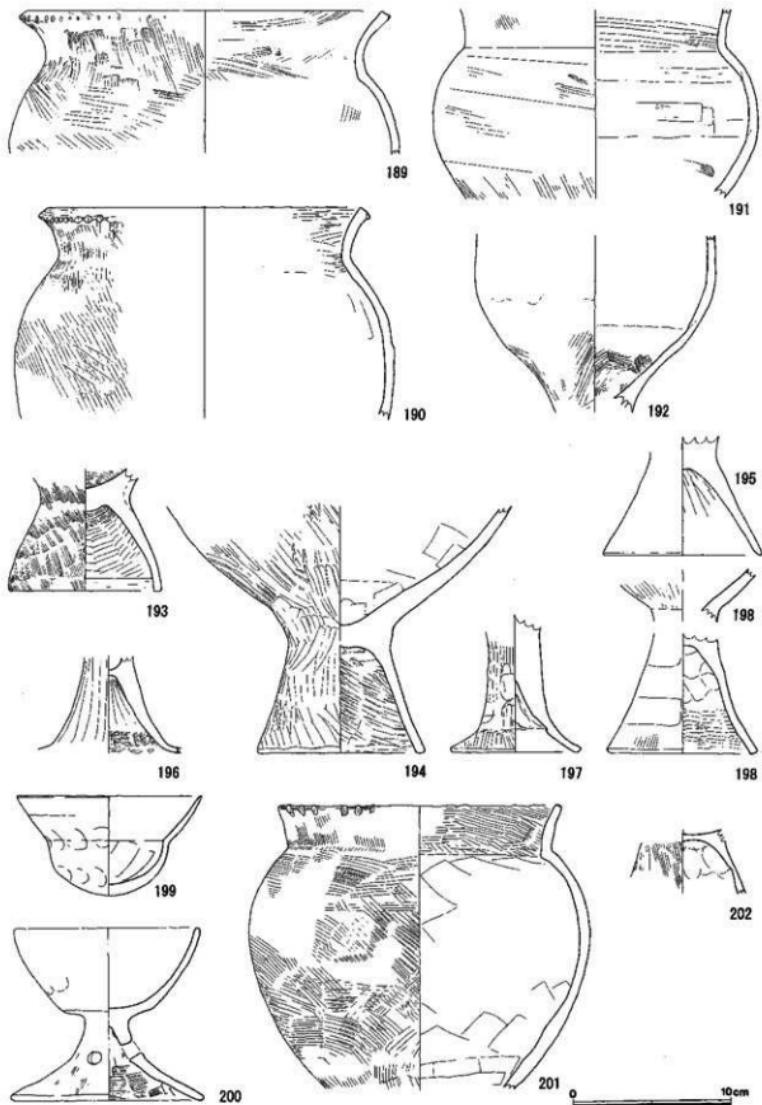
第41図 出土遺物実測図



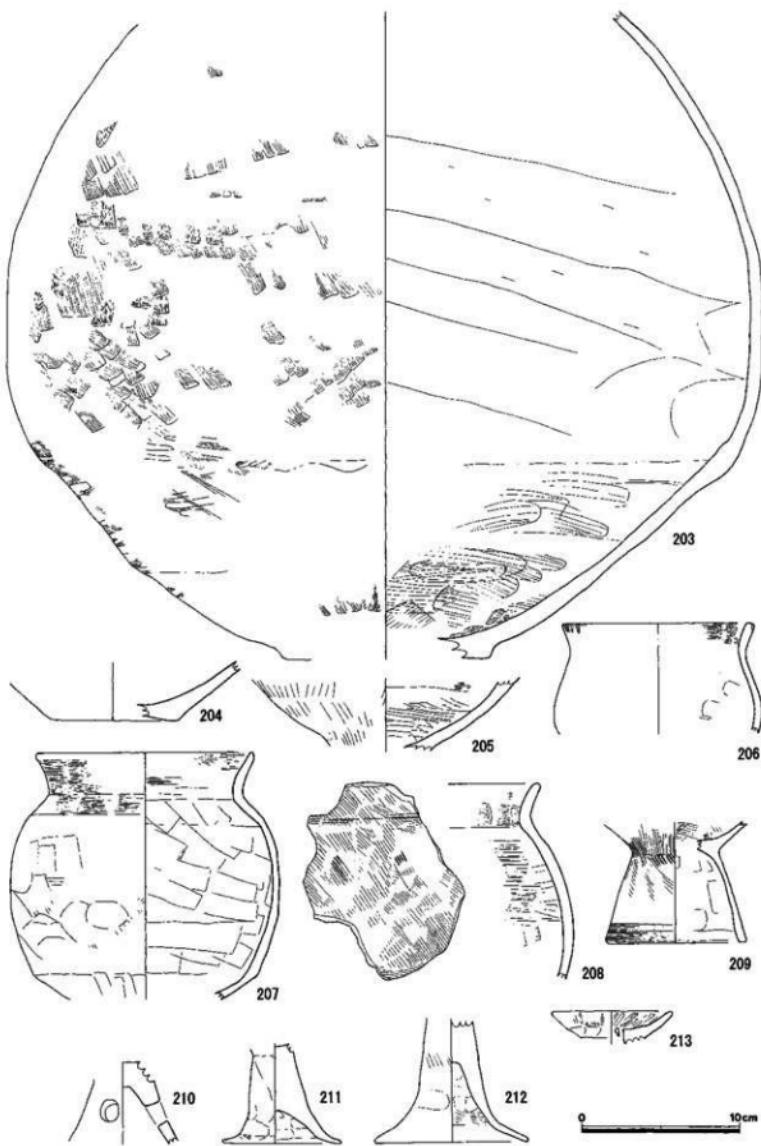
第42図 出土遺物実測図



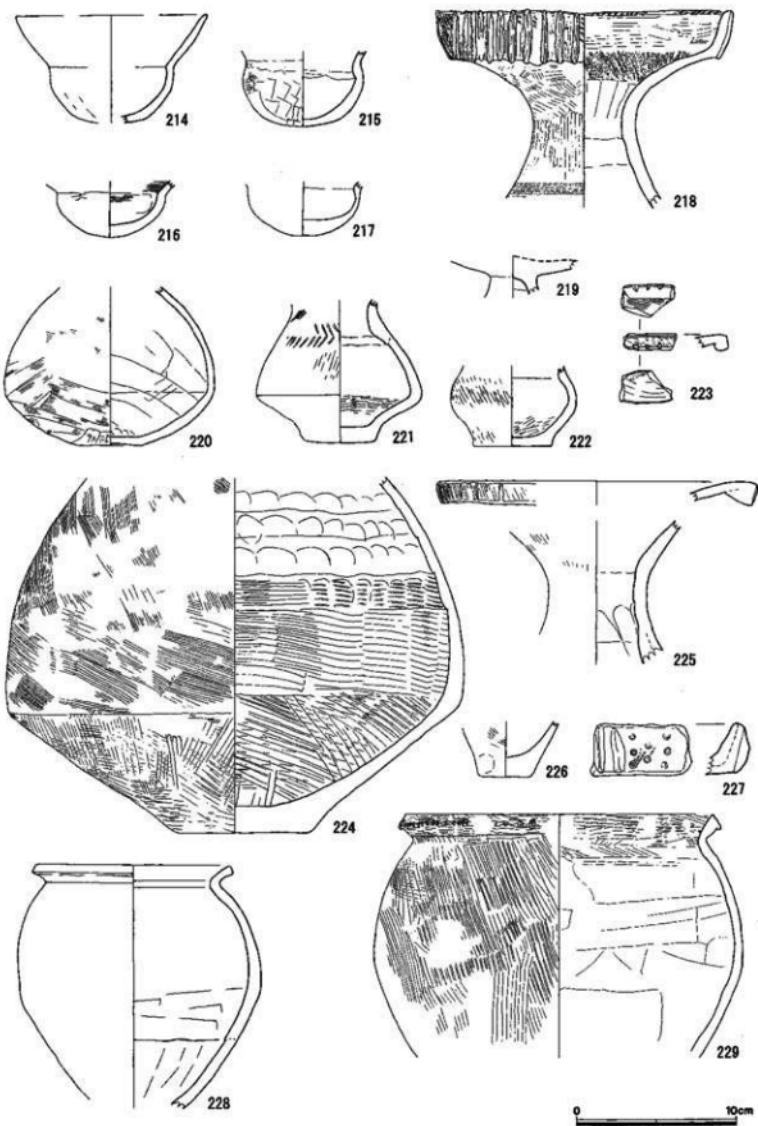
第43図 出土遺物実測図



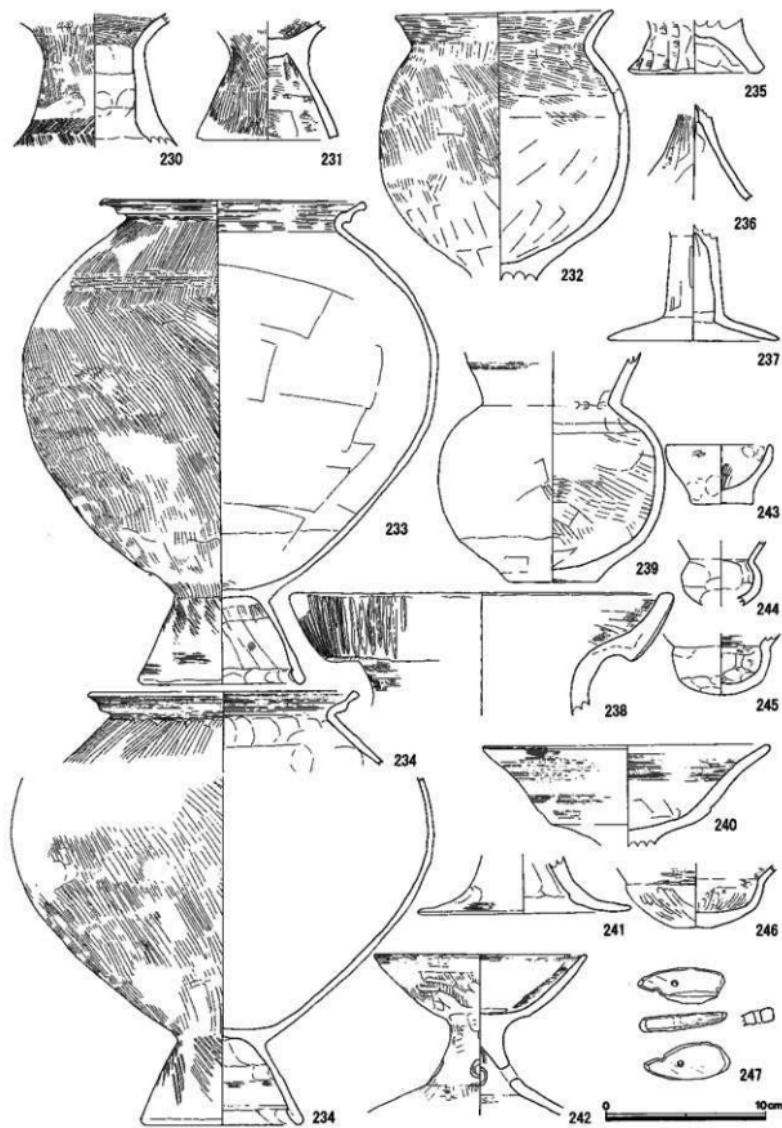
第44図 出土遺物実測図



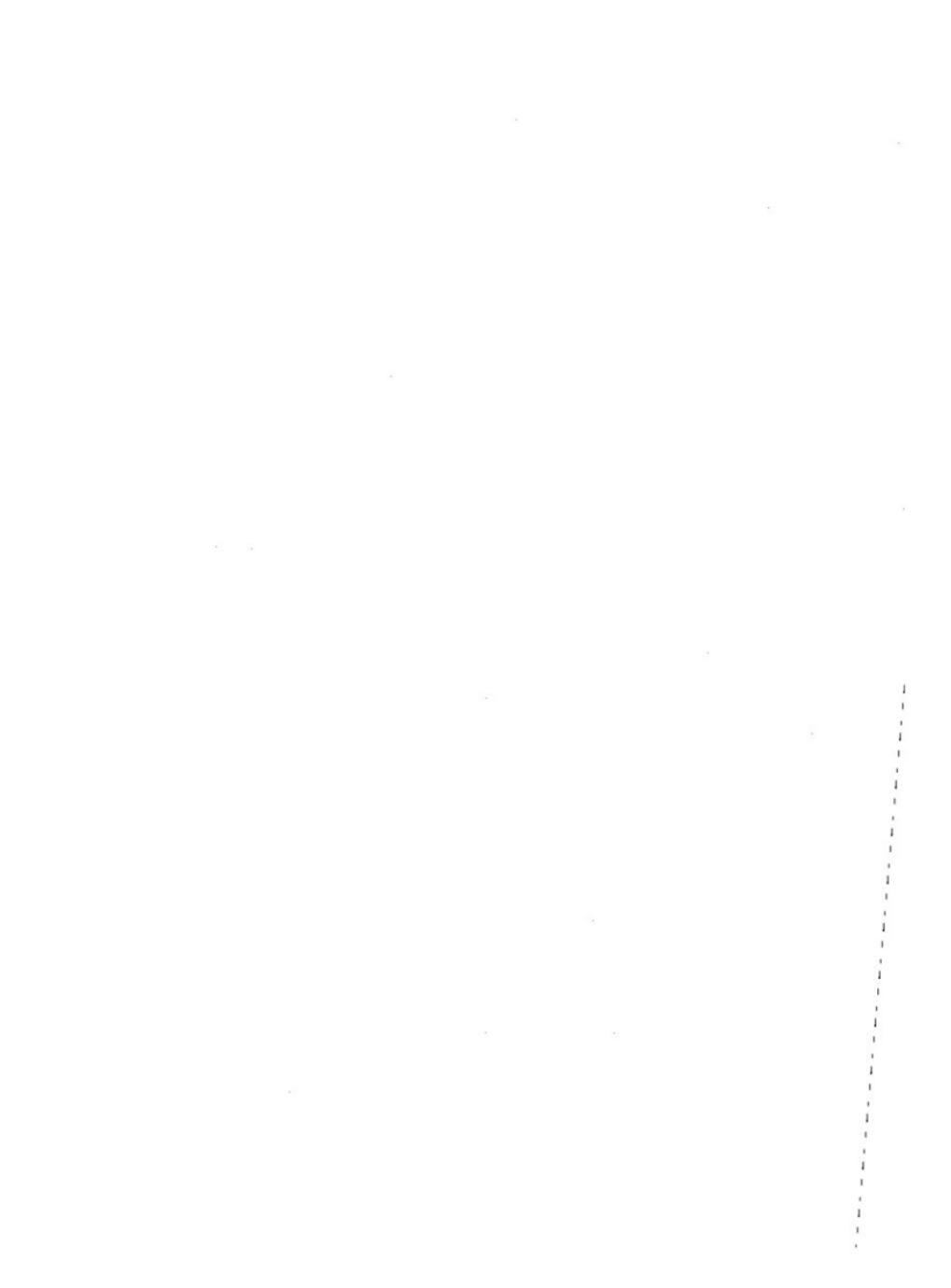
第45図 出土遺物実測図



第46図 出土遺物実測図



第47図 出土遺物実測図



# 古明遺跡

## 1. 調査に至る背景と経緯・調査の目的

### (1)調査に至る背景

掛川市は、主要中核都市である浜松市と静岡市のほぼ中間に位置し、東海道新幹線掛川駅や東名高速道路掛川インターチェンジなど、主要な交通拠点も整備されていることから、住宅需要も比較的活発で、集合住宅や一般住宅などの建設計画も少なくはない、遺跡内におけるこのような建設工事については、遺跡の遺構面が保存されない場合、記録保存のための発掘調査を実施している。

### (2)経緯・調査の目的

平成20年7月初旬に、調査地の住宅建設計画を把握し、7月16・17日に確認調査を行ったところ、古墳時代と奈良時代の須恵器が出土し、計画地の地下に包含層の存在を確認した。この結果を受け、事業者と遺跡の保存について協議を行ったが、掘削が深くまで及ぶ浄化槽と擁壁の設置部分については、遺跡の保存を図れないことが判明したため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

これを受け、平成20年7月25日に記録保存のための本発掘調査が適当との副申を付けて、県教育委員会に「埋蔵文化財発掘調査の届出書」を送達した。

これに対し、平成20年7月30日付けで、県教育委員会から事業者あてに、本発掘調査実施を内容とする「土木工事等のための発掘調査に係る指示について」が通知された。

## 2. 地理的・歴史的環境

### (1)地理的環境

古明遺跡は、掛川市中心部のやや東側に位置する。掛川市中心部から東部にかけての地域は、東端の山地の源流から西流して原野谷川に合流する逆川と、そこから派生する中小河川により開析された谷や段丘、丘陵からなる。掛川市中心部を形作る平野を大まかにみると、北・東・南の三方を山地や丘陵で閉ざされ、西に開いた形となっていて、古代以来の東海道や国道1号線などの主要幹線が、この低地を東西に貫いている。この平野は、調査地付近から東に向かい急に谷幅を狭め、山間への入口の景観を呈する。市東部は古代以来、山口と呼ばれ、山口郷、山口御厨があったが、山口の地名はこの地形に由来すると考えられる。

古明遺跡は、逆川により形成された沖積平野と、その北側の丘陵が接する部分にあたる。この付近では、この山裾に沿うように近世の東海道が通っていた。現在も調査地の30mほど南側を国道1号線が通っている。

### (2)歴史的環境

逆川流域の掛川市東部地域は、原野谷川流域の市西部地域と違い、明瞭な段丘が発達しておらず、遺跡は沖積平野の低地やこの低地に接する丘陵の狭い段丘平坦面、丘陵から沖積平野に延びる低位段丘上に立地する。掛川市東部地域の歴史の始まりを証拠づけるのは、調査地からやや東に離れるが、

東山口地区の標高95mの丘陵上に立地する向畠遺跡である。財団法人静岡県埋蔵文化財研究所により平成2年に行われた向畠遺跡の発掘調査において、縄文時代早期の押型土器が出土しており、遺構は確認されていないものの、この地域の歴史の始まりを告げている。調査地周辺の縄文時代の遺跡としては、逆川を挟んだ南側の低位段丘上に位置する中西遺跡の平成20年度の調査において、大量の縄文時代後期・晚期の土器が出土している。この調査では、住居跡などの遺構は検出されておらず、隣接する集落から谷状の窪地に土器が廃棄されたものと推測されている。またこの調査において、縄文晚期の土器に混じって弥生前期の壺が市内で初めて1点出土しており特筆される。同じく、逆川南側の弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡として、踊原遺跡、大六山遺跡がある。両遺跡とも複数尾根が続く丘陵地の最高位に近い標高80m～100mのわずかな平坦面に立地している。踊原遺跡は、昭和61年度の調査において、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡70、掘立柱建物跡20、方形周溝墓10を検出している。大六山遺跡では、昭和57年度の調査において、方形周溝墓18、円形状の周溝墓1、土器棺墓3を検出した。特筆すべき遺物として、磨製石剣、打製石槍が出土している。調査地と同じ逆川北側の丘陵に位置する遺跡としては、調査地の北方の丘陵緩斜面に立地する安養寺遺跡と深谷遺跡がある。安養寺遺跡は、昭和63年度と平成7年度に調査が行われ、弥生時代から古墳時代前期の竪穴住居跡76、掘立柱建物跡4、平安時代末の陶器を伴う建物跡9と道状遺構4などを検出している。平安時代の建物跡は寺院跡ではないかと考えられている。一方深谷遺跡は、昭和62年度の調査において、弥生時代後期の竪穴住居跡9、古墳時代前期から中期の竪穴住居跡28、奈良時代の土坑墓1などが検出された。この調査では、建物の鎮壇具の可能性がある奈良時代の小穴から白銅鏡2面と和同開珎11枚が埋納された状態で出土している。和同開珎は、この他に8枚発見されており、合計19枚の出土は、静岡県内唯一の出土量である。また、やや東に離れているが八坂地内の八坂別所遺跡からは、奈良時代の東海道の可能性がある道路状遺構と役所跡の可能性が指摘される掘立柱建物跡などを検出している。このように市東部地域には、今回の調査地を含め、古代の重要な遺跡が点在している点は、この地域の歴史的位置づけを探る重要な要素になると考えられる。中世以降の顕著な遺跡は周辺では発見されていないが、古代以来、東海道が通っていた今回の調査地とその周辺は、各時代を通じて歴史の変遷に関連を持った地域であったと考えられる。

### 3. 調査の方法と経過

調査区は、既存住宅にはほぼ平行して設置される擁壁部分と、これに近接し、北方向に直行して設置される浄化槽設置部分を合わせた逆T字形の調査区となり、擁壁部分を南区、浄化槽部分を北区（北拡張区）と呼称した。擁壁の中心線を、調査の東西の主軸線とし、この主軸線と、北側に直行する浄化槽部分の中心線との交点を実測の基準点とした。現場での図面作成は20分の1と10分の1を併用した。写真撮影は、 $6 \times 7$  カメラ1台（プロニー白黒用）と35mmカメラ2台（カラーネガとカラーポジ用）を用いた。調査は、平成20年8月4日から開始し、8月8日に埋め戻しを完了して現地調査を終了した。

### 4. 調査の内容

調査は、南区で幅1m、北区で幅1.4mと狭く、全容解明は困難であり、不明確な部分が多いが、不明遺構と小穴などの遺構を検出した。北区では、整地層の可能性がある土層が堆積していたことか

ら、最終的にはこの部分を取り去る形まで掘削し完掘とした。

遺物としては、確認調査時に古墳時代後期から奈良時代の須恵器や土師器が、北区近辺から、集中して出土したが、今回の調査での出土は少量であった。

## (1)遺構

### ①性格不明遺構（S X）

北区の北東隅部分から検出された遺構である。発掘区の壁際にあり、遺構の大部分が発掘区の外に位置すると考えられ、全体の規模と形状は不明確である。今回の調査範囲の観察では上部が幅広く下部がロート状にすばまるピット状の形状をみせる。北区の土層図第9・10・14層がそれにあたる。土層図の第9層の部分と、下層の第10・14層の部分で土層の様相が異なり、別の遺構の可能性がある。上層の第9層は黄褐色粘質土に軟質泥岩の破碎物が均等に混ざり、土器片を含む。下層部分からは、遺物の出土はみなかつたが、土層に攪拌された状況がみられた。この遺構は、軟質泥岩の破碎物が固結した基盤層（第17層）を深く穿つ形となっている。今回の調査範囲におけるこの遺構の最深部は、現在の地表面から1.7mを測る。

遺構の時期は、奈良時代の遺物が出土していることから奈良時代～平安時代と想定している。

### ②小穴

3箇所で小穴を検出したが、いずれも深さ15cmほどと浅く、遺構の時期性格は不明である。

### ③北区整地層

南区の中央部分には、径1cmほどの小砂利からなる土層（第17層）が帯状に分布していて、調査区の地形は、ここを頂点に北側と西側に下がる形となっている。特に北区では南区側から緩やかに下がり50cmほど低くなっている。この小砂利層は、その組成から河川による自然堆積と考えているが、比較的高い位置から分厚く堆積している状況などから、沖積地の自然堆積にしては、やや疑問の点もある。この砂利層の上面にはやはり河川の自然堆積と考えられるシルト・砂の安定した土層（第15・16層）が堆積している。その上層に堆積する第11・12・13層もシルト・砂を主体とした土層でしまっているが、やや混合した様相がみられ整地層の可能性がある。

この部分の上部、第4・5層は沼の堆積物と考えられるが、近隣の古者の話によると、昭和初期まで、調査地の西側の平坦地に大きな屋敷が建っていたと言う、今回の調査地はこの屋敷に付随した蔵が建っていた部分であり、そこには小さな池があったとのことである。第4・5層はこの近世・近代の池の跡と考えられる。

## (2)遺物

第50図1～6までは、本調査で出土したものであり、1・2・5・6が、北区から出土した須恵器、3・4が、南区から出土したもので、4は、須恵器、3は、灰釉陶器である。1は、有台の皿である。高台径は17.9cm。2は、有台の皿であり高台径は8.3cm。高台内側に黒い付着物があり墨書の可能性がある。5は、壺蓋と考えられる。最大径は14.2cm。6は、壺蓋と考えられる。最大径は11.0cm。4は、壺蓋である。最大径は16.5cm。3は、灰釉陶器の皿と考えられ口径11.5cm、高台径8cm。第50図7～16、第51図の17～25が確認調査で出土した須恵器である。7は、2段透の高壺で接合部の直径3.3cm、器高は現存で8.3cmを測る。8は、壺身である口径15.1cm、最大径18.2cm。9は、壺の口頸部で口径は33.9cmである。10は、壺の口頸部で口径は21.9cmである。11は、壺の口頸部で口径は25.4cmである。12は、壺の口頸部で口径は21.1cmである。13は、壺蓋である。最大径は18.1cm。14は、壺蓋

である。最大径は20.9cm。15は、壺蓋である。最大径は17.0cm。16は、壺蓋である。最大径は11.2cm。17は、壺蓋と考えている。最大径は15.9cm。18は高杯の脚部である。接合部の直径5.2cm、器高は現存で8.0cmを測る。焼成が不完全で軟質である。19は、無台壺身である。口径は13.0cm。器高は3.6cm。20は、無台の皿である。口径は21.1cm。器高は1.9cm。21は、有台壺身である。最大径16.0cm、高台径9.9cm。22は、無台壺身である。底部径10.0cm。23は、壺身と考えている。口径9.6cmと推定している。24は、壺身と考えている。口径11.7cmと推定している。25は、壺身と考えている。口径17.5cmと推定している。

第51図の26～32が確認調査で出土した土師器である。28は、壺の口縁部と考えらえる。30は、壺の口縁部と考えらえる。口径は10.0cm。26は壺の口頭部である。口径は21.0cm。27も壺の口頭部である。口径は18.7cm。29は、壺の口頭部と考えられる。口径は14.9cm。31は、有台壺身と考えられる。高台径12.5cm。32は、高杯の脚部と考えられ器高は現存高で6.5cm。

## 5.まとめにかえて

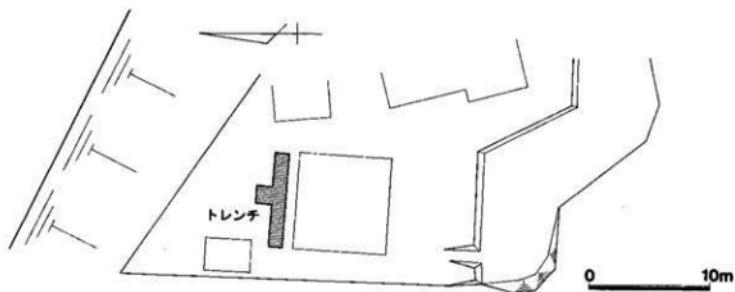
今回の古墳遺跡の発掘調査は、調査区の幅が1m程度と制約のある状態での調査であったため、不明確な部分が多く、全容の解明には至らなかったが、完形品は無いものの大ぶりの須恵器と土師器の破片が狭い範囲から出土しており、特異な点がみられる。度々述べたが、この調査地点の30mほど南側を近世の東海道が通っており、古代の東海道もこの近辺を通っていたと考えられていることから、このような立地条件を関連させて考える必要があるかもしれない。周辺地域における今後の調査の進展のなかでこのような点が解明されていくものと考える。

### (参考文献)

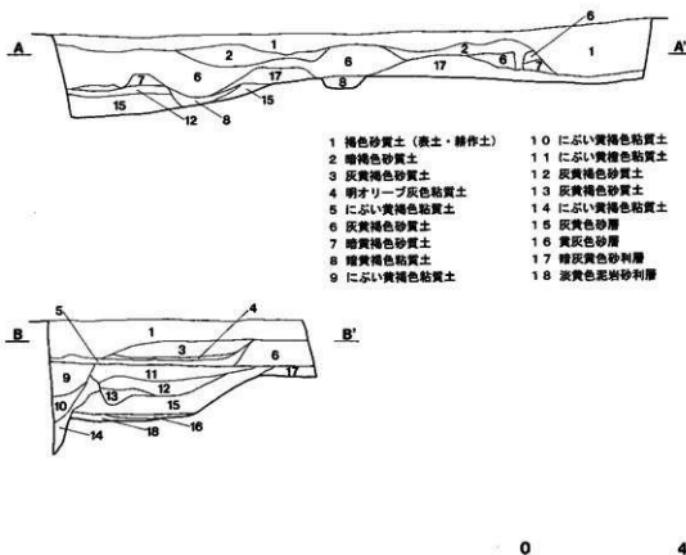
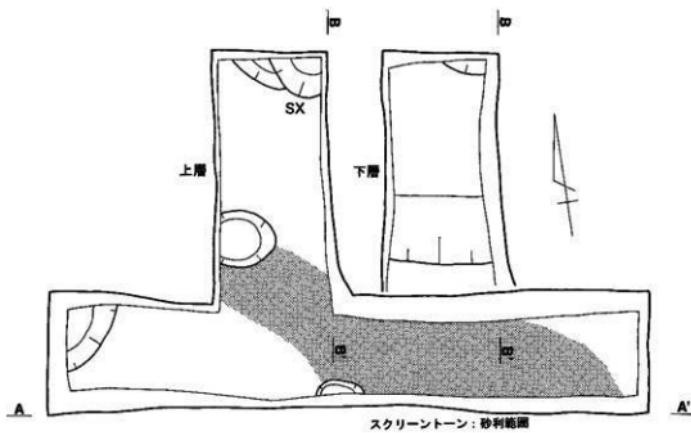
- |             |   |
|-------------|---|
| 掛川市         | 1997 「掛川市史 上巻」  |
| 掛川市         | 2000 「掛川市史 資料編古代・中世」  |
| 掛川市教育委員会    | 2006 「八坂別所遺跡・頭地遺跡・栗下遺跡・メノト遺跡 県営農地総合開発 整備事業東山口地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 |
| 掛川市教育委員会    | 2007 「八坂別所遺跡II・III 牛岡遺跡 栗下遺跡II 県営農免農道整備事業 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」      |
| 掛川市教育委員会    | 2008 「市内遺跡発掘調査報告書」  |
| 掛川市教育委員会    | 2009 「今坂遺跡第6次調査・瀬戸山II遺跡・高田遺跡第21次調査発掘調査報告書」                      |
| 静岡県埋蔵文化財研究所 | 1992 「坂尻遺跡 平成3年度袋井バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 本文編」                         |
| 袋井市教育委員会    | 1995 「坂尻遺跡 遺物・總括編 大和ハウス工業㈱中部工場内埋蔵文化財発掘調査報告書」                    |
| 菊川町教育委員会    | 2001 「土橋遺跡 静鉄ストア建設に伴う発掘調査」                                      |



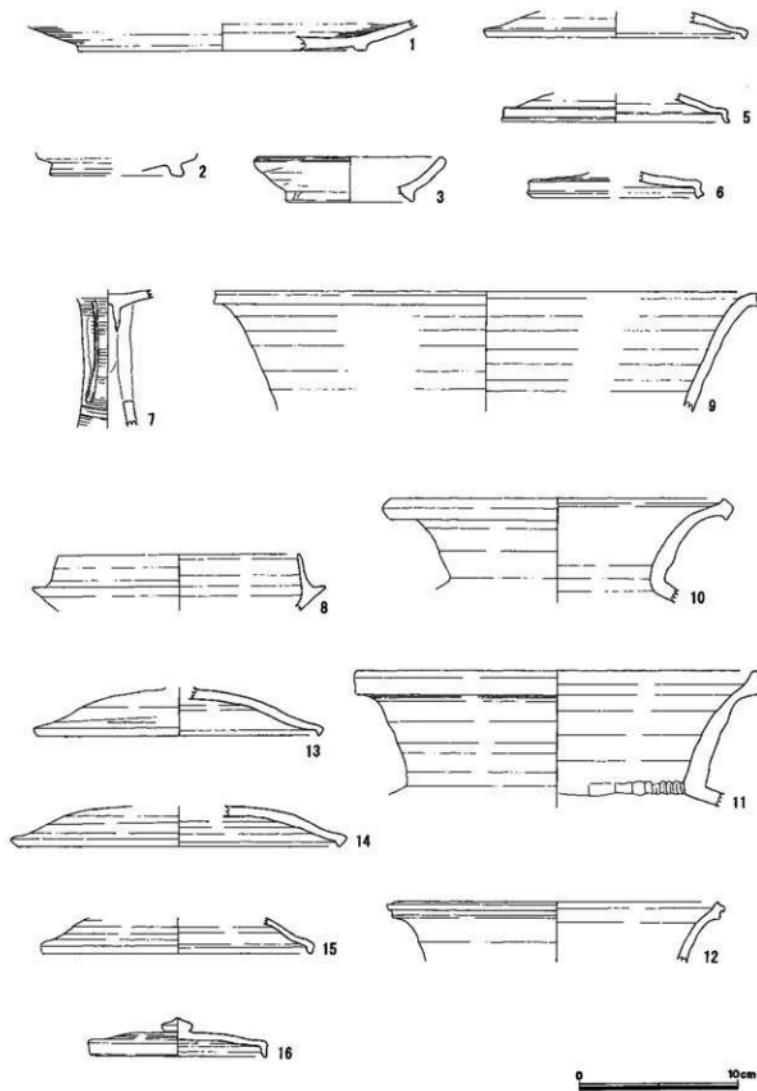
古都遺跡



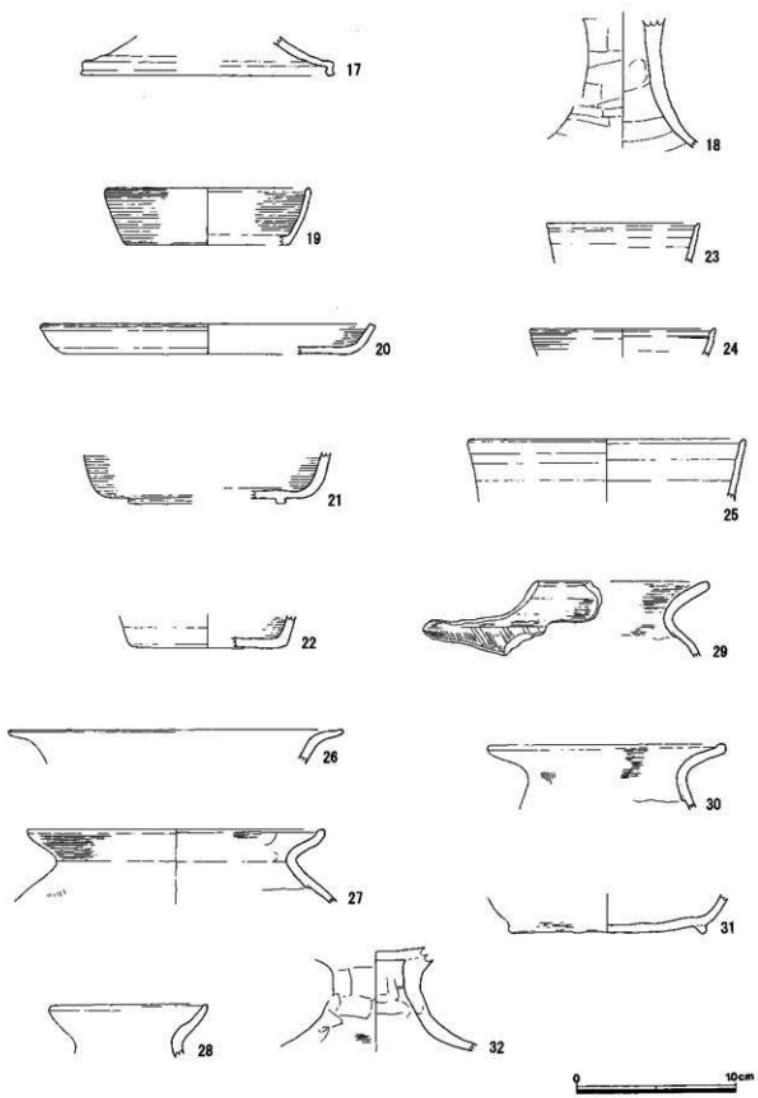
第48図 調査地点位置図・発掘トレンチ配置図



第49図 造構全体図・土層図



第50図 出土遺物実測図



第51図 出土遺物実測図

# 瀬戸山I遺跡出土赤色顔料の科学分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

## 1. はじめに

掛川市高田に所在する瀬戸山I遺跡からは、赤色の顔料がつまたた壺が出土している。この赤色顔料について蛍光X線分析を行い、組成を検討した。

## 2. 試料と方法

分析対象資料は、壺につまたた赤色顔料である。壺は、古墳時代中期の堅穴住居跡の床面より高いレベルで出土している。赤色顔料をセロハンテープに極少量採取して分析試料とした。

分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type IIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mAのロジウムターゲット、X線ビーム径が100μmまたは10μm、検出器は高純度Si検出器（Xerophy）である。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪いため、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。

本分析での測定条件は、50kV、0.54mA、ビーム径100μm、測定時間500sに設定した。定量分析は標準試料を用いないFP（ファンダメンタル・バラメータ）法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、定量値の誤差は大きい。

また、採取した試料は光学顕微鏡下での観察も行い、赤色顔料の粒子形状を確認した。

## 3. 結果

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を図版上段に示す。

分析の結果、鉄(Fe)、ケイ素(Si)を中心に、アルミニウム(Al)、リン(P)、硫黄(S)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)が検出された。

また、顕微鏡観察により得られた画像を図版下段に示す。赤色パイプ状の粒子が多数観察された。

## 4. 考察

この時期に使用されていた赤色顔料としては、朱(水銀朱)とベンガラが挙げられる。水銀朱は、硫化水銀(HgS)で鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、鉱物名は赤鉄鉱)を指すが、広義には鉄(III)の発色に伴う赤色顔料全般を指し(成瀬, 2004)、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直徑約1μmのパイプ状の粒子形状からなるものが多く報告されている。これは鉄バクテリアを起源とすることが判明しており(岡田, 1997)、含水硫酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す(成瀬, 1998)。

試料からはケイ素など土砂成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出されなかった。鉄が高く検出されていることから、赤い発色は鉄によるものであると推定できる。すなわち

ち、顔料としてはベンガラにあたると考えられる。また、光学顕微鏡下で観察したところ、パイプ状の粒子が大量に検出されたことから、鉄バクテリアを起源とする、いわゆるパイプ状ベンガラであったといえる。

## 5. おわりに

瀬戸山Ⅰ遺跡より出土した壺につめられた赤色顔料について分析した結果、鉄が高く検出され、かつパイプ状粒子が大量に観察された。以上よりこの赤色顔料はベンガラであると考えられる。

### 引用文献

- 成瀬正和 (1998) 繩文時代の赤色顔料Ⅰ—赤彩土器一. 考古学ジャーナルNo438. 10-14, ニューサイエンス社.
- 成瀬正和 (2004) 正倉院宝物に用いられた無機顔料. 正倉院紀要, 13-61, 宮内庁正倉院事務所.
- 岡田文男 (1997) パイプ状ベンガラ粒子の復元. 日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集. 38-39.



瀬戸山 I 遺跡第3次調査全景（東から）（合成写真）



瀬戸山 I 遺跡第3次調査  
SH27赤色顔料（ベンガラ）入り  
壺出土状況（南から）



SH27赤色顔料入り壺出土状況  
(南から)



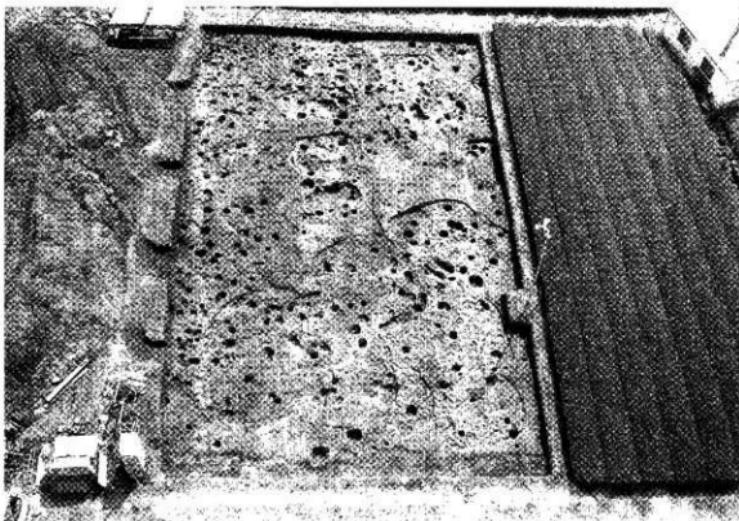
赤色顔料入り壺内部の状況



瀬戸山 I 遺跡第3次調査区遠景（西から）



瀬戸山 I 遺跡第3次調査区西半全景（東から）



瀬戸山Ⅰ遺跡第3次調査区西半全景（北から）



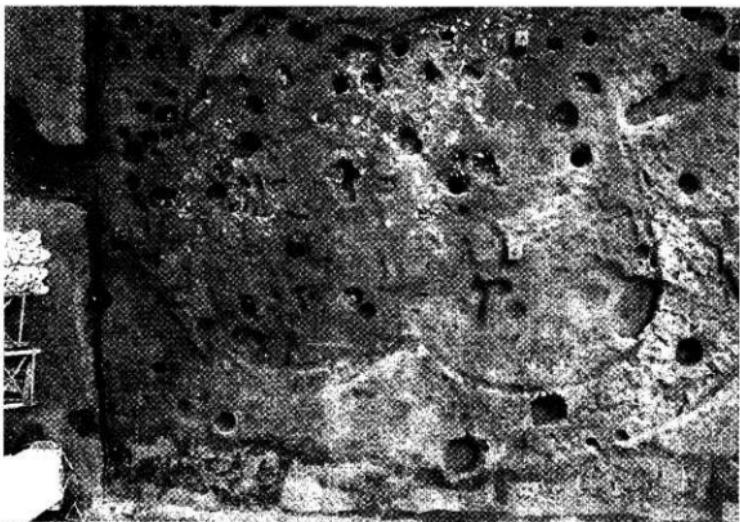
瀬戸山Ⅰ遺跡第3次調査区西半全景（南から）



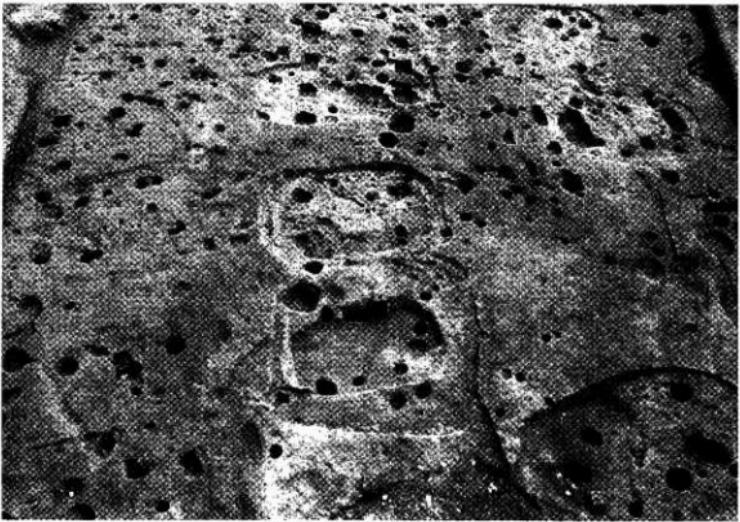
瀬戸山 I 遺跡第3次調査区東半全景（西から）



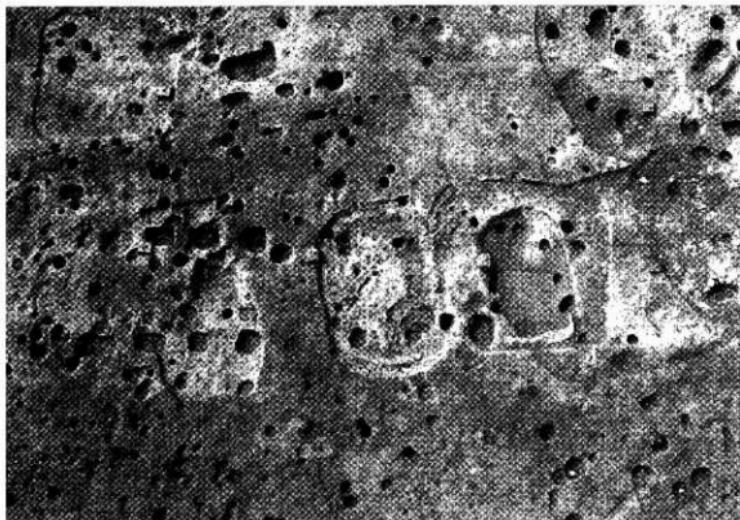
瀬戸山 I 遺跡第3次調査区東半全景（北から）



SH08・09・17・18・30完掘状況（北から）



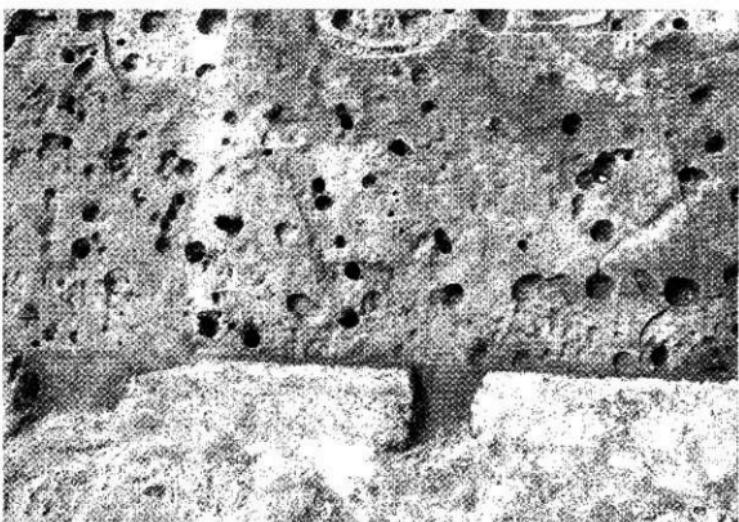
SH12・13・14・15・01・02、SB03・04完掘状況（北から）



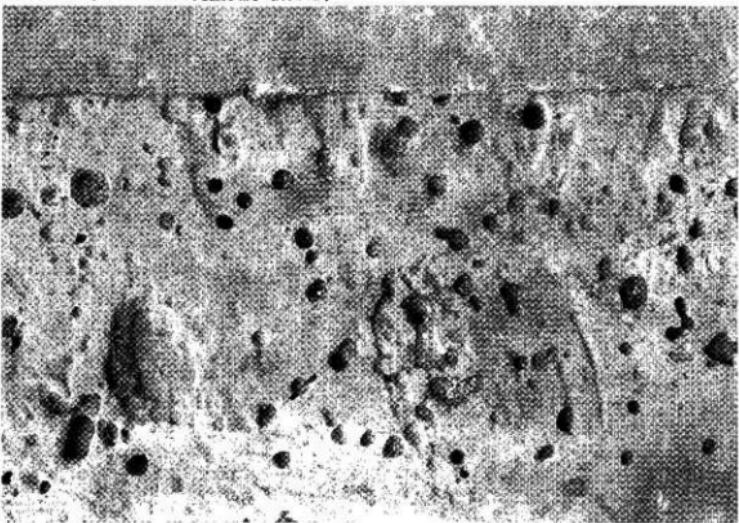
SH13・14・15・01・02・31、SB03発掘状況（東から）



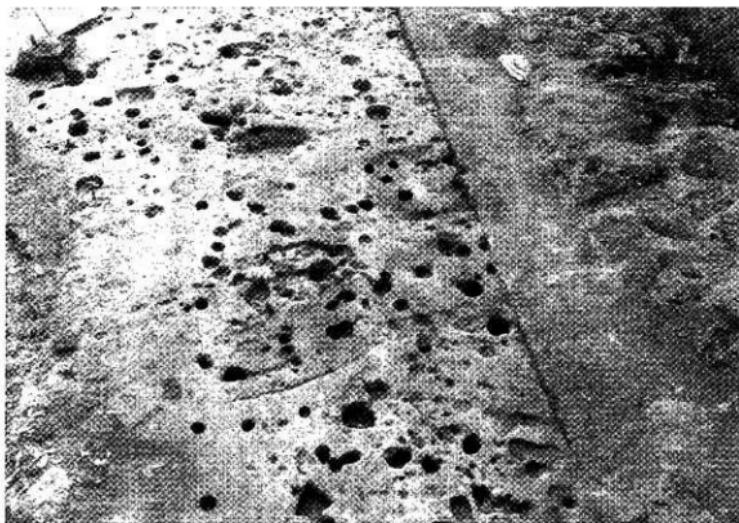
SH15・32・01、SB03発掘状況（北から）



SH20・22、SB01・05完掘状況（東から）



SH24・25・26、SB01・02、SK01完掘状況（東から）



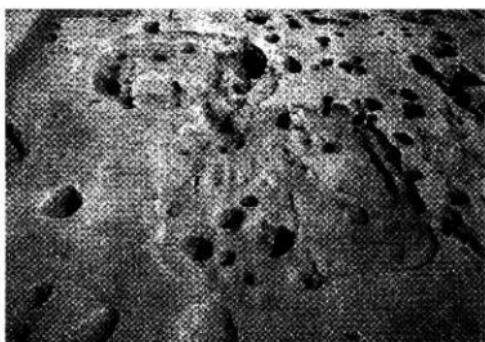
SH24・25・26、SB01・02完掘状況（北から）



SH27・28完掘状況（北から）



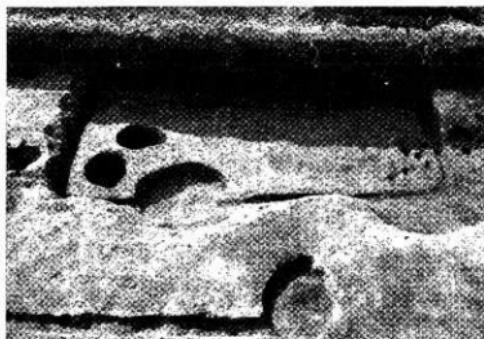
西半区作業風景（南から）



SH01・02完掘状況（南から）



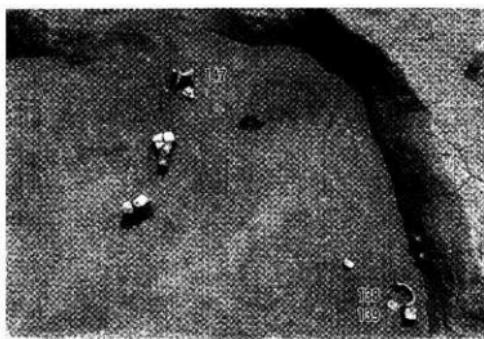
SH03完掘状況（東から）



SHO4完掘状況（東から）



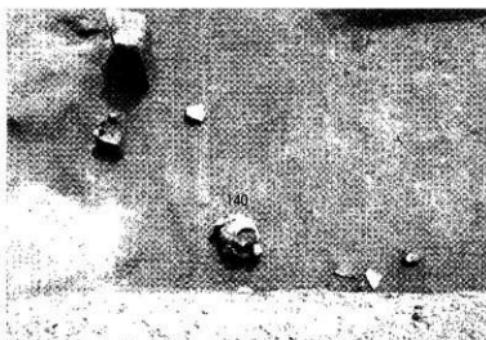
SHO4遺物出土状況〔1〕  
(南から)



SHO4遺物出土状況〔2〕  
(西から)

四

版



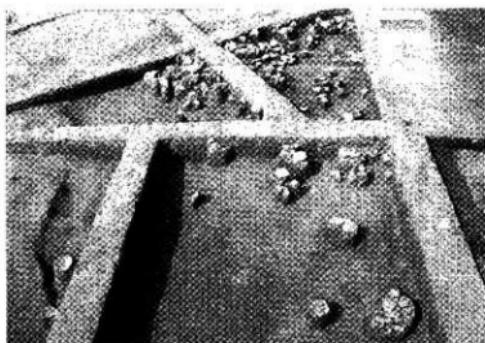
SHO4遺物出土状況 [3]  
(西から)



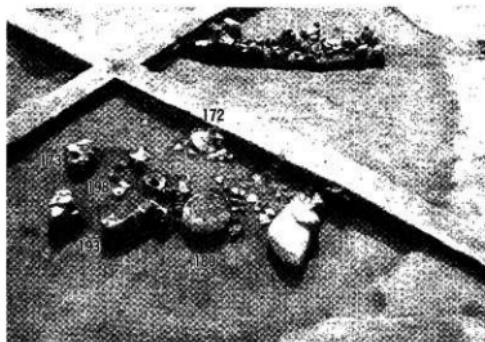
SHO6・SHO7・SHO8・SHO9完掘状況  
(南から)



SHO7床面検出状況 (南から)



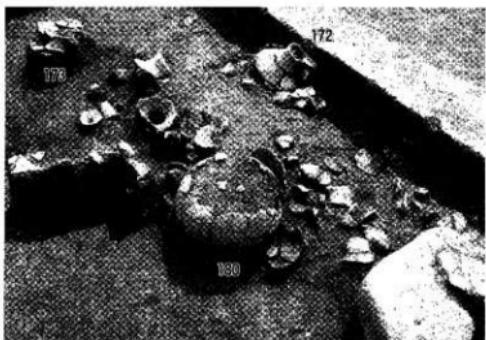
SH09遺物出土状況 [1]  
(南から)



SH09遺物出土状況 [2]  
(北東から)



SH09遺物出土状況 [3]  
(北から)



SH09遺物出土状況 [4]  
(北東から)



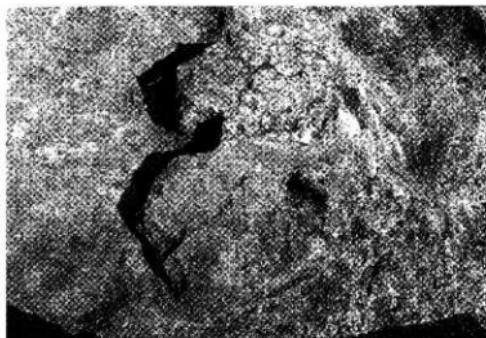
SH09遺物出土状況 [5]  
(土層観察ベルト部分) (南から)



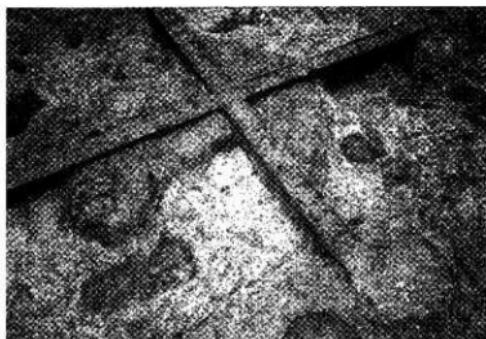
SH13遺物出土状況 (南から)



SH15炉検出状況（南から）



SH17炉検出状況（南から）



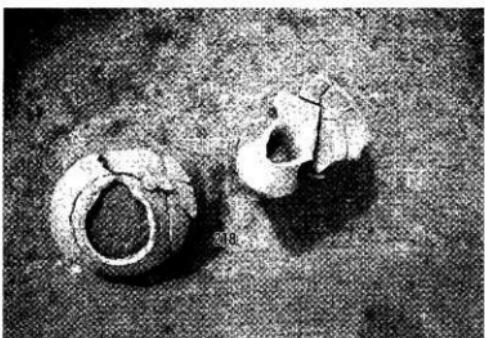
SH22貼床検出状況（南から）



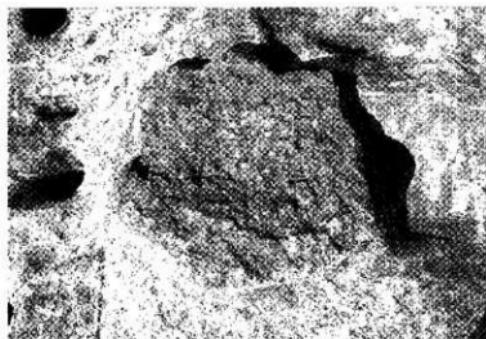
SH24貼床検出状況（南から）



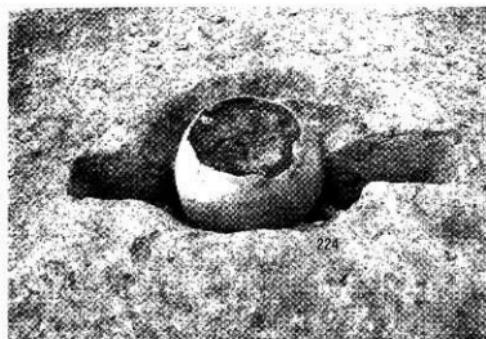
SH24完掘状況（南から）



SH24遺物出土状況（東から）



SH27炉検出状況（南から）



SK01遺物（土器棺）出土状況  
(東から)



SP284遺物出土状況（南から）



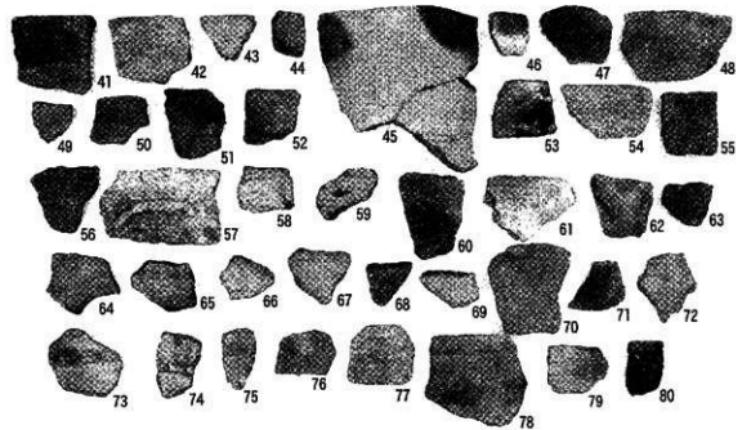
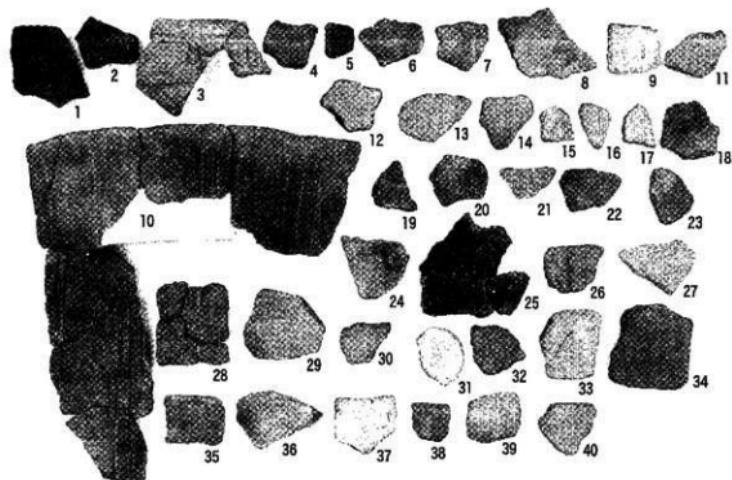
SX01検出状況（東から）

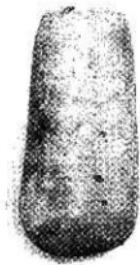
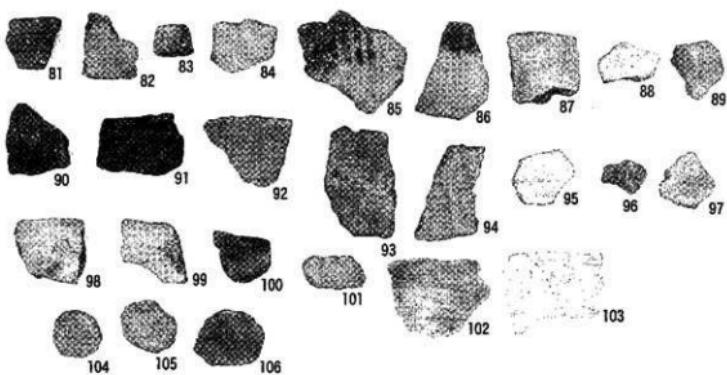


SX01遺物出土状況（北東から）



SX02完掘状況（南から）

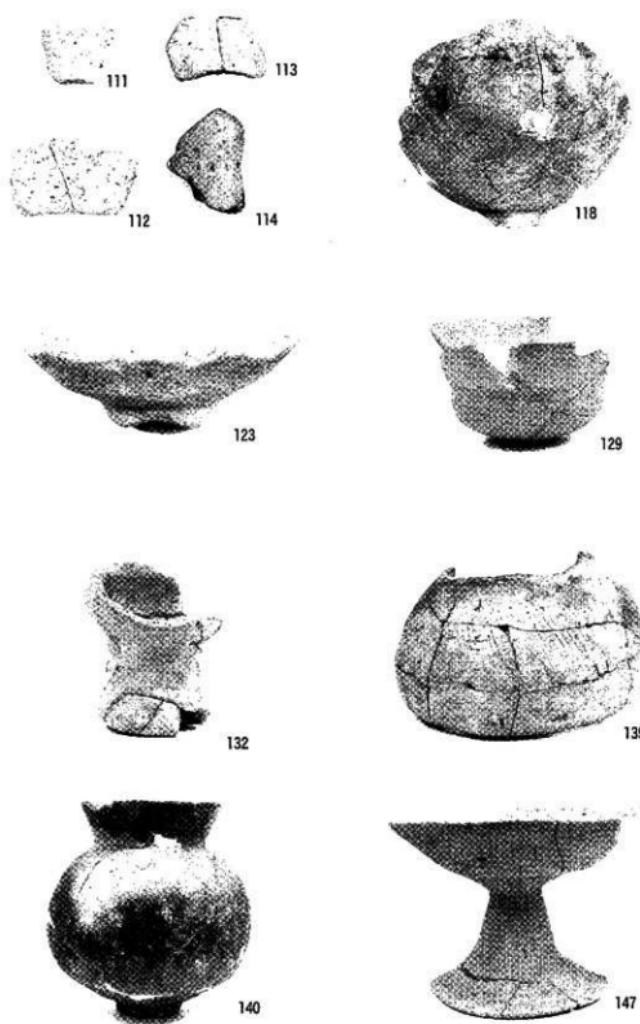


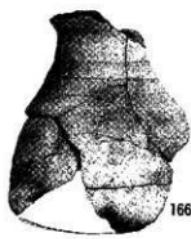
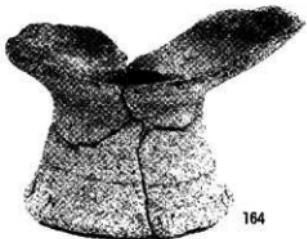
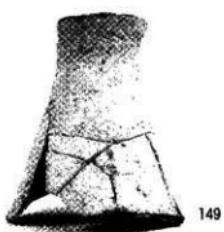


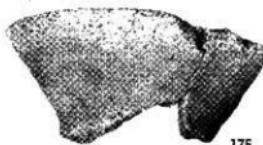
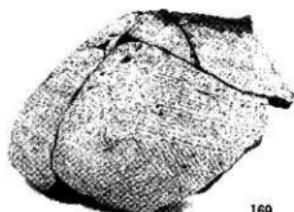
109

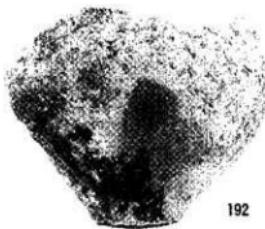
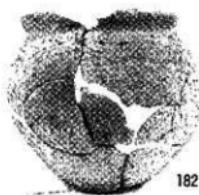
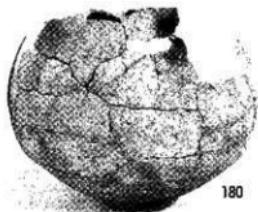
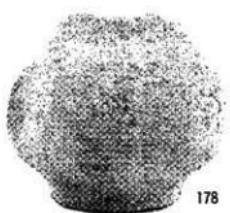


110











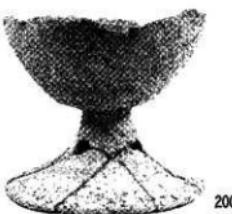
194



196



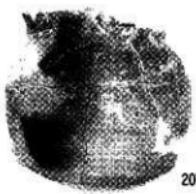
198



200



203



207



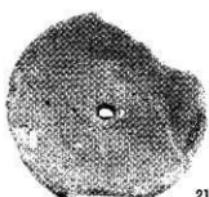
211



212



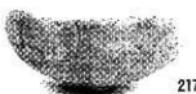
213



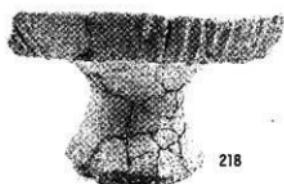
213



216



217



218



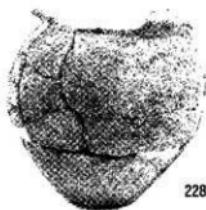
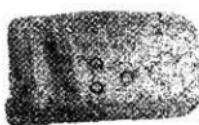
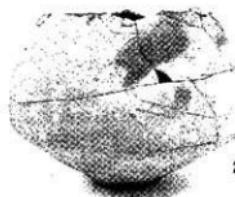
220



221

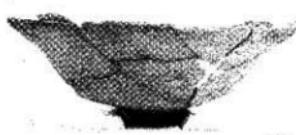


222





239



240



241



242



143



244



245



247



古明遺跡  
南区完掘状況（西から）



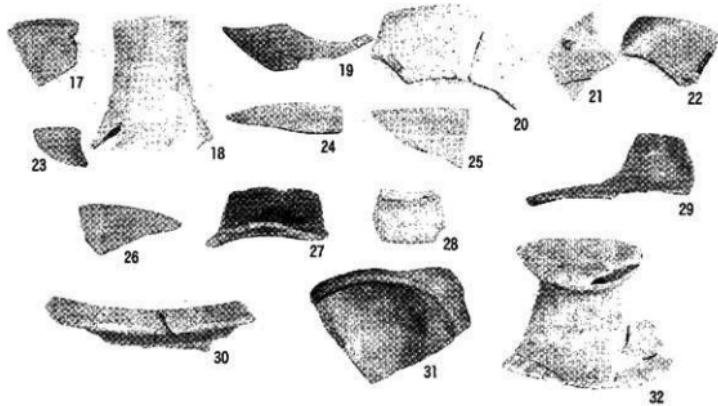
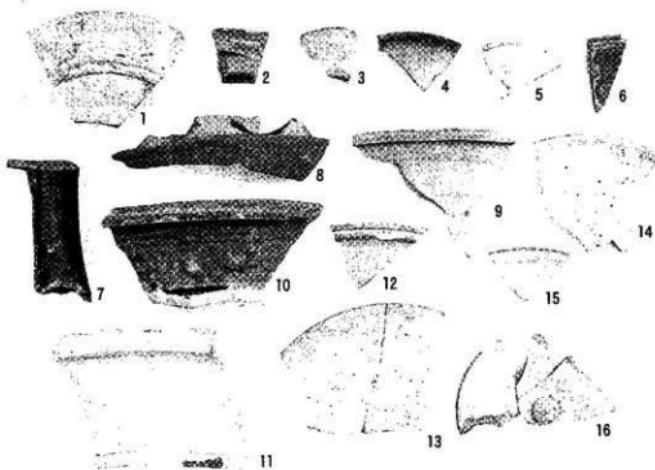
北区完掘状況（北から）

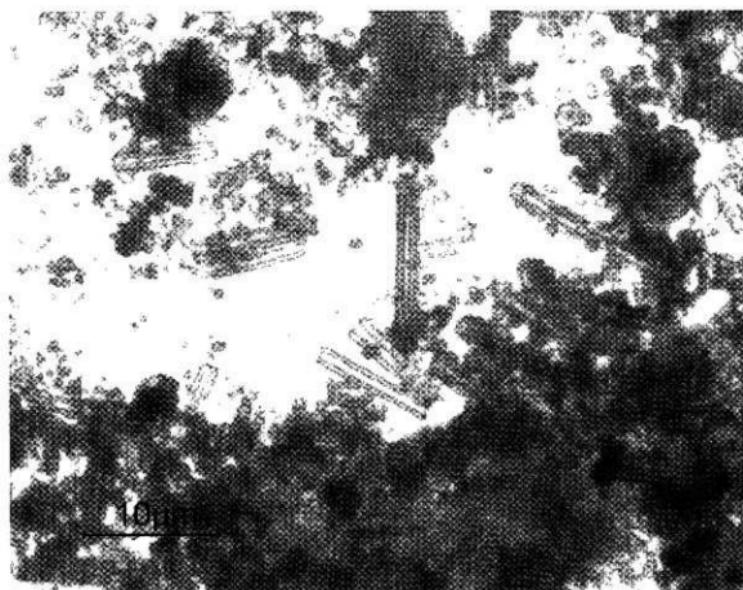
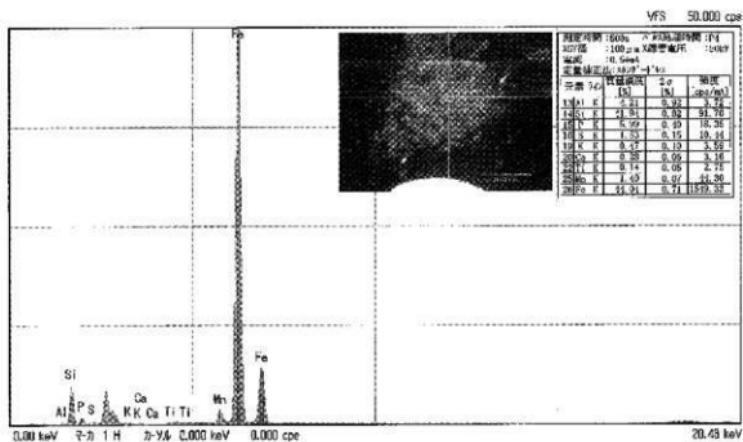


北区北東開土層堆積状況  
(南から)

四

版





瀬戸山 I 遺跡出土赤色顔料の科学分析写真



## 報告書抄録

|       |                            |
|-------|----------------------------|
| ふりがな  | せどやまⅠいせきだい3じちょうさ・こみょういせき   |
| 書名    | 瀬戸山Ⅰ遺跡第3次調査 古明遺跡           |
| 著者名   | 市内遺跡発掘調査報告書                |
| 著者名   | 木佐森道弘、大熊茂広、戸塚和美            |
| 編集機関  | 掛川市教育委員会                   |
| 所在地   | 〒436-8650 静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1 |
| 発行年月日 | 西暦2010年3月31日               |

| 所収遺跡名           | 所在場       | コード               |                       | 北緯                | 東経                 | 調査期間                     | 調査面積                | 調査原因 |
|-----------------|-----------|-------------------|-----------------------|-------------------|--------------------|--------------------------|---------------------|------|
|                 |           | 市町村               | 遺跡番号                  |                   |                    |                          |                     |      |
| 瀬戸山Ⅰいせきだい3じちょうさ | 静岡県掛川市高田  | 22213             | K-235                 | 34度<br>47分<br>17秒 | 137度<br>56分<br>53秒 | 2008年7月<br>~<br>2008年10月 | 1,500m <sup>2</sup> | 茶園改植 |
| 古明遺跡            | 静岡県掛川市齒ヶ谷 |                   | K-189                 | 34度<br>46分<br>59秒 | 138度<br>02分<br>30秒 | 2008年8月<br>~<br>2008年8月  |                     |      |
| 所収遺跡名           | 種別        | 主な時代              | 主な遺構                  |                   | 主な遺物               |                          | 特記事項                |      |
| 瀬戸山Ⅰ遺跡第3次調査     | 集落跡       | 縄文時代              |                       |                   | 土器、石器              |                          |                     |      |
|                 |           | 弥生時代<br>~<br>古墳時代 | 竪穴住居跡、掘立柱建物跡<br>土器埋納坑 |                   | 土器                 |                          |                     |      |
| 古明遺跡            | 不明        | 古墳時代              |                       |                   | 土器                 |                          |                     |      |
|                 |           | 奈良時代<br>~平安       | 性格不明遺構、小穴             |                   | 土器                 |                          |                     |      |

**瀬戸山 I 遺跡第3次調査  
古明遺跡**

**市内遺跡発掘調査報告書**

2010年3月31日

発行 指川市教育委員会  
静岡県指川市長谷一丁目1番地の1  
TEL 0537-21-1158

印刷 松本印刷㈱ 袋井営業所  
静岡県袋井市新屋4丁目5-2  
TEL 0538-43-6300

